
俺の人生は雨のち雨！？

へたれ度100%

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺の人生は雨のち雨！？

【Nコード】

N9529K

【作者名】

へたれ度100%

【あらすじ】

俺はフツーの高校生だった。部活もしてるし、ゲームだってするし、友達もいる。家に帰れば暖かい家族が待っていて、平和な日常があった。

だが、そんな日常があるときに破壊される。

それから俺の日常はフツーの日常から、非日常へとか変わったのだっ
た・・・

時間をとめられる？

風より速く走れる？
ふざけるな。

- そして、俺はそんな危ない連中と非日常と送って、しかもそんな連中とともに戦っていかなければならなくなってしまうのだった・

崩れた日常（前書き）

はじめまして。

うまく書けるかわかりませんが、と・とりあえず頑張ります!!
これからどうぞよろしくお願いします。

崩れた日常

「私たちはお前の味方よ。」

誰かの叫び声がきこえた。

誰かが倒れる音がした。

誰かが斬られるのをみた。

どういうことだよ!?

このときの俺にはさっぱりだった。

目の前の現実が、夢かパラレルワールドか幻覚か……

それらを信じたい。

意味わからねえよ……

ふざけんなよ……

俺の名前は「にし西野な騎士」。

まあ、よく「騎士」とかいて「ナイト」と読むので、格好良いといわれる。

自分でも結構この名前は好きで、親には感謝している。

「はぁ……」

「今日は意外と遅かったじゃないか。」

俺は陸上部に所属している。

専門は中距離であり、詳しく言えば800mと1500m。

一応どうにか県大会にでれるレベルだ。

出身の「音島」中学は、陸上と剣道が非常に強かった。

剣道には、全国2位の男と関東大会レベルの奴らがたくさんいた。陸上は長距離が強かった。

俺はこつてりしぼられながらもしっかりと練習して、己を鍛えた。そして・・・今も陸上という競技が好きだから、陸上部にいる。

「おい、騎士。2分24秒なんてお前らしくないじゃないか。」

「不調だよ・・・不調。」

ちなみに今は800mを走り終えたところである。

「なあ・・・今日、帰りにゲーセンいかね？」

友達が誘ってくるのだが・・・

あいにく、最近不調続きなので、少し休んでおきたい・・・

「ごめん。今日、疲れてるから・・・また今度誘ってくれよな。」

「OK。」

とりあえず一刻も早く家に帰って休みたい。

急いで帰りの支度をして、家に向かう。

俺の高校生活はそれなりに充実しているだろう。

部活は楽しいし、友達もいるし・・・

これで「彼女」がいれば完璧なのだが・・・

まあ、前に「音島」中学である女性に告白しまくって、許可してもらったのだが・・・

俺がやらかしたせいで、1週間もたずに終わった。

まあ、あれは確実に俺が悪い。

だから、高校こそは、あの失敗を繰り返さないようにしたい。なんて思ったりしている。

家から高校までは電車を使っている。

徒歩の時間もいれて約20分とそこまで遠くもないが、今の状況だと座ると電車で寝てしまいそうなので、たつことにしている。

どうにかこうにか我が愛しの家についた。

インターホンをならし、玄関の扉をあけて、靴をぬいて、家のなかにあがる。

「おかえりなさい。」

「ただいま。」

「お兄ちゃん、お帰り〜。」

うちは母と父と妹・・・

それに俺で4人家族。

「今日、ご飯なにがいい？」

「なんでもいい。」

母も父も優しい。

妹も妹らしい妹だ。

すごく平和だ。

やっぱり家が一番癒される。

「悪い、俺疲れてるから寝るわ。」

「また？ちゃんとご飯のときには起きてよ？」

「ああ。」

父は午後7時ぐらいに家に帰ってくる。

それから家族そろって飯を食べるシステムだ。

「大丈夫だよ。起きなかつたら、私がお兄ちゃんを起こしにいつてあげるから。」

「サンキューな。」

とりあえず7時に父が帰ってくるので・・・
7時に目覚ましをセットして寝よう。

ゆっくりと自分の部屋がある2階へとあがっていく。

自分の部屋のドアをあけて・・・バツタリ。

ああ・・・意識が遠のく・・・

・・・

・・・
・・・
「・・・て。」

ん？

誰だよ・・・

人が気持ちよく寝ているというのに・・・

「おきてつてば。ねえ、お兄ちゃん！」

「！」

妹が頬を膨らませている。

「やっと起きた・・・もうご飯だってお母さんがいってるよっ。」

「悪い・・・寝すぎた。」

急いで階段を下る。

食卓につくと、もう父が席に座って、テレビをみている。

母も最後のおかずをもってきて、いすに座った。

「遅いぞ。」

「しゅめん。」

父は微笑みながらに言う。

「今日はどうだったんだ？」

「めっちゃくちゃ疲れたよ・・・最近不調だから思ったようにタイムもよくないし。」

「まあ・・・そういつときもあるさ。家でゆっくりと休んでおきなさい。」

と父は言う。

実際、家に帰ってきての昼寝だけじゃ足りない。

やはり少し早めに寝るべきか・・・

「じゃあ、いただきます。」

「いただきます。」

なんて復唱をして、箸を手取る。

「そういえばさあ、昨日お兄ちゃんがね・・・」

たわいもない話をして、盛り上がり、笑いあう。

これが俺の日常。

平和で楽しくて・・・

俺は幸せな人間だ。

飯を食べ終わり、食器を片付ける。

「母さん、風呂できたら起こして。俺、また寝てくるわ。」

ぶつちやけうちの風呂は遅い。

30分程度はかかるので、その時間も有効に使つのだ。

自分の部屋のベットへ吸い込まれるかのように倒れる。

・・・あゝ・・・もうたちたくねえ・・・

・・・
・・・
・・・
ん？

・・・あれからどれだけたっただろうか？

今・・・ドン！って音がした気がした。

母が食器でも落としたのだろうか・・・

繊細な母が食器を落とすなんて珍しいけど。

あ、父か妹がこけたのだろうか・・・

時計をみてみると、あれから15分しかたっていない。

・・・あれ？

時計がとまっている・・・

「また電池切れかよ・・・」

地味にイラツとくる。

まあ、あと15分もあるし・・・

もう少し寝ようかな・・・

そう思ったときだった。

「きゃあああああ！！！！」

「！？」

なんだ！？
今の・・・

母の叫び声。
ただ事ではない。
完全に眠気が覚める。

「や・やめる！！」

父の声もきこえた。

なんなんだ！？
とりあえず立ち上がる。

すると階段を駆け上がってくる音がした。

「・・・」

今の2人の叫び声からただ事ではない。
こぶしに力が入る。

ドアがあいた。

「お兄ちゃん！！」
「！！」

入ってきたのは妹だった。

「お兄ちゃん！パパとママが・・・ママが・・・グスッ・・・」
「お・おい？なにがあつたんだ？」

妹は下を向いたままだった。

そんなとき、さらに階段から上ってくる音がした。

ゆっくり・・・トン・・・トンと。

くそ！

よくわからないが・・・

これは非常にまずい状態だ。

昔野球をするのに使っていた金属バットを握り締める。

恐怖で脚が震えている。

今までにこんなこと・・・なかった。

「お・おにいちゃん・・・」

妹が俺の後ろに隠れる。

目の前を見てみると・・・

1人の女性がたっていた。

俺と同じぐらいだろうか。

「か・刀!？」

右手には日本刀のような細くて長い剣があつた。

ま・まさか!?

いや、だが血はついていない。

ということは父と母は殺されてはいないだろう・・・

「そいつから離れる。」

「え?」

彼女は刀の剣先をこちらに向け、はっきりいった。

そいつ・・・というのは妹のことだろうか・・・

というか、いい加減にしてくれよ。

こいつは何かの遊びのつもりなのだろうか?

「お前・・・誰だ?人の家に勝手に上がりこんで。」

「・・・」

相手の反応はない。

彼女の視線は俺ではなく、その後ろの妹にいていた。

するとまたしても階段を上がってくる音。

今度は走ってきている。

「1階はクリア。」

ドアが開くと同時に声が聞こえる。

今度は男性。

年はとりあえず俺よりは年上だとわかる。

「よし。あとはそいつだけ・・・か。」

男は長い槍をもっている・・・

先端が3つにわかれていて、かなり鋭いものだ。

クリアって・・・

拉致でもするつもりか。

・・・こいつら・・・

何が目的だ？

金？

うちにはそんなに金なんてねえぞ・・・

「お兄ちゃん・・・助けて・・・」

妹は俺の後ろにしがみついている。

「お・おう！」

怖い・・・

歯がガタガタとなる。

脚も震えている。

俺がこんなに怖いんだ・・・

妹はもつと怖いだろう・・・

このすべてがひっくりかえったような状況のなか、無言という名の
気まずい空気が流れる。

このままの状況はさすがにまずい。

「お・お前ら・・・何が目的だ？」

「・・・」

相変わらず彼女は黙っている。

「お前さんだ。」

「・・・は？」

男は俺に指をさして言う。

・・・ゆ・誘拐!?

やっぱり拉致つてやつなのか・・・

しかしながらわからないこともある。

それはなぜこんな「刀」や「槍」やらを使うのか、ということだ。

今の時代は極端に言えば「マシンガン」とか銃類もあるだろう。

それになぜ家で行う？

こんな住宅街なら叫び声ですぐに近所の住人がやってくるはず。

待て待て。

というか、なんで先ほど叫び声にしたにもかかわらず、町は静かな
ままなんだ・・・

まるで時間がとまっているみたいじゃないか。

「ら・拉致ってやつか？」

「はぁ……」

目の前の女性と男性は顔を見合わせて、ため息をついた。
ということは拉致ではないのだろうか。

そんなことを考えていると、目の前にいたはずの女性がいなくなっている……

「え！？どこに……」

すべての言葉を言い終わる前に、女性は俺の隣をスツと越していった。

それはとめられる、なんてスピードではない。
とんでもないスピードである。

俺はハツと我にかえった。

「くそっ！！」

金属バットを再び強く握りなおし、このわずかな空間の俺の部屋のなか……

俺の隣を越していった女性をとめるため、後ろを向こうとする。

すると、金属できているはずのバットがいきなりまっふたつにな
った……

「!？」

「頼むから落ち着いてくんねえかなあ……」

槍をもった男が苦笑しながらにいう。

何があつた!？

もう意味がわからない。

恐怖と混乱で頭のなかがおかしくなりそうになる。

「!」

再び俺が妹のほうを向くと、妹は倒れていた。

見てみれば、侵入してきた女が刀をぬいていた……

まさか……斬った!？

だが、やはり血はでていない。

「くっ……」

妹は倒れていたものの、意識はあるようだった。

とりあえずはよかった……ホントに。

「・・・」

女は倒れている妹を無言で見下ろす。

その目は、冷たい目・・・

というのを通り越して、寒気がするほど無感情な冷酷な目。

「・・・ゼロは・・・渡さない。」

すると妹は小さい声がたしかにこういった。

「ゼロ」・・・

何のことだろうか。

ただわかることは、こいつは俺の知っている妹ではないということ。こいつもまた、目の前の刀を片手にもっている女のように無表情・無感情。

その目には先ほどの恐怖など微塵も感じられない。

まるで誰かに洗脳されているかのようだ。

そんなこの無感情な間に、俺の恐怖心はますます強くなる。

「將軍さま・・・」

妹は倒れたまま、ゆっくりと片手を天井に向けあげていく。

「しょ・將軍さまにバレれば・・・お前・・・なんか・・・」
「そっ。」

目の前の名も知らない女性は妹が言葉を言い切る前に、自らの言葉でピリオドをうつた。

「じゃ、あの世で將軍さまにあえるといいんじゃない？」

そういうと、彼女は刀の刃先を下に向ける。

「なっ!?!」

おい、まさか・・・

急に寒気がほとばしる。

血もでてない。

きつと何かの悪ふざけだ。

誰かがどっかに隠したカメラをつたってみてて、楽しんでるんだ。

そう自らの心に釘をさして強制して思わせている。

だが、それでも俺はその光景を最後まで見れなかった。

目を背けた。

きつとその刀の先は妹の顔面をめがけて落下していったのだろう・・・

「や・やめる!?!」

俺は心のなかで叫ぶしかなかった。

そのほんの少しあとだ・・・

ザシュツ!

というグロい音がした・・・

「ふう・・・これでクリアだな。」

「ったく・・・こんなのに30分ってのは考えすぎだったんじゃないかねのか?」

「いいえ。むしろここからが大変ですよ?」

いつの間にか目の前にもう1人男がいる・・・
手にはノートパソコン。

「槍」や「刀」といったものではなく、今度は電子機器。

だが、そんなことはどうだっていい・・・

妹がどんな状況になっているのかを確認したい。

そっと・・・

少しづつ・・・

俺はそむけた目を妹のほうへ向けようとすると、不意に声がした。

「見ないほうがいいですよ。」

それは三人目の男が放った言葉だった。

「え？」

俺はその言葉について戸惑った。

けど・・・

どうすればいいってんだ？

フツー、この状況だったら誰だって戸惑うだろ！！

「見なくても確認したいことは私が報告しましょう。」

彼の言葉遣いや発音は非常にやわらかい。

無感情といったものなど感じさせない。

ただこの状況で暖かみを感じる言葉遣いだ。

「あなたの妹さんは先ほどお亡くなりになりました。」

その暖かな言葉は、一気に俺を凍りつかせた。

絶望しかなかった・・・

めまいのようなふらつきがくる。

頭が痛くなる。

心臓の鼓動が異常なまでたかい。

「・・・怯えることはない。」

女がいった。

・・・怯えることはない？

この状況で怯えない人間なんていてたまるか。

「私たちはお前の味方だ。」

彼女はそういうと、こちらにまた一歩一歩と近づいてくる。

脚が震えていて、思うように動けない。

後ろに下がりたい・・・

けど、うまく動かない。

「く・・・くるな・・・」

「安心しろ。」

「くるなよ・・・くるな！！」

なぜか知らんが、折れたバットの先を・・・
半分になったバットの先端を彼女に向ける。

「ほら・・・ね？これから時間がかるでしょ？」

「・・・」

誰がどうみても手がガタガタと震えている。

こんな状況ではどんな相手でも楽勝だと思っだろう。

俺は妹のようになるのだろうか・・・

俺はいつたいどうすればいい？

すでに俺の頭のなかは真っ白だった。

ここから俺のありふれた幸せな日常は壊れていく。
いや、正確にはもう壊れた。
そしてこれから・・・さらに壊れていくのだ。

「崩れた日常」

完

崩れた日常（後書き）

いきなり最初から長くなってしまいました（申し訳ないです）
これからよろしくお願いします。

脱出

俺の部屋はあまり広くはない。

そこには、謎の殺人集団3人と俺・・・

そして・・・まだ確認はしていないが、妹が倒れていると思われる。

「あちゃ〜・・・完璧に怯えてやがる・・・」

「無理はないでしょう。」

男2人は話しているが・・・

これを見て怯えないほうがおかしいだろ！

「く・くるな！人殺しめ！！」

震えはとまるどころか大きくなっている。

「はあ・・・」

すると女がため息をついた。

「・・・安心しろ、お前の命は奪わない。」

彼女はそういうと、剣を鞘におさめた。

いくら剣を鞘にいれたからといって、油断はできない。

何しろ、あんなに早くこいつは走れるんだ・・・

「あ、すみません、こっち向いてもらえますか？」
「？」

俺はついそちらを向いてしまった。

向いた瞬間に青い光がパツとひろがった。

「……お前……」

槍をもった男と女はあきれている。

「こうでもしないとまともに話しを聞いてくれないでしょう……」
「……」

彼は苦笑している。

そのときは気づいてなかったが……
あの光を見た瞬間に、恐怖心が消えた。
それどころか、フツの友達のように見えるようにすらなっていた。
・
・

これがあの青色の光が原因と俺が知るのは、だいぶ後になる。

それから少しの間があいてから、また女性が口を開いた。

「こいつらは「人」じゃない。」

「・・・は？」

どうみたって人だ。

今まで一緒に暮らしてきた、家族だ！

それを人じゃないなんて・・・

こいつら、何様のつもりだ！？

怒りが芽生えてくる。

「俺の家族が人じゃないだと？」

殺人犯の言い訳にしかきこえない。

こんな殺人鬼どもと・・・まともに話せている自分が怖い。

そしてこいつらは俺の家族を否定した。

それは非常にイラッ・・・

を越える怒りが芽生えてくる。

妹もこいつらに本気で殺されたかもしれない。

そう思うと怒りが抑えられなくなってくる。

「ああ。こいつらは「ゲルレレ」と呼ばれる化け物だ。」

・・・これは「笑え」っていうことか？

そんなバカげた話、誰が信じるのだろうか・・・

「現に斬ったが・・・血などでていない。」

たしかにそれはそうだ。

よく見てみれば、血などでていない。

だからこそ、誰かが考えたイタズラだという考えが思い浮かんでいった。

けど・・・

今ではその考えも危うい。

こいつらは妹を殺したかもしれないんだ。

「まあ・・・こんな話を急に言われても信用できませんよね・・・」

そういうと男は香水のようなものを出す。

「よく見ていてください。」

そういうと、それを倒れている妹にかけた。

やっと妹を確認できた・・・

だがそこには無残な光景しかひろがっていなかった。

その光景を見て、一気に肩の力が抜けた。

それは安心などではない。

絶望である。

すべてを失ったかのように力が抜け、ペタンと無意識に座り込んでしまっていた。

「おっと・・・これは失礼。」

彼は香水のようなもののふたをあけつつ言う。
そして再び青い光が光った。

「どうか目を背けずに見ていてください。」

さっきは見るな、といったのに・・・
よくわからない連中だ。

いつの間にかあんなに絶望したはずなのに・・・
妹の無残な姿をフツーに見ている自分がいた。

それから少しして・・・
妹の体が、ぶれ始める。
そして、だんだんと大きくなっていき、見た目もおかしくなってい
く・・・

最終的には・・・
毛が長くモジャモジャとしている・・・
キバと爪がとんがっていて長い・・・
目が赤く、体系は人型のような二足歩行できそうな感じの・・・
醜いモンスターのようになった。

「これが「ゲルレレ」の正体です。もっともこいつは偵察が本業だったみたいなので、あまりいかつくはありませんが。」

「……ありえない話だ……」

そ・そうだ。

よく映画とかであるじゃないか、こづいこの。
きつと何かのトリックがあるんだ……」

「どうせなら、下に転がってる2体でも試してみるか？」

「……え？」

転がってる？

……まさか……」

まさか！！

「お前の母と父もゲルレレだった。」

「……どうしてだ……」

「は？」

「どうして殺したんだ！？無抵抗だっただろうが！」

母は叫んでいた。

あの状況から対応できるとは思えない。

父は「やめる」といった。

無抵抗のしるし。

妹だって・・・何もってなかったのに・・・

「命令だから殺した。それだけだ。」

「命令？」

「そつだ。」

なんだよ・・・それ。

こいつらのリーダーは命をなんだと思ってるんだよ・・・

俺のなかで怒りが爆発した。

「ふざけんなよ!!！」

「さつき使ったばっかなのに・・・短気って嫌ですねえ・・・」

と彼は俺をおちよくるかのような言葉を放つ。

それと同時にまたまた青い光がピカツと光った。

「百歩譲って、俺の家族がゲルレレとかいうのだとしても・・・見た目が違うから・・・それだけでどうして殺すんだよ？同じように生きてたのに！」

「ゲルレレは危険以外の何者でもない。」

そんなの・・・わからないじゃないか。

人間が勝手にきめた標準でしかないかもしれないじゃないか・・・

「現にゲルレレに襲われて殺されている人々は多くいる。」
「・・・山のなかでか？」

からかいを入れる。
もうヤケくそだ。
ゲルレレとかいうのが、こんな体をしてるなら・・・
街中でやるのは無理がある。

「ゲルレレは普段・・・人になってごまかしている。」

俺の家族のように・・・
ってか？

「人が人を誘うのはおかしいことではない。人になりきって・・・
人気のないところへ呼び、殺す。」
「・・・」

そんな危ない世界があつてたまるか。

「それか・・・今の私たちみたいに時間をとめて殺しまくるか・・・
どっちかね。」
「時間を・・・とめる？」

たしかに時計は止まっている。
だが・・・

それだけで時間がとまっているなんてわからない。

だが目の前でこれだけ意味わからないことが起こっている。

もう時間がとまったり地球が実は火星だった、なんて話しをされても俺は驚かないだろう。

ま、もちろん信じないが。

「まあ、時間をとめても、私たちの同業者とゲルレレは動けるからあまり意味はないのだが・・・せめて、普通の人間を相手にしたくないときやバレたくないときに使う。現にゲルレレは時間をとめて人を殺しているから皆がゲルレレのことを知らない。」

「なあ？じゃあ、なんで時間をとめても意味がないんだ？いくらあんならでも動けるだけだろ？」

動けるだけで相手の位置はつかめないだろう？
意味なくないじゃないか。

「時間をとめるというのは、その時間を束縛するということだから結構大きな力を必要とするのよ。その大きな力を私たちが、ゲルレレが探知して、向かう。」

「時間をとめるなんて・・・そうとうヤバイことをしてる印だからな。」

時間をとめると、相手にバレる・・・か。
ということは今も？

「だからあんまり時間がかかるとゲルレレの増援がきたりするのよ。
・・・」

「それって・・・今も？」

「応おそるおそるにきいてみる。」

「ええ。例外なんてないわ。」

「だから早く撤収したいんだがな。」

男は言う。

「・・・ならいつそ早く撤収してくれ。」

そのあとに警察に相談して・・・

逮捕してもらおう。

いや、その前に風呂に入ろう。

いや、もう一回寝るのもいいかもしれない。

きつとおきたときには、「・・・という夢を見たんだ」というオチ
になっているはずだ。

「時間をとめているというのは何者かが何かをしているという証拠。
だからそれを感じて、ゲルレレも私たちの同業者もやってくる。」

こいつらの同業者ということとは、何か組織でもあるのだろうか……だが、命令と聞いていたから……おそらく組織なのだろう。

「ちなみに時間をとめて動けるのは、私たちや同業者のような者が、ゲルレレか、あなたのような才能を持っている人よ。」

そんな才能なんていらない……

なんて思っただけでいまさらながらに気づく。

不思議なことにこの話しを俺はいつしか信じ始めていた。

さらに不思議なことに、先ほどまであった恐怖心や怒りがなくなっていた。

「ねえ、フェニックス……あとどれぐらいとめられる？」

「あと10分で限界です。」

「そう……さあ、きて。」

彼女は手を差し伸べる。

誰がいくもんか……

いったら何があるかわからない上に……

それにもし俺がゲルレレだとしたら、殺される可能性だってあるかもしれない。

そう、妹のように。

「時間をとめるにはタイムリミットがあるの。時間が動き始めたら、普通の人間すら敵になる。」

意味わからねえよ・・・

こいつらはSF小説とかファンタジー小説の読みすぎなんじゃないのか？

「・・・なんで俺は殺さないんだ？」

素朴な疑問である。

なぜ俺をつれていこうとする？

生け捕り・・・か？

いや、生け捕りなら妹もできた。

それを躊躇なく殺した・・・

なら・・・なんで俺は殺さない。

俺だって、家族がゲルレレとかいうやつだったんだから・・・
ゲルレレの可能性は低くはない。

「あなたは私たちと同じ力をもってる。しかも・・・莫大な力を。」
「・・・は？」

「だからゲルレレがあなたを引き抜くために家族をゲルレレにした。」

ちよつと待て・・・
今、家族をゲルレレにしたといったよな？
ゲルレレとかいうのは、増やしていくのか？
なら・・・なぜ俺はゲルレレにしなかった？

「家族をゲルレレにできる力があるなら・・・なぜ俺をゲルレレに
しなかった？」

「ここまでいってもわからないの？あなたの家族はとっくの昔にゲ
ルレレに殺されてたのよ。」
「!?!」

ということとは・・・
仮にだ・・・
仮にだが・・・
こいつらの話が本当だとしたら、俺は家族を殺した化け物と一緒に
食事をしてたということか・・・
今さっきまで・・・

本物は・・・
俺の家族はゲルレレに・・・
殺されていたというのか？

再び大きな絶望・・・
目の前が真っ暗になったようだった・・・
世界が・・・暗くなった気がした。

だが、俺はそんな簡単に人の言葉や運命という言葉やありえない話をあつさりと信じきるような人間じゃない。

「ゲルレレは人々を敵視してる。だから・・・見えないところで人々を少しずつ殺していくの。」

「どうして表向きに殺さない？」

「私たちが出現するから。」

ゲルレレを倒す・・・

いわば「狩人」ってところか。

じゃあ、こいつらの組織というのは、そんな「狩人」の集団・・・

「相当派手に動いている奴じゃないと・・・人の形をしてごまかしてるときは私たちでもわからないのよ。」

「・・・」

冗談じゃない。

ということとは・・・

もしかしたら、そのゲルレレとかいう殺人鬼が街中を普通に人の形をして歩いてるってことか？

「それに・・・あなたからはゲルレレとしての「気」を感じない。」

「・・・」

「・・・どう？フェニックス。」

「調べてみましたが、普通の人間です。」

「そう・・・まだ大丈夫だったのね・・・よかった。」

よくわからないが・・・

俺はとりあえずゲルレレではないらしい。

・・・どうやって調べたのだろうか？

「・・・さあ、残りのことは本部に行く途中で話す。きて！」

どうする？

信用・・・できるのか？

彼女たちの話はいろいろとすごいし、ありえない。

だが、さきほどもいったように俺はそんな簡単にこいつらの「ご都合主義なファンタジー」を信じたりはしない。

こいつらと話していて覚悟を決める時間は十分すぎるぐらいにあった。

この際、白黒はっきりさせてもいいかもしれない。

・・・だが・・・

最後の確認・・・

そう思っていたときだった。

「・・・」

「まだ信用できてないってか・・・」

「神速、ナイフを貸して。」

「え？あ・あぁ・・・」

男はいろいろと説明してきた女にナイフを渡す。

すると・・・

ナイフで手のひらをきった。

「っ・・・」

「お・おい・・・」

手からは赤い血がポタポタとたれている。

「私たちは人間よ・・・このとおりね・・・見てて。」

するとナイフできった手のひらを見せてきた。

おい・・・グロいから見せるなよ・・・

・・・ん？

あることに気づいた。

傷口がふさがっている？

そして俺はそんなフツーなら絶対目を背けるような光景をまたしてもフツーに見ていた。

いったい俺はどうしてしまったのだろうか・・・

「私たちは皆、いろんな力があるの。たとえば、私は傷口が直るのが早いし、フェニックスは時間をとめたり、物事を調べられたりできるし、神速は名前のとおり、動きが私たちよりもぜんぜん早い。もちろん、他にもまだあるけど・・・後々にね。」

彼女たちが人間なのは認めよう・・・
そして俺は彼女の傷の治りの早さをこの目でみた。

だから・・・
彼女たちがうそをいっているとも思えない。

そこにゲルレレとかいうのも転がってるし・・・
映画とかのトリックにはよくできすぎている。

まあ、仮にだましましたら・・・
家族は生きてるということになるし・・・
殺されたら殺されたで家族と同じところへいける。

・・・もうどうとでもなれ。
とりあえず頼れそうなのは目の前にいる人たちしかない。

「わかった・・・行くよ。」

もちろん彼女たちの話は俺の中では認めていないことである。

「!?!」

が!

いきなり彼女たちの目つきがかわった。

何かまずいことでも言ったか?

「この感じ……」

「ゲルレレか……チツ、面倒なことになりやがった。てめえがいつまでもイジイジしてるから!」

んなの、いきなり信じろつてのが無理な話だ。

「残り時間は?」

「2分。」

「逃げられる?……神速。」

「あいよ!まかせときな!」

すると神速と呼ばれる男は手を広げた。

そして、その手に二人が持っていたロープで自分の体と固定している。

「お前さんも早く固定しな。」

とりあえず俺もよくわからないが、この変な行動をすることにする。神速の手にロープを結びつけて・・・それを自分の体と固定する。

「できた。」

「よし・・・いくぞ！」

窓が勝手に開いた。

その瞬間、グイッと引っ張られる・・・

というか・・・

いつの間にかどこかのビルの上にいるし・・・

「起きた？」

「・・・あ・・・ああ・・・」

「お前、完璧に気を失ってたわよ？」

てか、気を失ったショックで今日のことを忘れてたかった・・・
ところが、うれしいことに！
記憶はバッチリと残ってる。

「今は・・・」

風が吹いている。

時間が動いているということか・・・

まあ、さっきの時間がとまってたというのはこいつらがいっただけ、実際どうだかしらんが。

「あなたの家にはもう戻れないから。」

「は？」

「さつき逃げるときにパトカーを1台見てな。・・・時間がとまっているなかで動いてたということは・・・」

ゲルレレが運転していたということか・・・
つまり・・・

ゲルレレとかいう奴らに、家は占拠されたと・・・

「とりあえず・・・本部に向かおう。」

「ここからは歩くぞ。」

「・・・なぜあんたの力を使わないんだ？」

神速と呼ばれる男の力を使えば、すぐ基地にもつけるのだろうか？

「あのなあ・・・何事にも限度つてのがある。さすがにきついんだ。」

「へえ・・・」

とりあえずついてく。

今の状況が彼女たちのいうことが正しいとしていたら・・・

もう死んだほうがマシなのかもしれない。

本部とやらについたら、「はい、どつきり終了!」
みたいなノリであることを期待するしかない・・・

仮にホントだとしても・・・

父さん・・・母さん・・・妹・・・

頼む、殺されたなんてことは・・・
ない方向で頼む。

そうだ、もしかしたらこいつらが知らないだけで・・・
こいつらの同業者が保護してくれているかもしれない。

そう・・・

夜空の星々に願うしかなかったのだった・・・

脱出「 完

「龍」と「龍王」と「龍王の盾」

薄暗い闇が渦巻き、ほのかに街灯が道を照らす夜・・・
風がふいた。

「やっと時間が流れはじめたか・・・」

その男は助手席でたばこをくわえながらに、夜空を見上げていた。
リクライニング式の椅子を倒して、寝ながらである。
車のフロントガラスがわれていて、そこから彼の足がでている。

「フリーユージェル將軍！」

すると、その車の隣に1人の男がいて、敬礼をした。

「よう、ヴェルナー中尉。どうだった、中身は？」

「家の中は生きてる者は誰もいません。」

その報告に、「將軍」と呼ばれる男はたばこを捨てて起き上がる。

「で？被害は3名か？」

「はい。」

「チツ・・・優秀な諜報員だったんだがな・・・一足遅かったか・・・」

彼はドアを乱暴に閉めて、外にでて、少しの間、手を合わせて、目を閉じる。

それから少しして、自らが乗ってきた車に蹴りをいれる。人間業ではない。

その車はまっ二つになってしまった。

まわりには「將軍」とよばれる男と「中尉」しかいなかった。

「せつかくいただいてきたこの車も意味なしだな・・・」

彼が乗っていた車・・・

それは「パトカー」だった。

今はその原型をとどめていないが・・・

「死体は？」

「すでにトラックに回収済みです。」

「そうか・・・」

家の裏側にはトラックが2台とまっている。

「將軍！報告します！！！」

「どうした、ロイヤー少尉。」

そんななかにもう1人男がやってきた。

「少尉」と呼ばれる男である。

「本部より帰還命令がでています。」
「……誰の命令だ？」

將軍は目を細めて、少尉に問う。

「基本的には「軍師」と「参謀」からです。」

「……」

「しかし、この命を受け、「男爵」がすでに本部に移動したと……」

「

「はぁ……」

その報告をきくと、少し呆れ顔で將軍はため息を一息つく。

「よし、俺らは撤退するか。」

將軍は目の前の家をにらみつけてそう言った。

「いいのですか？」

その言葉にヴェルナーが聞き返す。

「連中もバカじゃない。俺たちがここを占拠することぐらいわかってんだろ……」

「しかし・・・」

吹き付ける風が将軍の服をひらりひらりと舞わせる。
髪もそれにあわせるかのように舞う。

「わあ〜ったよ。第46小戦隊を待機させよう。」

裏手にとめてあるトラック2台には、各車に1個小隊を乗せていたらしい。

「73小戦隊は俺らとともに本部に撤退。」

「了解しました！」

（本部に帰ったら、ゼロの行方でも捜させますかねえ・・・）

将軍は夜空を見ながら、胸ポケットにあるたばこの箱からまた1つたばこをとりだし、トラックに乗ったのだった。

「なあ……いつまで歩くんだ？」

隣には合計3人の謎の連中がいる。

こんな奴らの話を信じ込むなんて俺もどうかしてるぜ。

あまりにも現実からかけ離れているのだ。

「もう少し。」

お隣の日本刀を、今は隠し持っている女性は、おそらく俺と同学年かそれより少し小さいかぐらい……
黒いロングの髪は風がふくたびになびく。

しかしながらに、彼女が「もう少し」と今日、何度言っただろうか……
悪いが5回はすでに聞いてる気がする。

先ほどからきいてもきいても、「もう少し」ときたもんだ。
俺はホントに暇人なんだな……と自覚してしまふ。

「……なあ？そつえば武器はどこにやったんだ？」

「保存した。」

「は？」

保存……

その言葉の意味は、そのままの状態に保っておくことのことをいうのだが……

「ああ・・・まあ、いってみれば、体の内部に取り込んだってところかな？俺たちの意思で武器をいつでも収納できる。」
相変わらず冗談がきつい。

「武器が体内の器官に反応して、濃縮されてからだの内部の一部になるの。」

いや、意味わからねえし・・・
これ以上いっても、意味わからない答えがかえってくるだけなので、質問をかえることにする。

「てか・・・あんた、ゲルレレのこと、詳しいのか？」

「まあ、専門だからな。」

「神速」と呼ばれる男は言った。

髪はボサボサとしているが、なかなかの男前である。

年も・・・俺より少し上ぐらいだろう。

「今までにいろんなゲルレレとやり合ってきましたからね。」

先ほどまで「フェニックス」と呼ばれていた男は小さなノートパソコンを使いながら言う。

歩きながらパソコンというのはなかなか器用なことだ。

彼は彼らの話によると、時間をとめたりする、いわば「ストッパー」

の役目を果たしているらしい。
地味にイケ面なのが、羨ましい。

彼は「神速」と間逆に整った髪をしている。
手入れをしているのだろうか？
年は俺と同じぐらい。

だが・・・
こいつは確実に「天才」のオーラをだしている。

「日本には・・・ゲルレレは多いのか？」
「いや、日本は私たちの仲間が多く警備してるし、3日ごとに日本中を確認してるからいないはず・・・だった。」
「・・・」

いないはず・・・ねえ？

さっきの話と矛盾している。
普通に「ゲルレレ」がごまかしているときは見つけられないんじゃないかなかったのか？

「本部にある「セクレット」と呼ばれる隠密機械で検索するんだぜ？これが結構ボロいんだよ・・・」
「時間もかかりますしねえ・・・日本全体を確認するのに2日はかかりますよ・・・」

「だから、「セクレット」を投入してるのは、日本やそれ以下の面積の国のみ。だからアメリカとかロシアは異常にゲルレレが多いの。」

「

それは異常に物騒だな・・・
といたいところだが、残念ながら笑える話でもない。

もちろん信じているわけではない。

が！

現に「フェニックス」と呼ばれる男が「ゲルレレ」の正体を見せたり、隣の女の子が傷の治りが早いことを証明してくれた。

「さつき同業者とかいつてたけど・・・なんかの組織なのか？」

「私たちのチーム名は「旋律の剣」。」

これまた微妙な名前ときたもんだ・・・

「各地に仲間がいるし、時にはチーム合同で作戦を行うこともある。」

ということとは・・・

団結力があるということか・・・

「で？あんたらの力つてのは、あんただけが使えるのか？」

「ええ。私たちは特殊な力をもった、人間の異質、「リクルート」と呼ばれる種族よ。」

人間の異質・・・

「リクルート」とよばれる種族などきいたことがない。

「これは私たち「リクルート」と呼ばれる人間のみが持てる力で、普通の人間が特訓しても身につかない。」

「しかも同じ「リクルート」でも、人によって力も違いますしね。」

特殊な力というのはどこまででも特殊だということか。

「まあ、種族といっても一緒に暮らしてるわけではない。いってみれば「血液」みたいなものね。」

「血液？」

「ええ。血液っていうのは生まれながらでしょ？それと同じ。かなり低い確率で「リクルート」の力をもった人間が、生まれるのよ。」

いわば、その力を持つことができるかはすべて「ランダム」ということか。

「日本はリクルートの力を持った子が生まれることが多い。」

「現に俺たちも皆、日本人だしな。」

「「旋律の剣」が日本の警備を強固にする理由はそこにもあるんですよ。」

どこまでもSFというか・・・

ファンタジーな話である。

というか、専門用語が多すぎてついていけない。

「リクルートは「ゲルレレ」と同様に普段から少し力を放ってるの。だから私たちも「ゲルレレ」もリクルートを見つけたことができる。」

ちよつと待て。

なら生まれたときに接触すればいいじゃないか。

今の俺はもう高校生だ。

遅すぎじゃないか？

疑問は不信へとかわっていく。

「なんで今頃になって俺のところへきた？」

「リクルートの力は生まれた時には不完全で力を放たないの。」

それは生まれたときは「リクルート」でも普通の人間ということだ。

「でも、成長の過程で徐々に無意識にリクルートの力は目覚めていく。まあ・・・これは個人差があるんだけどね。」

俺の場合は今だったということか・・・

「ちなみにお前さんが目覚めたのはここ1週間。最近運動で不調じやなかったか？」

「！」

たしかに最近不調だった。

陸上で、不調真っ盛りだった。

「あ・ああ・・・」

「それが目覚めに力を使ってるから、運動にまわす力が残ってない・・・目覚めのしるしね。」

つまり・・・

俺の体は勝手に「リクルート」とかいうわけのわからない変な力に目覚めて・・・

その目覚めと、力を使いこなすための体作りのために体力が削られ、不調になったということか・・・

彼女たちのいうことは到底信じられないことばかり。

だが、俺が不調だったことを知っていて、証明も先ほどにした。

だんだんあまり信じたくないのに、「信じる」という道へ進んでいくようにしている自分がいた。

「あなたの場合、特に撒き散らす力が大きかった。異常なほどにね。だから結構早く探知できたの。」

「まあ、それは「ゲルレレ」も同じだけだな。」

「いやあゝ、いつになつたら引き抜き命令がでるのかと思えば・・・発見から4時間後ですよ？早いですよね？」

その2時間の間に「ゲルレレ」は家族に摩り替わった？
んなバカな。

だが・・・「ゲルレレ」も時間をとめられるとしたら？
・・・可能である。

「ゲルレレの連中は「旋律の剣」よりだいぶ前に気づいてたみたいだけだな。」

いつかはわからないが・・・

「ゲルレレ」だって時間をとめられる。

いつでも家族に入れ替われる。

頭のなかには「絶望」の2文字しかでてこない。
家族の無事を信じたい。

けど・・・

それでも不安で不安でたまらないのだ。

「あなた、運がいいわよ。普通、「リクルート」を「ゲルレレ」に発見されたら殺されてたわよ。」

だが、家族がゲルレレになっていたということとは……殺すつもりだったということは否定できなくもない。

「家族になりすましたってことは……ゲルレレも引き抜くつもりだったのか……」

「え？」

「あなたの力はさつきもいったとおり、異常に高い。それはそれだけ大きな力をもってるということなの。つまりゲルレレ側からすれば、敵にすれば厄介だけど、味方にすれば心強い。そういう存在。」

ということとは「旋律の剣」も俺を引き抜こうとしているということか……

「私たちの任務はあなたの護衛と引き抜き。」

「……なあ、なんで俺を引き抜こうとするんだ？」

力が強いから？

それだけか？

「力が強いから……そして、今、「旋律の剣」は人員不足なの。」

「え？」

「3週間前も、アメリカの地域基地がゲルレレによって破壊された。その基地の仲間は全滅だった……」

「……」

再び気まずい雰囲気になる。

「だから人員不足だから、リクルートの力をもっている人員を1人でも多く入れたがってるのよ。」

「……なるほどね。」

夜の町々の光が鮮やかに照らすなか、静かに4人は歩く。夜の静粛が、気まずい空気をより気まずくさせる。

「それより……さっきのゲルレレの言葉……」

「將軍さまってやつか……」

「將軍ということは……フリーゲルですかね？」

どうやら、フリーゲルというのは、ゲルレレの將軍らしい。先ほどはパニックって何一つわからなかったが……冷静にきけばわかるものである。

「いや……フリーゲルは中東でドンパチをやってたはず……なんでこんなところ？」

その言葉を隣の名もわからない女の子が発したとたん……皆がこちらをみた。

「やはり……いつ目当てか……」

「連中はこいつのことを「ゼロ」って呼んでましたしね。」

「チツ……面倒な奴がきたもんだぜ……」

やはり將軍と呼ばれるほどのゲルレレ……

強いのだろうか……

先ほどのゲルレレの体格で相当なものだったから……
將軍とよばれるゲルレレはどんなものだろうか……

「となると「龍」関連かよ……最悪だな……」

「ですね……」

「じゅん、わかるように説明してくれないかな？」

そついつと皆がこちらをにらんだ。

「いや、説明してください。」

訂正しておこう……

うん、それがいい。

「とりあえずさっきのゲルレレ3体はフリーユージェルと呼ばれるゲルレレの將軍の部下みたいね。」

そこまでは理解している。
問題は「龍」とかそこら辺である。

「将軍はゲルレレ最大の大同盟「龍」に属してるゲルレレよ。」
「だ・大同盟!？」

ゲルレレもやはり生き物・・・
同盟を組んで、人間に対抗してくるということか？

「むしろ、「龍」に属さないゲルレレのほうが珍しいがな。」

彼の言葉から察するに・・・
ゲルレレの基本は皆、「龍」という大同盟に属しているということ
だな。

「で、そのトップが「龍王」^{エンゲージ}。」
「エンゲージ?」
「ええ、「龍」の「王」とかいて「龍王」よ。」

エンゲージ?
龍王・・・
ものすごくイカついイメージがある。

「で……その「龍王」を支える「龍」の幹部みたいなのが「龍王の盾」エンゲージリング。」

「古代遺跡には龍王を囲むように「龍王の盾」の連中がいたから、そこから「リング」という名がついたんだろっな。」

古代ということは……

昔もいたということか……

「將軍はその「龍王の盾」の1人？」

「そう。彼はどつと3000年は生きてるって言われてるわ。」

3000年!??

ゲルレレというのは、そんなに生きてるのか!??

「なあ……一応きくけど、ゲルレレに寿命ってのはあるんだよね?」

「わからない。」

それって……

徐々に増えてるかもしれないってことじゃないか……

「・・・というか、こんなにまだ出会ったばかりの信用できない俺に話しちまっていいのか？」

「いいのよ、これぐらいのこと、ゲルレレの連中も知ってる常識だし。」

そんな常識、誰が考えた!?

考えたやつ、出て来い!

そしたらそいつにその考えは「おかしい」というまで殴り続けてやる。

「!?!」

不意に強い力を感じた。

「・・・」

わかる・・・

今、横を通り過ぎた人だ・・・

「ねえ?きいてるのか?」

「え、あ・ああ・・・」

「何かあったの?」

だが・・・

3人は気づいていなかった。

俺の思い過ごし……か。

「……あれが……」「ゼロ」。

騎士が感じたのは正しかった。

その男は闇に紛れ、ニヤリと微笑むのだった……

「おかえりなさいませ、將軍。」

ここはどこにあるか……

どんな場所か……

まったくわからない場所。

ただ、多くの大きな柱がずらりと道の隣に並んでいる。

「おう、セバート。」

「番人」セバート。
それが彼の正しい名前だった。

「奥で皆様がお待ちです。」
「サンキュー。」

將軍は、ヴェルナーとロイヤーをつれてその静かで薄暗い廊下を歩く。
静かな空間に彼らが歩く音が響く。

やがて広い広場にでた。
そこには何人かの人……
の形をしたゲルレレがいた。

「遅かったな。」
「悪い、遅れちまった。」
「悪い？」「ゼロ」を逃がしておきながらよくいいますね？龍王閣下の意思に背くつもりですか？」

めがねをかけて、杖を使ってたっている、爺がいう。

(チツ……もうつたわってやがったか……)

フリーユージェルは苦笑する。

「うるせえな。こつちだつて大変だつたんだぜ？」

「兵をケチるからそうなるんです。」

「あんたは兵を無駄遣いしすぎだ。だから人間に殺されるのが多いんだ。」

「まあ、まあ、いいじゃないか。2人とも。」

すると今度は1人の若い男が歩いてくる。

「インドラ男爵。貴様、この私の意見を崩すつもりか？」

「いいえ。ただ仲間割れは部下の指揮低下につながることを「軍師」であるあなたはお気づきはずです。」

「・・・」

「軍師」ゼンメル。

冷静で冷酷、「旋律の剣」のアメリカ地域基地の破壊を指揮したのは彼だった。

彼は人間そのものを嫌っており、降伏した人間も皆殺しにしたのである。

そして、フリーユージェルとゼンメルの言い合いをとめたのがインドラ男爵「男爵」。

機動性の高い羽のはえたゲルレレたちを部下にもつ男である。

「てか・・・オレセイ参謀。俺たち「龍王の盾」を集めた理由ってのはなんだ？」

「今後「ゼロ」をどうするか・・・ということだ。」

参謀であるオレセイは女性である。

シヨートの髪をしている。

「まあ、フリーユージェルでドジ踏んでくれたおかげで誰かが余計な厄介仕事をしなきゃならんということだ。」

「おい、姫さまよお・・・そりゃあ、いいすぎだぜ・・・俺だってさっきも言ったとおり大変だったんだぜ？」

「姫」とよばれるロングヘアの女性。

カタリナはフリーユージェルをにらみつける。

「しかし・・・まだ「龍王の盾」は全員集まってないですよね？」

ヴェルナーは言う。

「今、「雪風」と「時雨」、「センライ」は仕事だ。」

「まあ・・・「雪風」、「時雨」はいつもいないがな。」

それから1時間ほどしてフリーゲルは広場から離れた。

「センライ団長に任せていいんですか？」

「知らん。いないのが悪いんじゃないかねえのか？」

フリーゲルは言う。

「まあ・・・俺もそれなりに動くつもりだがな。」

將軍はまたたばこを1つとりだし、火をつけた。

その火は暗闇をしつかりと照らした。

まぶしすぎるぐらいに。

「さて・・・と。俺もさっそく」それなりに「動きますかねえ・・・」

「「龍」と

「龍王」と「龍王の盾」

完

月に満ちる一匹狼

夜空がきれいに見える夜。

風が吹き、月明かりが町々を照らしている。

風が吹いているということは、珍しいことではない。だが、それは時間が流れているという証拠だった。

彼らがいうように時間がとめられるのだとしたら、この風がピツタリとまるということになる。そんなことあるわけがない。認めてたまるか。

「！」

まただ・・・

さつきから、変に力を感じる人々が横を通る。

1回目はかなり大きなものだったけど、3人が気づいていないのだから思い違いだと思った。

ところが・・・

それが何度もおこっている。

さすがに不安になる。

やはり3人に伝えたほうがよいだろうか・・・

「な・なあ・・・」

「今度はなんだ？」

・・・無愛想な奴め。

非常に面倒そうな顔でこちらを見てくる。

「なんか力を感じないか？」

「いや、感じないが・・・」

「もしかしてお前、探知型なんじゃあ・・・」

「そんな馬鹿な。かなり珍しい能力ですよ？」

月が雲に隠れた。

そんなときに強大な力を感じた。

「!!!」

これには3人も目つきがかわった。

「チツ・・・気をつけるよ、坊主。」

緊迫した空気になる。

「俺は坊主じゃない。」

「戯言は終わってから言うんだな。」

そういうといつの間にか3人が武器をもっていた。
体内に収納できるというのは本当のことだったのだろうか？

「時間をとめた奴・・・かなり強大な力をはなっていました。これはヤバイんじゃないあ・・・」

そんなとき、足音がきこえた。

俺たちは皆、立ち止まって3人は武器を構え、俺はキョロキョロと辺りを見渡していた。

足音が聞こえるわけがない。

だが・・・

実際にきこえるのだ。

・・・目の前の人混みから。

「・・・くる！」

ゆっくりと1歩1歩、こちらに歩いてくる男が1人。

間違いない。

一番最初に力を感じた男だ。

そして、人混みから抜け俺たちの目の前に立つと、とまった。

「お前がゼロか・・・」

「チツ・・・さっそくこいつ狙いの野郎かよ・・・」

そういえば・・・

風がない。

・・・ホントに時間がとまっているというのか!?

馬鹿な・・・

そんなわけない。

たまたま止んでいるだけだ。

「我が名は時雨。」

「し・時雨!？」

「知ってるの？」

3人が徐々に後退しはじめる。

後退しながらボソツとフェニックスが言う。

「時雨は「龍王の盾」の1人です。通称「一匹狼」。」

いきなり「龍王の盾」かよ!?

一匹狼ってことは・・・

基本1人ということか。

だが・・・

後ろから3〜5人の人が歩いてくる。

「あ・・・う・・・」

あれは・・・

皆、俺が先ほど歩いているときに変な力を感じた人たちだった。
見事に・・・的中していた。

「冗談・・・だろ・・・」

またしても非常識と認めざる得ない事態がおきてしまった・・・

「お前らは手を出すな。」

「はい。」

後ろの連中はこいつの部下みたいだが・・・

やはり「一匹狼」。

1人で狩りをするということか・・・

「まずいぜ……」

「これは逃げたほうがいいみたいですが……そう簡単に逃がしてもくれなさそうですし……」

「くっ……」

徐々に後退するが……

それと同時に連中は前へ前へと歩いてくるので距離がひらくことはない。

「そちらからこないならいかせてもらおう！いざ……参る！……」

そういつと視界から消えた。

「危ない！……」

「え？」

上を見ると、男が上空から落ちてきていた。

「う・うわぁ！」

とりあえず逃げるしかない。

「逃げるか！だが、逃がさん！」

彼が刀を縦と横に流れるようにふると、そこから生じた風が刃になり、こちらに向かってきていた。

「伏せろ！」

「くっ！」

神速とよばれる男にいわれて、とっさにふせる。

風は頭の上を通り過ぎて、後ろにとめてあった車がまっ二つになった。

「おい、冗談じゃない！」

こんな「どつきり」、「冗談じゃないし、ぜんぜん笑えない！
てか、この企画考えた奴、マジでもういい！
頼むから、とめさせろ！！」

「チツ・・・黙ってみてりゃ、調子にのりやがって！！」

神速が槍をかざし、男へと突っ込む。

「甘いな。」

「ヤベッ！」

神速と呼ばれる男の動きは早すぎてまったく見えない。
けど……

俺が見えたときには、彼は槍をもっていなかった。

「レン……例の使っていていいか？」

「……だが……」

「このままじゃ全滅だぜ。」

「……わかった。許可する。」

すると、神速と呼ばれる男の手には、今度は剣があった。

「！」

それを見ると、「一匹狼」の表情が少し変化した。

「その剣……スラストケイヤか？」

「昔の名前はな。今は「神風」って名前がある。」

「ふっ……よかろう。その「神風」とやらの力……見せてもらおう。」

何をいつているかはわからないが・・・
とりあえず彼の持っている剣が「神風」という名前なのはわかった。

「行くぞー!!」

彼が走っていく。

・・・さつきより早い。

まったく見えない。

いや・・・意識を集中しろ・・・

「速い・・・」

2人も呆然と見ている。

おそらく2人にも見えていないのだろう。

2人に見えないなら俺も見られるわけがない。

「ふう・・・」

彼が見えたとき、彼はかなり疲労していた。

「野郎・・・俺の攻撃を全部左手の剣で受け止めやがった・・・冗談きついで、マジで。」

神速が苦笑する。

ん？

左手の剣？

「一匹狼」は二刀流なのか？

「神風」とやらの力・・・それだけか？」

彼をよくみってみるが・・・

剣は右手でしかもっていない。

どういう・・・

「危ない!!!」

不意に押されて、倒れこんだ。

「レン!!!」

「うっ・・・」

次に俺が見たのは、剣が肩あたりに貫通している女性の姿だった・・・
俺をかばった!?

だからこんなことに・・・

「な・・・」

「大丈夫？」

「あ・あぁ・・・」

こんなに血がでてるのに・・・
それでも人に気を使えるなんて・・・

「チツ・・・右肩をやられた・・・が、問題ない。聞き手は左だ。」

そういうと、剣を抜いた。

剣の先端は、赤色に染まっていた。

「ゼロをかばったか・・・そんなに死にたいならお前から消して
やろつ。」

相手の男はゆっくりと近づいてくる。

「まずい！」

「今、どれくらいです？」

「やっと傷口が閉じた。まだ内部はダメージがある。」

おかしい・・・

さっきも証明してくれたが、傷の治りが早すぎる。

「チツ・・・俺が時間を稼ぐ。」

神速が「神風」を構えて、走ろうとしたとき・・・

「一匹狼」は変化していた。

彼は先ほどまで建物で月明かりにあたらない影の部分で戦っていたから・・・

月明かりが苦手なのかとひそかに考えていたが・・・

今、彼がいるのは月明かりをモロにあたるところだった。

彼の体がぶれ始める。

この光景・・・

見たことがある。

そうだ・・・

フェニックスが妹に香水のようなものをかけたときと同じ・・・

じゃあ・・・こいつ、本気になるつもり!?

どんだん口にある歯は伸びて、とんがっていき、牙となる。

二足歩行から四足歩行となり、徐々に黒い毛がたくさんはえてくる。

「う・嘘だろ・・・」

生きてる人が獣になるところなんて・・・
漫画とかアニメとかでしか見たことなかった・・・

実際みてみると結構グロいものだ。

人がホントに獣になるなんて・・・

俺はこの目にはその姿がしっかり焼きついてしまった。

「お・狼!？」

ぶれ終わった。

どうやら変化が終了したようだ。

月明かりに照らされるその姿は・・・
狼そのものだった。

「そこまでだ、時雨。」

「!?!」

すると上から声がした。
これまた強大な力。

人が空中にういていた。
ポケットに手を突っ込んで、たばこを吸っている。

「將軍か・・・人の戦いの邪魔をしないでほしい。」

「將軍」！？

こいつが・・・

フリーユージェル！？

「巨大な力を感じてきてみれば、お前かよ・・・まあ、おかげでゼ口を発見できたがな。」

こいつも・・・

俺狙い？

「てか、本部で俺たち「龍王の盾」に招集がかかっているんだが・・・お前、なんでこんなところで暇つぶしてるんだ？」

「暇つぶしをしているわけじゃない。お前と一緒にしてもらっては困る。」

狼はいつの間にかまたもや影の部分へと移動して、人の姿となっている。

「こっちに「旋律の剣」の連中がきてるぞ。」

「チツ・・・」

「先頭の連中は殺っておいたが・・・まあ、少しの時間つぶしにし

かならないだろ。」

やった？

それって・・・

殺したってことか！？

「撤退しろってことか？」

狼は將軍をにらみつける。

「ああ。それにゼロを傷つけることは俺が許さねえ。盟主エンゲージ閣下の意思に逆らうことになるからな。」

「・・・わかった。俺も・・・本部に向かうとしよう。」

狼とその部下も空へと浮かび始める。

「お・おい！フリーユージェル！中東にいたはずのお前がなんでここに
いる！？」

「ん？ほう・・・フレイバーの連中か・・・久々だな。」

「んなことはどうだっていいんだよ！」

神速は將軍をにらみつける。

「まあ、平たくいえばゼロ狙いだ。」

「んなことで、わざわざ中東からご苦労なこったな。」

「將軍としての身はなかなか大変なんだぜ？」

そついうと將軍はこちらを見た。

一瞬で鳥肌がたった。

恐ろしいほどの強大な力……

「……ゼロ、今度会うときはお前をこちらへつれてってやる。」

「……」

その言葉は非常に重く、強い。

俺は言い返すことすらできない。

「行くぞ、時雨。」

「お前に言われてなくてもわかってる。」

そついうと2人が飛んでいった。

残ったのは3人と俺。

さっきとかわらないのに……

気まずい空気である。

「あの・・・大丈夫？」

そういうと、彼女は俺をギロリとにらんだ。

「なわけないでしょう？というか・・・戦場でウロチヨロしないでくれる？正直邪魔。死にたいの？」

たしかに俺が悪かった。

けど・・・

非常にイラツとくる言い方である。

「まあまあ。彼も悪気があったわけじゃないですし・・・」

「だが当たり所が悪ければレンは死んだ。」

「あのねえ・・・そんな簡単に死ぬわけないでしょ？まだまだ私はゲルレレを殺さないといけないの。」

非常に殺戮的である。

「さて、次の作業いくわよ。」

「おい、怪我は？」

「時間の流れがこないうちに修復のほう先決。そして、流れ始めたら本部にいくのが先決。私の怪我は本部で行う。」

「大丈夫かよ？」

神速が、そんなに焦りをいれずにいう。

いつものことなのだろうか・・・

「最低限度は治ってる。本部に向かう途中にも治ってく。だからぜんぜん大丈夫。」

「わかった。」

彼女の腕は傷口はふさがっているものの血まみれだった。

その光景をみて俺は悟った。

俺の暮らしてきた世界と彼女たちのいる世界は同じ世界でも別の世界。

日常と非日常。

そして……

俺も日常から非日常へと転落し、もう戻ることはできない。

すなわち……

彼女たちの話は本当のことだ。

「まあ、とりあえずこちら辺の修復といきますか！」

「彼らが去ったのだから……そろそろ時間の流れが戻りますからね。」

町をみてみると、先ほどの風の刃のせいで車が一台粉碎されている。他はあまりかわりない。

するとフェニックスがノートパソコンをひらく。

「壊れた車の修復・・・これなら3秒で終わります。今日は楽で助かります。」

そういいながらに、キーボードを打ちまくっている。

「さあ・・・修復!」

そういつて彼がエンターキーを押した。

すると・・・

車はみるみるうちに直っていった。

「す・すげえ・・・」
「いつもはもつと激しく町が壊れるんですよ・・・直すのが大変なんです。」

なんて彼は苦笑する。

「さて・・・とりあえず新手がこないうちに急いで本部に向かいましょう。」

「そうだな。」

「ええ。」

俺は・・・

とりあえずついてく。

いや、もう「とりあえず」じゃない。

家はゲルレレに占拠されている。

行くところなんてない。

だから・・・

「行くしかない」んだ。

ありえないことが目の前で何度も起こって、そのたびに目に焼きついて・・・

今の俺は頭がイカれそうになっていた・・・

「月

に満ちる一匹狼」

完

悲しみと決意

ここはどこなのか？

・・・それはこっちがききたいぐらいだ。

「きみが西野 騎士くんだね。」

3人組によればここが本部らしい。

なぜ「らしい」なのか？

それは行く途中にいきなり後ろから殴られて、のびてたところをここへ運ばれてきたらしい。

なんでも神速いわく、正確な場所は教えられない・・・だとか。

「あの・・・どちら様ですか？」

若干失礼だが・・・

実際目の前にいる人と話した覚えはない。

「ここ、「旋律の剣」関東司令本部、通称「ウイング」の最高責任者の「竜胆」だ。」

「か・関東司令本部!？」

てことは・・・

ここ以外にも「旋律の剣」にはいろんな場所に本部をもってるのか

!?

「本部は日本には地域別に必ず1つずつあるわ。」

おいおい・・・

四国とか、ガチで探せば見つかる気がするのは俺だけか？

「きみには強い力があることを3人からきいたかね？」

「はい。」

「なら説明はいらんだろう。君自身はどうしたいのだね？」

3人と違い俺に正確な意見をきいてくる。

それはそれでやりにくいのだが・・・

「もしあなた方の組織がホントにあるのだとすれば、俺の家族や家はもうないのでどうするべきか迷ってます。」

「そうかねそうかね。ふむ・・・まあ、最初はそうじゃろう。おい、五十嵐、ここをある程度案内してやってくれ。」

五十嵐？

誰じゃそりゃあ・・・

3人の誰かにいったようだが・・・

「フェニックス」と「神速」と・・・多分「レン」。

「わかりました。」

おそらく「レン」と呼ばれる女性がうなずいた。

「五十嵐」というのが本名なのだろうか？

「ついてきて。」

そういって、俺はいわれるがままについていく。

「とりあえずあなたがどうしたいかは別として……」

おい、「別」にするなよ……
ここは日本だ。

「基本的人権の尊重」というものがある！

俺の意見をさっきの……竜胆さんとやらかのようにきいてくれ……

・
まあ、まだ決まっていけないけどな。

「あなたの力はこちらとしては非常に興味がある。仮に敵になったときも想定して……」

「敵」というのはゲルレレのことだろうか・・・
まあ、彼らの話が本当なら・・・（というか本当だと信じないとい
けない状況になりつつある
俺の家族を殺した連中の味方になんてなるものか。
・・・そんな状況で心が折れそうになる。

ああ・・・もういつぞ、世界中の人々とともに何もかも消えてなく
なりたい。

2012年、マヤ文明万歳！！（ヤケくそ

「こちらで検査を受けてもらう。」

「検査？」

「まあ、簡単なものだ。」

簡単なら・・・

いいが・・・

この女がいうと、どうも怪しい。

「手順は、まず頭をメスで開いて・・・」

「ちよっ！ダメダメダメダメ！！」

それは明らかに死ぬ！！

これが軽いのか！？

お前と一緒にするな、野蛮人！

こっちはお前と違って傷の治りは早くないんだ。

「冗談だ。笑え。」

「笑えるか！そんな冗談！」

この非日常も十分笑えないが・・・
今は、それと同レベルだぞ！

「まさか本気にとるとは思わなかったが・・・冗談の通じないやつだ。」

それが冗談なら、この非日常も冗談であってほしいものだ。

「まあ、軽く人間ドックに入ってもらっただけです。」

「ならいいんだがな。」

「フフフツ、もちろん「旋律の剣」製だから・・・少し痛いかもしれんが・・・我慢しろ。」

・・・もうだまされないぞ！
うん、だまされるものか。

「冗談だ。笑え。」

またですか・・・

「アハハ・・・」 棒読み

「とりあえず保健室にいこうぜ。」

学校か!!

ここは組織の本部じゃないのか？

保健室はおかしくないか？

しかし長くて細い廊下である。

でもってきれいだ。

最近作ったのだろうか？

保健室とやらにいく途中にきいてみることにする。

「なあ、この施設、最近できたのか？」

「うん・・・私がここに派遣されたのが、あなたの引き抜きのために来たからね。」

そうなのか？

それはご苦労様なこつた・・・

「俺もそうだぜ。」

「私もですね。」

なんか俺が介入しないと悪い気がしてきた。
みんなそうだったなんて・・・

待てよ。

そういえばなぜ皆、一緒にきたっていわない？
もしかして、俺が「リクルート」の力に目覚めるまでこのチームは
存在してなかった？

「な・なあ・・・俺がここにくるまでこのチームはなかったのか？」
「ええ。皆、各自別々の地域で担当してたわ。私は日本海の警備役。
不死鳥は「キャリバー」ってチームの1人でオーストラリア警備隊
に所属。島風は「フレイバー」というチームで中東戦争に介入。」

・・・誰だよ、不死鳥って？
まあ・・・英語にすると「フェニックス」だからわからないことは
ないさ。

アイ アム ジーニアス！
ちなみに「ジーニアス」というのは「優秀」という意味だ。

だが・・・
島風つてのは誰だかわからねえぞ、マジで。
ここに居るのはあいにく俺と3人だけだから、おおよその察しはつ
くがな。

「「フレイバー」は戦闘の一流チームよ。」
「へえ・・・」

「もっと驚きやがれ！この俺の素晴らしい過去をきいて、なんでもんなフツーな反応なんだ！？」

だってこれ以外反応のしようがないじゃないか。

「おう、すごい」とでも棒読みすればよいのだろうか・・・

「てか・・・不死鳥と島風ってのは2人の本名？」

「あ、自己紹介がまだでしたね。」

フェニックスは微笑みながら言う。

「私は「不死鳥翼」といいます。まあ、「不死鳥」とかくので、皆「ふしちょう」って読むんですよ・・・そこが自分の名前の悩みですかね・・・」

たしかに読むな。

それに「フェニックス」って呼ばれてるし。

「俺は「島風速人」。まあ・・・よろしくな。」

なんとというか・・・

いかにも「速い」って名前である。

「五十嵐漣」。

・・・名前だけかよ・・・

「じゃあ俺も・・・」

「すでにお前のことは把握してる。」

「ええ。名前は西野 騎士くん。」

一応問おう。

この国には「個人情報保護法」というものがなかったか？
もしあるのなら・・・

なぜ俺の情報がもれているんだ！！

「なかなかイカした名前してるじゃねえかよ・・・まあ、上はフツ
ーだが・・・」

今、全「西野」家を敵にまわす言葉をいったよな？
俺の親戚全員でこいつをフルボッコにしてやるつか・・・

「ちなみに私の作戦中のコードネームは「フェニックス」。」

「俺は「神速」。」

「私は「レン」。」

唯一コードネームとしてまともにあげられるのは「神速」だけなん
じゃないか？

「フェニックス」は名字を英語にただけだし・・・

「レン」なんて単に下の名前をいっているだけじゃねえか・・・
再び問おう。

この状況でこれを「コードネーム」とよべるのか？

「まあ、単純ですけどね。」

「てか、コードネームなんて必要ないだろ・・・」

「いや、コードネームがないと盛り上がらないし、やる気もおこらないでしょー!」

どういう理屈だよ・・・それ。

そんな話をしながら歩いていくと、ドアが目の前にある。

「ちょっと・・・こっちよ。」

「このドアは。」

「別に。」

その「別に」という言葉は俺にとっては非常に興味深い言葉であり、冒険心を揺さぶるのだった。

「このボタンは・・・」

「あ、それ、指紋が照合しないとレーザーがとんでくるぞ。」

もう誰がお前の冗談なんか信じるか。

ピツと押してみる。

「指紋照合失敗。アクセスできません。」

まあ・・・そりゃそうだな・・・
すると、なんだかよくわからない形のいびつな水鉄砲のようなものがでてきた。

「これを敵と判断。迎撃行動に移る。」

・・・は？

なんて言う前に、青い光線が！

「うわっ！！」

どうにかかわした・・・
俺の反射神経をなめるなよ！

よくみると、服の一部がこげていた。

「だからいったのに・・・」
「じよ・冗談じゃないならそう言えー！！」

おかげで死ぬかと思っただぜ・・・マジで。

それから少し歩いて、またもやドアが目の前に。

・・・まあ、先ほどのトラウマというやつで、警戒する。

「ここだ。よし、お前からいけ。」

「俺を殺す気か!？」

この女・・・

地味に鬼だ・・・

「冗談だ。」

先ほどのがなければ俺は今、フツーに進んでフツーにバーベキューになっていただろう・・・
おっ・・・恐ろしい。

「よし、いくぞ。」

そついうとフツーにドアを押しした。

・・・って・・・

指紋照合式じゃねえのかよ!？

てっきりビビッちまったじゃないか!

「ふっ……べっつてやんの。」

島風が鼻で笑う。

……完璧にはめられた……

「おう、きたねえ。」

保健室とやらのなかには白衣の人たちが数人いる。

「ここが保健室？」

「ほ・保健室!？」

目の前にいる白衣をきた身長175cm程度の男が目丸くする。

「すみません。こいつ、馬鹿なんで。つい学校と同じように見ているんです。」

「ま・まあ……きたばかりだし、仕方ないよね。」

……なんだ、その地味に痛い視線は……

「騎士くん、ここは「精密診断室」っていうんだよ。覚えておきたまえ。」

「さつき精密診断室といったばかりだろうが……」
「ホントだぜ……物覚えの悪いやつだ……」
「まあ……馬鹿なんでしょう。」

……ここいつらあゝ!!

正直に言おう。

ウザッ!!

「サクッと検査を済ませましょうか。」

「ほら、呼んでるぞ。早くいけ、馬鹿。」

「だあゝ!馬鹿馬鹿いうな!!」

といつつ、渋々ついていく。

「はい、ここに腰をつけて……」

そんなこんなで検査を行い……
いつしか睡魔に襲われたせいで……
おきたときには検査は終わっていた。

「お前の向いている武器は「銃」らしいぞ。」

「銃」!?

んな馬鹿な!!

俺はゲーセンでもっとも嫌いなゲームをあげよ！

といわれれば、迷わず「ガンシューティング」と答えるレベルだぞ。

ちなみになぜかというと・・・

いきなり敵がでてきて、ダメージをくらったり・・・

理不尽だからだ。

しかも、弾がぜんぜん敵にあたらないし・・・（それは下手なだけ

「珍しいですよね・・・」

「ああ。普通は「槍」とか「剣」とかなんだがな・・・」

しかし・・・

得意武器を検査して何のためになるのだろうか・・・

「そうだ。武器も見っていくか？」

「あ・ああ。」

とりあえずながれに身を任せよう。

皆についていき、今度は「武器庫」へいくらしい。

比較的武器庫は近く、精密診断室から徒歩1分程度でついた。

「銃は・・・ここだな。」

見てみると・・・

まあ、あるわあるわ・・・

メタルギア等のシューティングゲームでお馴染みの銃もたくさんある。

例としていえば・・・メジャーなM-4とかAK-47とかだろうか・・・

まあ・・・「メタギア」は「ステルス」シューティングだが・・・

というか・・・

おい、日本警察!!

こんなことでいいのか!

この国はこういうものをもってちゃダメなんじゃないのか? 俗にいう「銃刀法違反」だぞ!

まあ・・・細かいことは気にしないことにおこづ。

ためにM-4らしきものをもってみることにする。

「よっ・・・って、重ッ!!」

やべえ・・・

銃身が前に向けられない。

重すぎる・・・

気づけば、両手が震えている。

「これ、重すぎじゃないか?」

「M-4カービンアサルトライフル。5.56mm口径。重量3480g。」

銃の説明なんていらんっつうの！

「それに対ゲルレレ用兵装としてるからプラス5kg。」「旋律の剣」
製M-4用対ゲルレレ専用鉄鋼迎撃弾30発入りマガジン1kg。」

おい！

マガジンで1kgってどっいっことだ！！

もっと軽く作りやがれ！

「鉄鋼迎撃弾はすげえぜ？基本、雑魚のゲルレレの体は貫通する。」

島風はうなずきながらに言う。

だが・・・

本来の重さ約3kg+特殊コーティング5kg+マガジン1kg
全体9kg

ってことになるじゃないか！

というか、特殊コーティングで本来の重さより重いつてどっいっつ
とだよ、おい！

とりあえずこんな重いのは持てるわけがない。
戻そう。

「ふむ・・・なら」S & amp; W M29「ならどうです？」

リボルバー
回転式拳銃か・・・

「重量1396kg、対ゲルレレ用兵装500g、弾数6発で200g」

合計で約2kgか・・・

先ほどの9kgに比べたらありがたい軽さである。

しかし、先ほどとは違ってかわって、特殊コーティングが軽い。

「なんでこんなに特殊コーティングが軽いんだ？」

「それは拳銃だからですよ。どうしてもアサルトライフルは大きさと重くなってしまうんです。」

なるほど・・・

大きさの問題か。

「S & amp; W M29」は軽量ながらすさまじい威力を誇る回転式銃だ。それだけ発射の衝撃は大きい。それに弾数はたったの6発。扱いづらい銃だ。・・・だが、うまく使えばかなりの武器となる。」

五十嵐は真顔で言う。

その銃知識はどこで仕込んでもらったんだが・・・
正直俺より詳しいじゃないか。

「さて・・・次へといきますか！」

島風が言う。

今度はどこにいくというんだ？

とりあえず銃を戻して、彼らについていく。

細い廊下を何度も曲がる。

なんでこんなにわかりにくい構造をしてるんだか・・・

今度は小さなドアがたくさんあるところへやってきた。

「ここは私たち、「旋律の剣」の各部屋だ。ここは1人1人別々にあるわけだが・・・お前の部屋は354番だ。」

おいおい・・・「354番」って・・・

そんなにここには人がいるのか？

あ・・・でも、そうだよな・・・

なにしろ「関東司令本部」だからな。

ん？

俺は今、重大なことに気づいた。

フツーに流れてこうきていたが・・・

俺はここにとどまることになってるのか！？

「なあ、俺はここにとどまることになってるのか？」

「当たり前だ。お前の家はすでにゲルレレの支配下。まあ、お前一人でどこかで暮らすというのなら話は別だがな。」

「それに外に一人で歩いていると、またゲルレレに襲われる可能性も否定できなくはありません。」

まあ・・・

その通りだな。

ここにとどまるのが一番良いかもしれない。

とりあえず部屋に入ってみることにする。

「！！」

そこは素晴らしかった。

どこかの高級ホテルの部屋か？

広々とした部屋。

そこにはありとあらゆるものがあつた。

台所、リビング、風呂・・・

トイレまで完璧である。

しかも冷蔵庫・電子レンジ・・・

テレビまであるときだ。

「お前ら・・・普段、こんないい部屋に住んでるのか？」

「まあ、いつ死ぬかわからないしな。兵士の休息は大事ということ
で、こうなったらしい。」

にしたってすごい・・・

「こちら放送本部。西野騎士くん、基地司令官が呼びです。」

部屋に惚れ惚れとしていると、放送がかかった。

「基地司令・・・？」

「さっきの竜胆だよ。」

島風は「忘れたのか？」という目で見てくる。

「あゝ、忘れてたよ。どうせ馬鹿だからな。」

「そういう考えはよくないですよ？物事はプラスに考えないと。」

うるせえ・・・

お前らみたいになんか強いわけじゃない。

今でも折れそうなんだからよ・・・

「とりあえずいくか。」

うれしいことに、この部屋から基地司令官業務室までは一本道だった。

トントンとノックをして入る。

入っていると、先ほどの竜胆という人がいる。

「どうだね？この基地内は。」

「広いですね・・・。」

「ハハッ、そうだろうそうだろう！最初は皆迷うからな。」

それ・・・笑い事じゃねえぞ・・・

慣れてる身はいいとしても・・・

こっちとしては非常に大変である。

「ところで・・・これはきみの家族のものかね。」

すると彼がだしたのは血まみれのバックだった。

「!!--」

この形・・・
色・・・

見覚えがある。

そうだ・・・

母が愛用していたバックだった。

「先ほど警備隊が発見したらしい。下に西野とかいてあったからきみの家族のものかと・・・」

急いで確認してみる。

母は裁縫が得意だった。

だから、名前も裁縫で縫って入れていた。

見てみると・・・

「・・・」

その通りだった・・・

裁縫で西野と縫ってあった。

ということとは・・・

これは母の血!?

「この血液は・・・検査しましたか？」

おそろおそろ聞いてみる。

「血液型はO型だった。」

間違いない・・・
母のものだ。

そうか・・・
ホントに・・・
ホントに殺されちまったんだ・・・ゲルレレに。

覚悟はしてた。

3人とあつて、「冗談だろ」と思いつつ、心の底で「もしかしたら」と考えている自分がいた。
そして目の前でありえないことがたくさんおこつて、「家族は殺された」と強制的に自分に思わせていた。
けど・・・それと裏腹に見えないところで「無事であつてほしい」という想いも残っていた。

そんな想いが潰えた。

覚悟はしていた・・・それなのに・・・
それなのにどうしようもなく苦しい。

「くっ！」

俺は思わず走る。

「お・おい！」

「ほっておいてやれ。」

「しかし司令！」

「1人にさせてやりたまえ。」

細い廊下は走って走って走りまくる。

向かう先は先ほどの「354室」。

部屋に入ると、内側から鍵をかける。

冗談じゃない。

こんな姿・・・見せられるものか・・・

ベツトに倒れこむ。

果てのない悲しみ。

絶望。

「くっ・・・」

おい、自分！

俺は男だろ！！

そう思っても・・・

どうしようもない。

涙がとまらない。

今まで楽しく暮らしてきた。

俺は平和に暮らせてればそれでよかった。

俺にとって家族は心の支えであり、言葉で言い表せないほどの大事な存在だった。

それなのに急にいなくなっちまうなんて・・・

今までいろいろと世話を親にやかせてしまったから、大学をでて、社会人になったら・・・

たくさん働いて、親に恩返しをしよう。

そこまでしっかりかんがえていた。

それなのに・・・

その親はもういない。

恩返しする予定だったのに・・・できないままに逝っちまった。

ふざけんなよ・・・

ホント・・・冗談じゃねえよ・・・

笑えねえよ・・・こんなの。

この広々とした部屋が悲しみで埋め尽くされる。

この部屋が狭いとさえ感じてしまう。

そんな悲しみにふれて・・・

どれだけたっただろうか・・・

そうだ・・・

ゲルレレが人を憎んでなければ・・・
少なくともこんなことにはならなかった。

俺は・・・家族の仇をとる。
ゲルレレに復讐してやる。

悲しみは1つの決意へとかわる。
俺のなかで覚悟がきまった。

そうさ・・・
まだ何もできないけど・・・
俺にだって「リクルート」の力があるっていつてた。
なら・・・戦える！！

俺は家族の仇を討つため、ゲルレレと戦うことを決意したのだった。

「悲しみと決意」 完

家族

部屋に閉じこもってどれほどたっただろつか・・・

俺は1つの決心を胸にドアを開き、再び基地司令業務室へと向かう。

道はまっすぐだったので、いくら物覚えの悪い俺でもわかる。ただこの道が先ほどよりもずっと長いように感じた。

人もまったく歩いていない。

前を見れば、まるで北海道の道の室内版のような感じである。

そこは少しの寂しさを映し出しながらも、心が自然とゆるぐ。

この静けさとは逆に俺の決心はメラメラとつるさいほどに心のなかで燃え上がっている。

そんな果てしない道を歩いていき、ようやく基地司令業務室へとついた。
ゆっくりとノックをする。

「どござ。」

中からは竜胆の声が聞こえ、俺は静かにドアをあけて中に入る。

部屋のなかは先ほどと変わらず、重たい空気だ。

ただ、皆はもういなくなっていて、なかにいたのは竜胆たった1人。それでもかわらないこの重たい空気は、基地司令官という大きな存在がいるからであろうと思われる。

「・・・どうだね？心は落ち着いたかね？」

「はい。」

机の上には、まだ先ほどの母のかばんの置いてあった。

「はい」とは答えたものの、やはりそれを見ると精神的につらいものがある。

「あの・・・皆は？」

「彼らは各自の部屋に戻ったよ。」

なんだ・・・

皆にも報告しなかったのに。

そんなことを思う俺がいる。

だが、実際報告して何になる？

こここの基地司令は目の前にいる男である。

故に俺がどの部隊に配置されるかは、彼次第。

それに、まだ戦うということすら彼にはいえていないのである。

「あの・・・俺には「リクルート」の力があるってホントですか？」

先ほども何度もきかされたが・・・

やはり最終確認はしてしまいたくなる。

ここで「ない」なんていわれれば、それこそ俺1人ではしゃいでいたことになってしまう。

その答えに竜胆は黙って首を縦にふった。

それから少し俺の近くにやってきて、肩に手を置いた。

「もう少し肩の力を抜きたまえ、そんなに力んでも空回りしてしま
うぞ?」

「は、はぁ・・・」

そんなことはいっても、俺はここに和みにきたのではない。
可哀想だと哀れまれたり、慰めてもらうためにきたのでもない。

「竜胆さん。そのリクルートの力を使えば・・・俺は役に立ってます
か?」

「・・・戦う道を進むのかね?」

彼は急に真剣なまなざしになった。
おそらく俺は試されているのだろう。

「はい。」

「・・・きみは何のために戦うのかね?」

家族の仇を・・・

そして何より、俺と同じように悲しい思いをする人を少しでも減らすため・・・

「俺と同じように悲しい思いをする人を減らすためです。」

「・・・」

「そのためなら、俺は・・・この命、捨てられる覚悟だってできます。」

実際、もう人生なんてどうでもいい、と心の奥底で思ってしまったている俺がいたことに今気づいた。

当然といえば当然かもしれない。

何しろ、世界で一番大切な人たちを失ってしまったのだ・・・

ただ何もしないで死ぬよりは・・・

せめて人の役にたきたい！！

なんていうことを思っていたのかも知れない。

「死ぬ覚悟ができている・・・だって？」

だが、その言葉で竜胆の目つきはさらに厳しいものとなった。

「きみはゲルレレに殺された家族のぶんまで生きるべきではないの

かね？」

「ッー!!」

竜胆の言葉は非常に重かった。

その言葉でようやく「死んでもいい」なんていう精神から目が覚めたのだ。

俺の家族は・・・

死にたくて死んだのか？

そんなわけないじゃないか・・・

俺の家族も、俺と同じように平和な日々を望んでいた。それだけだった。

「たしかにきみには普通より強いリクルートの力がある。・・・だが、きみのそのような覚悟は認めることができない。もう少し考えたまえ。」

そういつて、俺は部屋を追い出されてしまった。

だが、追い出された理由は正しすぎた。
正論すぎた。

俺は、生きたかった家族が死んでしまって・・・
つらい思いをした。

だからこそ、そんな家族の思いと思い出を背負って生きていかなく

てはならないのではないだろうか。

「……」

自らの発した言葉に後悔を浮かべつつ、帰り道をゆっくり歩いていくと目の前から1人の女性がたっていた。

「……レン。」

「……それ、コードネーム。本名は五十嵐だから。」

と、コードネームといえるべきか、非常に迷いどころなコードネームをコードネームといい張っている女性が言う。

「それに普段、お前に下の名前では呼ばれるのは気に食わない。」
「……」

俺はそういい、彼女の隣を通り抜けようとした。すると、彼女は静かにいった。

「お前はどっしりたい？」
「……え？」

俺は……どっしりたいのだろうか？

戦う気はある。

それはたしかなことだ。

けど・・・戦いたいのだろうか？

本気で戦いたい、と思っっているのだろうか。

本気で誰かのために死にたい、と思っっているのだろうか。

「戦場ではね、覚悟の浅い奴ほどすぐ死ぬ。しかも「満足」って顔をしてね。」

「・・・」

それはまさしく今からいった俺の未来ではないだろうか・・・と考えてしまう。

「でも、そんなの自己満足。単に役立たずなだけ。足手まとい。ものすごくひどい言い様である。」

個人的にはもう少し温かみのある言葉を期待していたのだが・・・ま、こいつのことだ、無理はないか。

「・・・そっか。」

俺は彼女の言葉に耐えられなくなり、その場をあとにする。

彼女のいう言葉は今からいった俺の将来になる可能性が非常に高く、想像できてしまう。

だからこそ、それ以上ききたくなかった。

彼女は最後にこういって、逆方向に歩いていった。

「島風にでも相談してみたら？あいつバカだからあんたといひ話し相手になるんじゃない？」

俺は今度は島風の部屋へといつてみる。

あいつの部屋は俺の部屋に来る前に、紹介されたから・・・
大体の場所は覚えている。

「たしか・・・ここだよな。」

そういつて、ノックをするも返事がない。

「・・・」

仕方ないので、とりあえず上がってみる。

「失礼します・・・」

なんて恐る恐る入ってみると、そこにはある一つの写真を見つめ、深刻そうな顔をした島風がいた。

とりあえず、部屋がとにかくごちゃごちゃと散らかっていた。

これぐらい整理しろよ・・・

とか思ってしまう。

「・・・あの・・・」

彼の私物を踏まないように、歩みにくいのが、頑張って地道に進む。

「・・・ん？ああ、よう。てめえ、人の部屋に勝手に上がってくるなんて、どういうしつけを受けてきたんだ？」

ノックはちゃんとしたんだけど・・・

それにノックして気づいても、これはすぐに片付けられるレベルではないだろう。

「その写真は？」

写真をのぞいてみると、その写真には一人の男が写っていた。

それは、ここに来る前に強大な力を感じたあの男・・・

「将軍」という名で呼ばれている、「フリーユージェル」だった。

「・・・そついう趣味なの？」
「違うわー!!」

あ、キレた・・・
まあ、当たり前か。

「俺の前のチーム、フレイバーとこいつとは因縁の仲なんだよ。」

フレイバー。

戦いのエキスパートたちらしい。
ということは先ほどにきいた。

「中東で、こいつとは何度もやりあった。が、結局やれなかった・・・」
「・・・」

彼は自らの愛剣、「神風」を見つめる。

それから少しして、フツと我に返ったようにこちらに向いて、「愚痴うちまっすまねえな」というような苦笑をした。

「で？覚悟は決まったのかい？」

それから彼は俺にきいてきた。

俺は今までのことをとりあえず一通り話してみた。

それに彼は黙って聞き、俺がしゃべり終わると静かにいった。

「ま、最初はよくあるこつた。」

意外と軽い答えだった。

「あのレンだって最初はお前みたいな感じだったんだぜ？」

五十嵐が？

「彼女も誰か失ったのか？」

「・・・お前と同じ家族だよ。」

「ッ!!」

家族を失った・・・

それはまさしく俺と同じ状況じゃないか。

「あの時はひどかったって、竜胆がいつてたぜ？俺はその光景は見
てないがな・・・」

と彼は椅子に深く腰掛けて、一息ため息をついていった。

「お前と同じ思いをしているあいつだからこそ、少し言葉はきつか

「たかもしれないがお前に考えさせたかったんだろうな。」

・・・意外といいやつだ。

なんて思っている俺がいる。

「ま、結論は、決心と覚悟は違っていてことだ。」

決心と覚悟は・・・違う・・・

その言葉が妙に心に突き刺さった。

頭のなかで、グルグルとまわる。

「心のなかである程度の決心はついていても、覚悟ができてなければ意味ねえ。お前さんは、まだその覚悟ができてないんだよ。」

戦う覚悟が・・・完全にできていない。

だから「死ぬとき」のことを考えてしまう。

「さて、俺は基本的にお前さんが戦う、ってことに賛成だぜ。不死鳥のやつにも報告しにいこうぜ?」

「え?」

「あの天才坊やの意見も聞きにいくなだよ。」

そういつて、半強制的に今度は不死鳥の部屋へと向かう。

ノックをすると、今度は「どうぞ」と、隣にいる男と違い、返事が返ってきた。

「邪魔するぜ。」

「失礼します。」

「おや・・・あなた方でしたか。」

部屋は先ほどの誰かの部屋とは違い、とても整っていた。整理されていて、なんとも和む部屋である。

彼はそういつと彼は再びノートパソコンを見つめる。

「またオークションか？」

「これが結構安いですよ。」

「知つとるわ！！お前に何度も聞かされたぜ。」

その言葉に不死鳥は苦笑する。

「・・・それで？私にどういった相談ですか？」

「おお、よくわかったな、相談つて。」

「そうですね、初めての方が一緒ということとは、多分そうなのではないかと思ひましてね。」

初めてというのは多分俺だろう。
というか、俺しかないだろう。

俺と島風は手早く今までの経緯について彼に話した。

すると彼は笑みを浮かべた。

「まさに五十嵐さんっぽいですね、ハハハ。」

いや、問題はそこじゃないし・・・

「たしかに西野くんの考えは不安定ですね。1つ伺いますが、あなたの戦う理由とはなんですか？」

「・・・」

それは先ほど竜胆さんにもきかれたことだ。

「俺と同じようなつらい思いをこれ以上出さないためだな。」

「あなたの目的は復讐ではないのですか？家族を殺されたためのゲルレレに対する。」

「・・・」

それは見事に俺の目的に命中していた。

実際6割は復讐、たかが4割と半数以下の考えのほうを皆に言っていた。

「そちらのほうが大きいのでは？」

「・・・ああ、そうかもしれないな。」

「だったら、そんな美化は捨てるべきですね。」

やはり彼の言葉遣いには温かみがある。

だからこそ、こういう厳しいことを言われたときのダメージは大きい。

「そんな美化で周りをごまかしても、竜胆さんのような方には効きませんし、あなたの思いも伝わりません。」

「・・・」

「ただ、憎しみにとらわれては自らの我を失ってしまう可能性も少なくありません。」

なら・・・

どうすればいいのだろうか。

「まず、その憎しみを捨ててみたらどうでしょうか？」

「んなの、無理に決まってるだろ!!」

家族を殺されたこの怒りを静めろっていうのは、不可能は話だ。そんなことをしたら、この怒りを静めた怒りが俺のなかでさらにわく。

「すべて、とはいってませんよ？ある程度捨てて気持ちを軽くするんです。」

「はい？」

「ですから、その怒りをコントロールできるぐらいに抑えるということですよ。」

コントロール・・・

感情をコントロールすることなんてできるのだろうか。

俺には到底できそうもない。

感情というのは時と場合によって生じるものだ。

それをコントロールできる人なんているのだろうか。

「少しは五十嵐さんを見習つといいと思いますよ？」

「・・・」

あいつは家族が殺されたというのにもかかわらず、戦いするときも冷静だった。

たしかにそれなりの憎しみはあるのだろう。

だから「ゲルレレをこれからも殺さないといけない」といったのだらう。

けど、今、俺が戦場にでたら果たして彼女のように冷静でいられるだらうか。

調子にのって特攻！！

そして玉砕！！！！

という道になってしまっ気がする。

「怒りと記憶というのは、時間によって薄められていくものです。ですので時間に頼るといふ手もありますが、それは正当な解決法ではありません。」

つまり、自らの意思で感情をコントロールすることが正当な解決法だというのだらうか。

「あなたには、正当な解決法ができると思います。」

その自信はいつたどこからくるのやら・・・俺には全く自信がない。

この怒りが・・・ホントに自らの意思で抑えることができるというのだらうか。

「さて、五十嵐さんのところにもいきましょうか。」

「だな。俺らはいくべきことをいった。あとはお前と同じ思いをした五十嵐の意見を聞けば大丈夫だろ。」

何が大丈夫なのだろう？

俺は「感情のコントロール」という大きな課題を前に途方にくれていた。

この先が思いやられる。

天井をみて、少しため息をついた。

「おい、置いてくぞ？」

「あ、悪い。」

そんな天井をポォ〜と見ていたらいつの間にかおいていかれていた。

五十嵐の部屋へは意外と遠かった。

何度も曲がったので、もうどう帰るかはわからない。

彼女の部屋の前でノックをする。

が、返事がない。

俺はドアに触れようとすると、島風にとめられた。

「おいおい・・・女性の部屋に勝手に入るのはいくらなんでもまずいだろう？」

「そうですね。ここはもう1回ノックをして、彼女がでてくるのを待ちましょう。」

んなこといったって・・・

でてこなかったら、どうするんだし・・・

もう1回ノックをして、待ってみる。
すると、ドアが開いた。

「悪い、シャワーを浴びていた。」

彼女のいうことはホントらしく、髪が濡れていた。

とりあえず彼女の部屋にお邪魔する。

「何の用？できるだけ早く済ませて。もう1回シャワーに浴びたいから。」

・・・また入るのかよ・・・

「俺は・・・どうすればいい?」

とりあえず単刀直入にきいてみる。

「知らないわよ、そんなの。それにそういうのは自分で決めなさい。」

先ほど俺はこいつを「意外といいやつだ」と思ったが・・・それは撤回しようか・・・

「私があなただの進むべき道を決めても、それはあなたの進むべき道の価値にはならないから。」

・・・やっぱりいい奴かもしれない!

「俺は・・・家族を失った。この怒りはどうやって静めればいい?」
「完全に忘れたいなら、やってあげてもいいけど。」

そういうと、彼女は刀を持つ。

「ちょ! 待て、それはダメだから!!」
「・・・そう。」

すると彼女はしばしの間、目を閉じた。
それからゆっくりと目をあけて、いった。

「もうきいたでしょ、その2人から。」

「ああ、お前も家族を……」

「ええ。でも、私はできることなら家族のことなんて忘れたい。」

どうしてそんなことがいえるのだろうか……
俺にはその考え方がわからない。

「いつまでも苦しい思いを覚えていても胸が苦しいだけ。だけど、
忘れるわけにもいかないもの。……だからよりつらいの。」

「……」

「あなたもそうでしょ？ ホントはつらい思いなんて忘れたい。けど、
そしたら家族たちの「生きたかった」という思い出すら消してしま
うことになる。せめて生き残った私たちにだけは生きて欲しいとい
う家族の最後の思いすら……消えてしまう。」

その通りなのかもしれない。

俺も……ホントはこんなつらい思い出なんて消したいのかもしれない。
ない。

けど、何があっても忘れるわけにはいかないんだ。

「感情をコントロールするなんて無理。実際は耐えるしかないのよ。」
「……強いんだな。」

俺は気づいたら言葉がでていた。

彼女は強すぎる。

俺は彼女と違い、そこまで強くなてない。
だから耐えるなんてこと……

「でも私は家族が死んだことを「はい、そうですか」で終わらせるつもりもない。だから「旋律の剣」に入った。耐えるときには耐えて、やるときはやるの。そうやって私はここで生活してきた。」

俺には、その「耐えるときには耐えて、やるときにはやる」といった区切りがどうしてできるかが知りたい。

今の俺は、もし彼女なみの力があればゲルレレに出会えば、おそらく絶対特攻をしかけるだろう。

「俺たちはチームだ。チームってのはいいもんだ。お互いの痛みも分かち合える。」

「ええ。ですから誰かが狂気に飲まれたら、必ず止める。それがチームメイトとしての役割です。」

彼らの言葉が非常に心強く感じる。

「私のなかでは、このチームも家族同然。いや、生死をともにしている家族。」

「チームってのは、今では何より大切な存在だからな。」

「だから、仮にあなたが戦う道に進んだとすれば、あなたにもきつといい家族ができるかもしれませぬ。」

と不死鳥がいった。

「さて、覚悟は決まったか？」

「ああ。」

「じゃあ、もう一度基地司令のところまでいきましようか。」

再び基地司令業務室までやってきた。

今度は皆からきいたアドバイスを出し切っていくことにしよう！

「・・・少し頭を冷やしてこれたかね？」

「はい。でも俺の意思はかわりません。」

「・・・」

その言葉で竜胆は少し目を細めた。

「俺は戦います。」

「それでは先ほどと同じじゃないか。」

「ただ、俺は生きたいです。命を捨てるような真似はしません。どんなにつらくても、家族のぶんまで生きて、家族のぶんまで生きるとは別の意味の生きる意味をこの手でつかみとりたいんです。」

そう・・・

つかんで見せるんだ。

「本当に生きたいのなら、戦わずにいるべきだと思うが？」

「俺は戦いによって、大切な人を失いました・・・だけど、そのぶん、戦いによって大切なものが生まれることもあるような気がするんです。」

「・・・」

「このままずっとつづくままでも、大切なものなんてできるわけがありません。」

俺がその言葉をいい終わると、竜胆は静かに椅子に座った。

それから手を顎にあて、少し考えているようだった。

「戦うことによって、生きる意味をつかむ・・・か。」

竜胆は深くため息をついた。

またダメなのだろうか・・・

「……まるで傭兵だな。」

「……」

「だが我々「旋律の剣」も戦うことで生きる意味をつかむ者は多くいる。」

「……じゃあ……」

もしかして……

「検討しよう。」

そう彼はいった。

その言葉で少し体の力が緩くなる。

「やればできるじゃないか。肩の力はそうやって抜くものだ。」

竜胆は満足気な笑みを浮かべていった。

「最後に聞きたいのだが……仮に君が配属されるならどここのチームがいい？」

俺が望むチーム。

それは……俺を救い、俺がこうして戦う身になるまで助けてくれ

た理想のチーム。

「俺は・・・ここがいいです。」

そういうと、竜胆は再び満足そうに笑みをうかべた。

「五十嵐がいて、島風がいて、不死鳥がいるこのチームがいいです。」

「このチームは、たった3人と人手不足全開だ。・・・多分決定だろうな、その配属は。」

竜胆はそう微笑みながらにいった。

後ろを向くと、微笑んでいる3人がいた。

「ようこそ、西野 騎士くん。」

「これで家族がまた1人増えちまったなあ？ま、いいことなんだがよ。」

「私は家族が増えるという件については大賛成よ？」

俺は1人ずつ、握手をかわしていく。

その握手はどれも非常に心強い握手だった。

俺の怒りも、ほんの少しだけ和らいだのかもしれない。

「これからよろしく。」
「こちらこそ。」

俺は今度こそこの手で守り抜くんだ。
この第2の「家族」を。

「家族」
完

相棒

果てのないかのような海。

周りには何もなく、ただ青色の空と海だけが広がっている。

ここは太平洋。

海の水の波は、どこかの彫刻に書かれたものかのようにとまってしまっている。

当然といえば当然だ。

何しろ時間がとまってしまっている。

とまっているはずの波が、崩れていく。

彫刻のような波を、崩して進んでいく船が3隻。

「総員対空戦闘用意！！」

この広い海で、波の音すらしない、静か過ぎる空間のなかで3隻の船は1列になり進んでいる。

そんな時に、突然先頭の船からアラームがなった。

先頭の船はアラームを鳴らしつつ、先ほどより速度を上げる。

後続の船はそれにあわせて、同じく速度を上げ、攻撃態勢を整える。

「直ちに、「螺旋の剣」本部へと報告せよ。」

先頭の船の艦長は静かにそういった。

先頭の船の艦橋は、先ほどまで静かだったのにもかかわらず・・・
今は騒がしくなっている。

「こちら英国海軍所属第34海上警備隊。本部、応答を願います。」
その無線兵と思われる男が無線を使い、本部へと焦りつつ連絡をとっている。

焦るのも無理はない。

この時間がとまっているはずの空間で、こちらに急速に向かってきている巨大な影をこの艦隊の旗艦である駆逐艦「バーミンガム」のレーダーが捉えたからである。

もちろん敵味方識別装置も、味方の反応は示していない。

「対空ミサイル用意！！」
シー・ダート

バーミンガム
旗艦に続き、後続の艦船も素早く攻撃態勢に入る。

「全艦攻撃態勢よし。」
「全艦一斉発射開始！！」

その命令が出た瞬間に、各艦の艦上が一斉に光った。凄まじい轟音と同時にミサイルからの白煙が周囲を覆った。

ここに1つの無人島がある。

何もなく、木々が生い茂っている、名前もない無人島である。大きさは無人島のなかでは「大きい」という部類に入るだろう。

遠くの海を見れば、大量の油を積んだタンカーが海を進んでいる。

空は晴れていて、風もあり、非常に気持ちの良い空。

そんな無人島に1人の人らしき人が歩いていた。

「・・・」

無言で歩きつつ、何かを探しているようだった。

「・・・」

やがて彼は無言のまま、1つの木の前でとまった。

それからその木に乱暴に蹴りをいれた。
すると、地面がスライドされ畳1畳ほどの大きさの空間ができていく。

スライドされ、ポツカリあいた地面には階段があった。
その階段を彼はゆっくり下っていく。

「・・・」

細く暗い道。

足音が1歩1歩響く。

電球のような光を放つものもないため、そこはまったく闇の世界。
ふと気を抜けば常人なら階段を踏み外してしまいそうである。

やがて、目の前に光が見える。

「これは將軍閣下!」

光があけると、そこは無人島の地下とは思えないほどの広さを誇る
倉庫のような空間があった。

「よう。作業は進んでいるか?」

そこには多くの人があるものを作っている。
形的に「船」だろう。

・・・巨大な船だ。

その巨大な船体の隣では、今後取り付ける予定らしい重武装兵器が山のように積み重なっている。

その光景はまるで「ごみ山」にすら見えてしまう。

そこにいる人たちは「人」ではない。

「人」の形をしたゲルレレ。

本来のゲルレレの体格となると、力を周囲に放ち、「旋律の剣」に探知される可能性があるため、人となり力をださないようにしているのだ。

「はい。すでにMk-?は形は完成しました。」

「こいつが・・・Mk-?？」

「はい。Mk-?よりさらに重装備・頑丈に作り上げる予定ですが・・・思う以上に時間がかかっています。」

「将軍」と話している男は白衣をきている男。

めがねをかけ、マスクをしている。

「クラウドス、Mk-?とMK-?の違いはそれだけか？」

男はゲルレレのなかでも高い知識を持つ男・・・

クラウド。

「いえいえ、Mk-?は単独行動可能の戦闘空母。Mk-?は戦闘のみのために作られる大戦艦です。」

そこにもう1人、白衣をきた男がやってくる。

「ジュノール博士、これはこれは。」

將軍は軽く会釈をする。

ジュノールと呼ばれる男は別に階級が高いわけでもない。むしろ「龍」のなかでは、將軍はベスト3には入る。

「よしてください。私はあなた方に脅迫されて入ったのではない。自らの意思で入ったのですから。」

ジュノール、という名の博士はこの最高責任者でもない。最高責任者は「クラウド」である。

だが、この基地でNo.2である。そして、唯一本物の「人間」である。

「お前のおかげで人間の技術を理解し、利用することができているのだ。」

「お役に立てているのなら光栄です。ですが、私は「人間」として

ではなく、あくまであなたの部下として扱われたいのです。」

彼もまた、大天才と呼ばれるにふさわしい男である。

自らで興味があるものを分解し、徹底的に検証し、より効率の良い物を作り上げる。

それが彼の生きがいである。

そして、彼の一番の自信作は、「無人戦闘兵器」。

ヘリ・戦闘機・戦車など多様なスタイルで、兵器たちは自らで考え走り攻撃する戦闘兵器。

これらは米国の無人偵察機「プレデター」「グローバルホーク」などの兵器の分解から改良を加えて完成したものである。

「ふむ……」

將軍とよばれる男はしばし考える。

すると、ジュノールは苦笑して言う。

「でしたら、今度は「42型駆逐艦」を鹵獲してもらえますか？あの船には若干興味があります……」

「そりゃあ、残念。昨日ちよつと沈めちまった……」

「そうですか……」

その答えに、ジュノールは少し残念そうな顔をして答える。

「ま、今度見かけたら持つてきてやる。ちよつどいい土産だろ。」

將軍はそういい、苦笑する。

それから、Mk-?に今度取り付ける予定の武装の山を見て、クラウドに言う。

「Mk-?は武装がだいぶかわつたな。」

「はい、今回は私が基本的に作り上げましたから。ゲルレレの技術を最大につぎ込みました。」

ちなみに、Mk-?、現在では「雷龍」と呼ばれている戦艦は、一定の技術以外は、ジュノールが完成させた。

「Mk-?は我々2人で共同開発中ですが、なかなかうまくいかなくて・・・」

クラウドは困り顔で將軍に説明する。

本来クラウドとジュノールはそこまで仲が良いわけではない。所詮は人とゲルレレ。

故にグループを作り、対立相手より、より良いものを作ろうとしてきた。

その結果が「雷龍」および「Mk-?」である。

だが、この戦艦の完成は両者を両者ともに驚かせたところが多く・
結果、2人のグループで協力し合い、「Mk-?」を完成させる、
という結論に至ったようである。

「なあに、時間なんてかかったっていいさ。まだまだ時間には余裕がある。」

將軍は、Mk-?の船体を見上げながらに言う。
それから目を細めて白衣の男に問う。

「それで？あとどれくらいかかりそうなんだ？」
「Mk-?の兵装開発が予想以上に遅れてしまいました、まだだいぶかかると思われます・・・」
「まあ、焦ることはない。まだ雷龍を旗艦とすることで事足りている。」

將軍は静かに言う。

「艦隊は今、どこに？」
「本部の倉庫に待機中だ。」

本部の倉庫には船らしき形のもが何十隻単位でならんでいた。
しかしそれらの船は決して単なる船ではない。

「戦闘用」の船であり、同時に人間が使う船とは異なる船である。いわば「空中戦艦」とでも言おうか・・・
空中を飛び、空から強力な主砲を浴びせるのだ。

また人が使う船は何人もの人が連携して使うものだが・・・
彼らが使う船は「船」そのものが生きている。

「旋律の剣」では「船型」のゲルレレとして、恐れられている。
理由は2つ。

船型は普通のゲルレレにくらべて、弾幕をはるため近づくのが困難である。

すなわち「剣」や「槍」では苦しいものがある。

また空中を移動するため、機動力にも優れていた。

もう1つの理由はその「船型」は決して単独で動かないということ。基本は、最低でも3隻はかたまつて動いているため、手も足もでないのだ。

「昨日は雷龍1隻で「螺旋の剣」の護衛艦3隻を沈めた。」

それが先ほどジュノールが求めた「42型駆逐艦」、バーミンガムを旗艦とした英国海上警備艦隊だった。

「螺旋の剣」は「旋律の剣」とは異なる組織である。

「旋律の剣」は「リクルート」とよばれる力をもつ人材を扱う組織。

「リクルート」そのものが珍しいため、戦力も多くはない。

「螺旋の剣」は何の力も持たない人間たちの組織。
表向きには傭兵会社であるが・・・実際は「対ゲルレレ討伐組織」である。

「旋律の剣」の干渉をうけた人々が作り上げた組織。

そして各国の軍隊のなかにも少しずつ「螺旋の剣」の者たちが紛れ込んでいる。

というより、軍を指揮する上級士官に「螺旋の剣」の者たちがいて、その士官の指揮する部隊は「螺旋の剣」の命令下にあるといえる。
故に各国は知らずに、上級士官にいわれ資源を「螺旋の剣」に援助している。

普通の人間でも「螺旋の剣」の干渉をうければ時間がとまっても動けるようになる。

「螺旋の剣」は特殊な力はもたないが、兵器をもつ。
もちろん普通の人間レベルの兵器で、「レールガン」や「空中戦艦」等は使えない。
だが、戦力も多い。

「それはそれは・・・我らとてうれしいことですが、「旋律の剣」の連中も喜んでいるのでは？」
「かもな。」

現在は「旋律の剣」と「螺旋の剣」は対立中。

武力では対立はしていないが、仲はよろしくない。

「対ゲルレレ組織」は2ついらぬ。
そんなわけで、にらみ合いが続いている。

「雷龍はとりあえず素晴らしい出来だといえる。」

「一刻も早くMk-?を完成してみせます。」

「ああ。」

そついうと彼は背を向け、階段に向かう。
が、脚をとめた。

「あ、そつだ。この基地の砲台・・・バレバレだぞ。」

一般の人間には見えないだつ。
細工がしてある。

だが・・・
人間の異質、「リクルート」の力をもつ人からみれば、簡単に見つかるつくりをしていた。

「それに砲台も少なすぎる。・・・ここは俺にとって要所だ。連中におとされたら困る。」
「承知しました。後ほど改善いたします。」

その答えが気に食わなかつたのか、將軍は目を細める。

「MK-?はあとでいい。すぐにやね。」

「承知しました。」

そついうと將軍はまた静かに階段を上っていくのだった。

さて、基地司令官である竜胆と2回目の話をして3時間ほどたった。俺は竜胆司令から、正式な彼らの部隊への所属命令が下った。

そして、今、俺は「彼ら」とこのくそわかりにくい基地を歩いている。

「とりあえず戦う、とはいっても武器がなければ困りますね。」

とつうわけで、武器庫に向かっているらしい。

「精密診断室での検査の結果、お前は銃が得意らしいからな、好きな銃を選べ。」

と五十嵐はこのバカでかい武器庫に俺をつれてきて言うが・・・正直困ったことに俺は銃の知識なんて全くない。

強いて言えば、メジャーなものしかないわけだが・・・どうせ「特殊コーティング」とか「対ゲルレレ用弾」とかいうもののせいで、その知識は役に立ちそうにない。

とりあえず俺は辺りを見渡し、少し歩いてみる。

先ほどもきて思ったが、やはり武器の量が尋常ではない。

同じ形の武器まで大量に棚に並べられている。

日本警察は何をやっているのだから・・・

これだけ武器があれば闇商売だってできてしまいそうである。

俺はそんな光景に思わずキョトンとしてしまうしかない。

だが、彼らはその膨大な武器の山を見ても、フツーにしている。

・・・慣れとは怖いものである。

歩いていると、1つの銃が目にとまった。

不死鳥に先ほど進められた拳銃だ。

「おっ！？どうした？気になる銃でも見つけたか？」

島風がこちらにやってくる。

そして、俺が見ていた銃を見て、今度は島風がキョトンとした。

「そいつは・・・S&Wじゃねえか・・・」

「ああ。さっき不死鳥に進められた銃だよ。」

「おいおい、大丈夫か？回転式拳銃リボルバーは反動がとんでもなく強いんだぜ？」

それは先ほど五十嵐から説明された。

弾も6発しか入らない。

が、とても威力のある銃だときいている。

「軽いみたいだからね。」

どごぞやのアサルトライフルはとんでもなく重たくなっていたから
な・・・

「ただだよ、弾数の多いオートマチック拳銃にしたらどうだ？」

「うん……」

なんて考え込みながら、なんとなく銃を持ってみた。

すると、なんと説明すればいいのだろうか……

この個人的なものすごく納得できるというのだろうか……

なんとなくこの銃が俺に一番適しているように思えるような感情が湧き上がる。

こういうのを使って、いきなりめちゃくちゃすごい力を発動したら、それを世の中では……

「ご都合主義」と呼ぶのかもしれない。

いや、もうこの感情だけで「ご都合主義」なのだろうか……

が、そんな「ご都合主義」万歳の流れが来るはずもない。

「うお……肩が……」

とりあえず、俺はこのしつくりと来た銃をとりあえず持ち、島風の反対を振り切り、射撃訓練場までやってきたわけなのだが……

どういうわけか、1発撃っただけで、肩がイカレそうな状況になっている。

たしかに反動は強いといったが、ここまでとは想定していなかった。

しかも的からだいぶズレたところに弾が命中している。

やはりカッコつけて片手で撃つたのがまずかったのだろうか・・・すでに銃を持っている右手・・・というか右肩は「お前はすでに死んでいる」状態となっている。

「だからいったのに・・・」

島風は呆れ顔で言う。

「初めてなのに片手で撃つなんて論外ね。」

五十嵐も呆れ呆れに言う。

「いいじゃねえよかよ？だって、西部劇とかだと皆片手で撃ってるし・・・」

「あゝ、あれはご都合主義ですから。」

おいおい・・・

この非日常のほうか俺はよっぽご都合主義に思えてならないぞ。

「あれは主人公が必ず勝つと決まっていますが、現実世界はあなたが主役と決まっているわけでもありませんし、仮に主役でも生きていけるかはわかりません。」

俺の夢を見事にぶち壊す言葉をありがとございます。

今度は反省して、両手で銃を握り、的を狙う。

「今度こそ!!」

バンツと、どこかのゲームや映画で聞いたような音が周囲に響いた。俺の耳は、キーンとこれまたイカレそうになっている。

それから少しして、我にかえってみると・・・

「ぐああああああ!!」

急に肩に痛みが!!

今度は右肩だけじゃない!!

左肩まで「お前はすでに死んでいる」状態となってしまった!!

「あゝあ・・・」

五十嵐はその光景を見て、またもや呆れる。

「お前、バカだな・・・」

と島風も再び呆れている。

「まっ、バカは好きだけどな!!」

そういつて島風は笑うが・・・

それはフォローなのだろうか？

仮にフォローなのなら、まったく役にたっていない。

「やっぱり違う銃にしたほうがいいんじゃないか？」

「うん・・・」

なんてことは思うが、どうもこの銃がやはりしっくりくる。

「気に入っちゃってるみたいだな・・・」

「とりあえず銃なんて慣れよ、慣れ。」

そうだよな、慣れだよな!!

「だから今日はここでずっと弾を撃ち続けていること。弾はここに
おいておくから。」

はいいいひいひい！？

すでに2発撃っただけで肩が死にそうなのですが・・・

「お前、俺の肩に死ねというのか？」

「銃なんて慣れよ、慣れ。」

それはさっききいたし・・・

その前に俺の肩はどうなるんだし！！

「ま、頑張ってください。私も少し用事があるので、失礼させていただきます。用事が済んだらまたきますので。」

そういつて、不死鳥は部屋を出ていった。

・・・ん？

私「も」？

「・・・」

よく見てみれば、この部屋に残っているのは俺だけだった・・・

「あ・・・1ついつていいですか？」

と俺は誰もいない部屋で、一人さびしく言う。

この際、誰もいないんだし、ダメなんていわれないだろ・・・

「この俺一人でどうしろと言っんですかああああ！？」

その頃、基地司令業務室では・・・

「司令、情報部からの報告では、昨日に「螺旋の剣」の船が3隻太平洋で消息を絶っているようです。」

この基地の副司令官「大蔵」は紙を1枚持ち、基地司令官である竜胆に報告する。

「ふむ・・・沈められたのかね？」

「その可能性が高いかと。」

そう大蔵がいうと、竜胆は椅子に深く座りなおした。

「詳しく報告を。」

「その艦隊は、「42型駆逐艦」バーミンガムを旗艦としていた英

国海軍第4艦隊所属の3隻と思われます。」

「・・・第4艦隊・・・か。」

第4艦隊といえば、最近に組み直された艦隊である。

中東で勃発している紛争で・・・

その紛争だけのために組まれた米国中東艦隊とともに行動している艦隊である。

「無線中には「第34海上警備隊」といつていたようです。報告では本部への無線報告途中にきれた・・・とか。後に検証してみましたところ、3隻同時にレーダーから消滅していました。」

「警備中に、しかも一瞬でやられた・・・か。螺旋の剣の連中も気を抜きすぎだな。」

竜胆は、まるで「螺旋の剣」がやられたのをあざ笑うかのように言う。

「興味深いのはここからです。レーダーに巨大な影が映った、と本部に連絡しています。」

「巨大な影？」

竜胆は目を細める。

「それは、羽根のはえた高機動ヒューターゲルレレの群れでもないらしいと。」

「・・・船型キャンペラージェルレレかね？」

「はい、おそろくは。」

その報告を聞き、さらに竜胆は目を細める。

(巨大な影、のみとなると相手は単体。・・・いくらキャンペラーが相手とはいえ、そんなに簡単に沈められるほど螺旋の剣の船はヤワなのか・・・)

竜胆は、この報告に少し寒気を覚えた。

再び射撃訓練場。

「くそ・・・」

文句を言いつつも、騎士は銃を撃ち続けていた。

「・・・」

カチツという音がする。
弾切れである。

「……」

無言で弾を込めつつ、騎士はこんなことを思う。

（俺の最も苦手なゲームがガンシューティングだったのに……なんてピンボークジだよ。少しは俺の人生も楽になればよ……）

よく考えてみれば、騎士が拳銃なんて道理はどこにもない。騎士といえば、刀だ。

（俺も刀がよかったなあ……）

刀なら、銃と違って撃ったときの反動もなければ、そのものも銃より軽い。

（俺の名前……射手に変えるかなあ……）

ちなみに「射手」とかいて、ガンナーと読む！！

（いや、射手だと弓だから、この際「砲手」にするか……）

ちなみに「砲手」とかいて、ガンナーと読む！！
……先ほどとかわっていない。

「その名前はあまりに苦しいぞ・・・」

「だよなあ・・・かすると、何がいいと思う？」

「ふむ、我はこのままの名前で良いと思うが・・・」

「う・・・って、はっ!？」

さりげなく、会話が進むが・・・

俺は誰と話していたのだろうか!？」

まわりを見渡しても、人なんていない。

(ついに幻聴まで・・・やっぱ俺、どうかしてるぜ・・・)

「それでもない。こういう状況になったら、フツーはお前みたいに冷静にいられるほうがすごい。」

「・・・」

あの・・・どちら様ですか？

ここには透明になれる人までいるのだろうか・・・

「我はS & W M 2 9 製造番号2 0 1 5 3 7。」

「・・・」

俺はおそろおそろ銃をしてみるが・・・

銃が口をあけてしゃべっているようには見えない。

というか、この銃は正常のままである。

「・・・なあ、悪ふざけはやめてくれないか？」

「悪ふざけなどしていない。我はお前が今、右手で持っている銃だ。」

なんか、どんどんありえない方向に進んでいる気がするの俺だけだろうか？

「・・・」

「信じてないな？」

「なんでわかるんだよ？」

「お前の心ぐらい読み取れる。」

・・・プライベート終了のお知らせが俺のなかで鳴り響いた。

「ま、そんなガツカリすることはない。」

「いや、あるから！！仮にお前が銃だとしてなんでお前にそんな機能があるんだよ！！」

「そういう仕様なんだから仕方がなかるう。」

そついう仕様ってなんだよ！！

ホント、誰だよ、こんな仕様考えてくれたのは！！！！

「我はお前の相棒となるべき銃だ。」

銃って言い張るんだな・・・

「本来、普通のリクルートの力の持ち主では我と会話することはできない。」

「・・・は？」

ならなんで俺はできたんだ？

「それは、お前には特殊な力があるからだ。・・・ここでは「ユニティ」と呼ばれている力だ。」

・・・頼むから人の心を読むのはやめてくれ。

「そういう仕様なんだから仕方なからう。」

またかよ・・・
というか、その「そういう仕様」というのが、俺は気に食わないのだ
が・・・

「だが、実際そういう仕様なのだ。諦める。」

ま、この銃本人(?)がそういうなら、諦めるしかないようである。

「おそろくあの島風という男もお前と同じ力をもっておる。」
「……」

ということとは……

あの愛剣、「神風」と会話できるということか。

「お前も、同じ力をもっているのだから力の周波をあわせれば会話できる。」

周波って俺は機械かよ……

もういつていることが飛び抜けすぎていて、びっくりしたくてもできなくなってきた……
こつこつのを慣れというのだろうか。

「ちなみに周波をあわせれば、どこにいても会話できるようになる。」
「そうですね。」

そいつはSUGEEEEEE!!
という反応をしたほうがよかったのだろうか……

「いや、別にどちらでも構わない。」
「そじゃぶ〜も。」

「にしても、お前は我がしゃべるといふことに驚かないのだな？」
いや、信じていないだけだ。

だが、今はもう信じてやってもいいぜ。
何しろありえないことがまわりでおきすぎている。

「それが慣れの第一歩だというのだ。」
「……」

恐ろしいことだ……
こうして違和感はなくなってくのか……

「で？なんでお前はすぐにしゃべらなかつた？」
「我を使いこなすに十分な器か試していた。」

くそ、たかが武器が偉そうに……

「ふむ、減点10点……と。」
「減点するなあ〜！！人の心を読むなあ〜！！！」

と言っか、点数式なのか……

「ま、結果は不合格だが。」

なら、減点しても意味ねえ〜じゃねえか……

「が、何事にも慣れというものが必要。我を扱うにも……だ。そして、それは今後慣れていけばいい。」

おいおい、なんだよそりゃあ……

結局減点とか不合格とかまったく意味ないじゃん……

「主に気があれば、我を扱ってみないか？」

「……」

俺はこの銃を握ったとき、体内でものすごく熱くなるような……妙な力を感じた。

そして、その銃と今、こうして話している。

さらに俺は今後扱う銃をまだ決めてはいない！！

なら……結果は決まっている。

「いいだろう。」

少しでも使っている銃のほうがいいはずだ。

「……我は主のことを単に「主人」と呼ぼう。」

「俺はあんたのことをなんて呼べばいい？」

「S & W M 2 9 製造番号 2 0 , 5 3 7。」

長い!!

そんな数字が覚えられるわけもない。

「一応我を作り出した親がつけた名だ。」
「……」

だからってそれは大変だな、覚えるのも呼ぶのも。

「だがこれからは主人が我の主だ。だから主の……」
「ストップ、ストップ!! その「主」とか「主人」とかどうも慣れねえ……」
「何事も慣れだ。」

いや、にしたって違和感がある。

「俺のことは単に「騎士」と呼んでくれ。」
「主がそういうなら、そう呼ぼう。」
意外と話のわかるやつだ。

「お前のことと呼び名はとりあえず考えとくさ。……とりあえず今は特訓だ。」

「こうして、俺は今後、ともに戦っていく一番の「相棒」と出会った。

「相棒」

完

相棒（後書き）

あゝ、一言いいですか？

「英国海軍、ごめんなさい」「特にバーミンガム」

剣と銃と騎士？

「流星。」

「……ん？」

旋律の剣関東本部、射撃訓練場に1人の男が弾を込めながらに言う。

「お前の名前。」

「……流星……」

彼の手に握られている銃から声が発せられている。

「気に入らないか？」

「騎士がそう呼ぶのであれば我はそのような名前で返事するまでだ。」

「

……その「ど」でもいいですよ、名前なんて「みたいなノリ、やめてくれないかなあ……」

「どうでもいいわけではない。主のセンスを確かめている。」

「だから人の心を読むな！！」

「そういう仕様なのだ。」

その言葉を聞くだけで、俺は萎える……

このままいくと」「そういう仕様なのだ」「恐怖症になりそうである。」

「その恐怖症になる前に「慣れ」というものがくるだろう。」

「……はぁ……。」

なんて深いため息をつきつつ、再び銃を構える。

しかし冗談抜きで肩が限界にきているようで、先ほどよりさらに的からズレてしまっている。

「……。」

その結果を見て、ますます萎える男が、実は俺である。

そんな状況のなか、ドアが開いた。

「ん？」

「進んでるか？」

やってきたのは、五十嵐だった。

「……に見えるか？」

「見えないからきいているんだ。」

そうかい、けど残念。

お前の目のほうが正しい。

「だよな。進んでねえよ。」

「はあ……」

その答えに、彼女は深いため息をついた。

ま、そりゃそうだろう。

俺が仮に彼女だったら同じ反応をしていると思われる。

「仕方ない。先にスキルでも覚えてもらうか……」

スキルとは、各自が使える特殊能力のようなもの……と流星が銃を撃っているときに、説明してくれた。

「まずは初歩中の初歩からだから……そうね、保存がいいかな。いい？」

一応きいてくれるんだな。

よかったよかった……

勝手に話が進められそうで少し怖かったんだわ……

ちなみに、保存とは、体内に武器をしまうことができるびっくり仰天なスキルだ。

これが初歩中の初歩とは！
世界というのは広いものだ。

「いいぜ、別に。」

「じゃ保存からね。準備はいい？」

準備なんてすることあるのだろうか？

なんて俺の答えも聞かずに彼女はサツサと始める。

「じゃ、まず……」

青い空と海。

風が吹き、一瞬ここが戦地であるということを忘れてしまつぐらいに平穏な環境が目の前にある。

ここ、地中海を数十もの武装船が進んでいく。
中心には、艦載機を大量に載せた巨大な航空母艦がいる。
その周りを、盾となるべき「イージス艦」群が覆っている。

「6時の方向より対艦ミサイル接近！」

「ファランクス撃ち方はじめ！！！」

各艦が巧みな連携を見せている。

その様子を英国海軍第4艦隊が見つめている。

「さすがは「世界最強」の海軍。・・・演習中でも素晴らしい動きだ。」

新生第4艦隊の旗艦にして英国海軍の最新鋭航空母艦「プリンス・オブ・ウェールズ」の艦橋ですらそのような言葉があふれている。

彼らが見つめていた艦隊は、米国中東艦隊。

もともとこちらの方面は「第5艦隊（アラビア海艦隊）」と「第6艦隊（地中海艦隊）」で事足りていた。

が表向きでは、中東による対多国籍軍勢力の戦力拡大のためさらに艦隊を増やすべきとして、特殊に編成された艦隊。

だが本来の目的は、「螺旋の剣」による中東攻略のためにどうしても艦隊が必要だった。

そのため、米国海軍上級仕官と表向きにだしている「螺旋の剣」の者たちに意見させ、中東艦隊を作らせた。

故に表向きでは「第8艦隊」とも呼ばれている。

中東は、フリユージェルを大将とする、ゲルレレたちが多く出沒している。

故に毎日のように時間がとまり、その空間のなかで、人とゲルレレとの戦いが繰り広げられている。

陸上での戦闘は、一部の地上多国籍軍に装った「螺旋の剣」の者たちが行うが、やはり陸上だけでは戦力的に不足している。

そのため、海上からの支援部隊として、地中海艦隊を出撃させた。

海上からの支援があれば不足はないが、すると今度は地中海艦隊が狙われる可能性がある。

そのため、念には念を、という意味もおさえて、英国海軍第4艦隊をも出撃させている。

現在は時間は流れているが、各艦はいつ来てもおかしくない実戦に備えて演習を行っている。

「いつ来てもおかしくない」と思うのには根拠がある。

それは先日、英国第4艦隊所属の海上警備隊3隻が、太平洋にて行方をくらませたということだ。

英国海軍第4艦隊の「螺旋の剣」本部からの任務は、中東艦隊の護衛、および海上警備。

そのため、主力部隊は中東艦隊のそばにいて、他の船を警備に送っていた。

そんな艦隊が、たった1隻の船型キャンペラーゲルレレに一瞬でやられた、という報告を受ければどんな艦隊でも焦る。

しかも米国中東艦隊は、中東攻略の上でなくてはならない存在。故に今後狙われる可能性も高い。

そのため、英国海軍第4艦隊はすべての警備隊を本隊に戻し、そのまま第4艦隊は中東艦隊の護衛に全力を注ぐ姿勢を見せた。

アメリカに本社をもつ「螺旋の剣」。
表向きには「傭兵会社」の本社ということになっている。

が、実際は対ゲルレレのための戦闘本部である。

その最上階はただ広い一部屋があるだけだ。

その広い部屋からは、外の光景が一望できるようになっている。

「命令通り英国第4艦隊は、中東艦隊の護衛につくため各方面からすべての警備隊を撤退させています。」

この広い部屋に、似合わない。

というより、つりあわない、机が1つだけおいてある。

その机の椅子に深く腰かけている男に、秘書らしき男が報告する。

「第4艦隊の艦隊司令を口説くのは大変でしたよ……」

「いくら我らの兵とはいえ、英国軍ということか・・・」

彼らの言葉から察するに、第4艦隊の艦隊司令は米国中東艦隊を全力で守る、という命令に反対だったらしい。

たしかに、そうすると英国海軍のメンツは丸つぶれである。

目立つ仕事はない上に、一番の仕事は他国の艦隊の護衛といった畑違いな任務なのだから。

「よく説得できたな？」

「口説くのは大得意ですから。」

秘書は苦笑しつつ言う。

「それで主に太平洋上を警備する艦隊がなくなりましたが・・・どうするおつもりですか？」

「ロシア海軍を使おうと思っている。」

ロシア海軍には、4つの艦隊が存在している。

「北方艦隊」「太平洋艦隊」「バルト海艦隊」「黒海艦隊」の4つである。

「太平洋艦隊を分散させ、警備に当たらせたい。」

「・・・了解しました。総旗艦は「ヴァリヤーク」でよろしいですか？」

「目的は海上警備だ。ミサイル巡洋艦だろうが何だろうが問題はない。」

「了解しました。さっそく掛け合ってみます。」

そういうと、秘書らしき男は軽く会釈をして、部屋から出て行った。

椅子に腰かけている男は、目を細める。

それから手を組み、次なる螺旋の剣の作戦を考えるのだった。

・・・今度こそ失敗は許されない。

すでに先日の警備隊3隻の沈没で、旋律の剣との立場が危うくなっている。

次の作戦は必ず成功させ、失態に報いなければならぬ。

だからこそ、念入りに1人、その男は考えるのだった。

再び射撃訓練場。

「・・・できないんだけど？」

「お前、やる気あるか？」

結構あるんだが・・・

だが教え方が「精神を統一して、手をかざせ」だけじゃ出来るわけがないと思うのだが・・・

「できないのはお前にセンスがないから。」

「お前な、あんなテキトーな教え方でできると思ってるのか？」

「できないはずがない。」

その自信はどこからくるのだろうか・・・

彼女は自信満々に腕を組み、俺を見下すかのように言った。

「間違ったことなどいっていないし、余計なことも言っていない。

これが最短ルート。」

「省きすぎだろっが!!」

俺はこうは訴えるが・・・

彼女は聞く耳をまるでもたない。

「じゃ諦めるのね。」

そんな時に、またもや扉が開いた。

「進んでますか？」

「・・・に見えるか？」

「どうみても見えませんね。だから聞いたのですが・・・」

前と同じ反応かよ・・・

そんなに俺の心を粉碎したいのだろうか、こいつらは・・・

「お前が正しいよ。」

「そうですか・・・ま、最初は皆、そうですよ。」

と彼は微笑みながらに言う。

その笑みはやはり温かみがある笑みで、自然と心にゆとりをくれる。

186

「不死鳥ならより上手く教えられるかもね。」

「何がです？」

「いや、銃はとりあえず肩がイカしてるから、先にスキルの特訓をしようということになってな。」

「あゝ、なるほど。」

彼は満足気な笑みを浮かべて言った。

「つまり、島風さんの反対を押し切ってとった銃が使いこなせなくて、拳銃に気合がないから肩が痛くなってしまうたので銃はとりあえず置いておいて、肩を使わないスキルの特訓をする、ということですね。」

・・・なんかものすごく嫌な言い方だな・・・
たしかに一寸の誤りもなく、見事に当たっているのだが・・・
なんか不愉快だ・・・

「というか、気合があっても肩は痛くなると思うが？」
「そんなの気合です！！」

なんだよ、それ・・・
こいつは鬼教官か・・・
というか、簡単に言ってくれすぎだろ・・・

「で？最初は何から取得しようとしてるんです？」
「保存がいいんじゃないかと私は思う。」

お前に聞いているんじゃないよ・・・
俺に聞いているのに、なぜお前が答えるし・・・

「そうですね。それがあるかないかではだいぶ違いますからね。」
で、俺のことはスルーなのね・・・

「学校に行くにも武器を見えるように携帯はまずいですしね・・・」

そういえば学校のことをすっかり忘れていた！！

「学校には行って大丈夫なのか！？」

「多分。・・・ま、一応基地司令に確認しないとイケないだろうけど。」

彼女はいかにも「面倒だな・・・」と言いたげな顔で言った。

「それ以外にも利点がありますよ？」

「？」

「いつでも武器を使用できますし、直接持ち運びしなくていいですし。」

たしかにそういう利点はあるな。

それに流星はさすがは回転式拳銃リボルバーということもあって、結構重たいし・・・

「よし、じゃあさっそく教えてくれー！」

するとまたもや怖い目で見られた、五十嵐に・・・

「・・・お願いします。」

その頃、フリーユージェル将軍は「龍」本部へと戻っていた。
前に話し合った広場のような場所へと向かう。

後ろにはロイヤールとヴェルナーが続く。

「……」

その広場では、皆が手を組み、まるで何かを考えているようだった。

「……どうしたんだ？そんなに真剣な顔しちゃって……」

将軍は苦笑しつつ、ポケットに手を突っ込みながら、歩く。

「やっときましたね……」

軍師であるゼンメルが呆れ果てた様子で言う。

「貴様、今までどこへいつていた？」

「ちよいと野暮用……でいいか？」

その反応に皆は将軍をにらみつける。

「なにそんなにカリカリしてるんだ？牛乳飲むか？」
「・・・マジな話だ。」

普段はこういうのも笑顔で見ている男爵インドラの反応に將軍は少し肩の力を抜いて、真面目な顔をした。

「で？どうしたんだ？」
「中東で「螺旋の剣」が総力戦を仕掛けてくるらしい。」
「・・・信用できるのか、その情報は。」

將軍が目を細めて言う。

「ああ。だが・・・今、中東を落とされるわけにはいかない。」
「しかも我々の中東部隊はほとんどが傷ついている状態。これで人間どもが本気をだしてこられたら・・・」

ゲルレシたちにとって、今中東を落とされるわけにはいかない理由がある。

それは中東を落とされれば、「螺旋の剣」の石油確保は確実。

螺旋の剣は武器の数は充実している。

足りないのはその動力源。

すなわち中東を落とされ、石油を確保されれば中東以外に本格的武力衝突をしている本面をすべてドミノ倒し方式で、力押しで落とされる可能性が高い。

「中東は貴様の担当のはずだぞ!!」
「はいはい、そうカツカすんなよ。」

將軍はため息をつきつつに言う。

「だが実際ピンチだ。」
「ピンチは最大のチャンスらしいぜ？」
「つまり？」
「ここで螺旋の剣の連中に痛い思いをさせれば、当分中東方面は安心できるぜ。」

そうはいつても、実際かなり厳しい戦いになりそうだ・・・
と將軍自身ですらそれを理解している。

「この戦の指揮はこの私がとらせてもらいます。將軍のような手ぬるい指揮では人間に我らの強さを知らしめることができません。」

軍師ゼンメルはかけているめがねを光らせて言う。

「我が軍で根拠地のまわりを堅め、カタリナの部隊で攻めます。インドラの部隊は地中海に展開している艦隊への攻撃を任せたいものですね。」

「おいおい、あんたらの参戦は別にいいが、俺の仕事がなくなっちゃうぜ?」

するとゼンメルは地図の中東部分をもっている杖で叩き指す。

「螺旋の剣中東方面軍の総力戦ということは旋律の剣も黙ってはいまいでしょう。」

「・・・」

「我々にとつて最大の脅威は旋律の剣の介入だ。そこを貴様に任せろ。」

「ま、いいだろう。」

將軍は自信満々に言う。

將軍には自信があった。

それは今まで温存してきた地上戦力。

そしてキャンベラーの艦隊。

優秀な部下。

すべてがまだ無傷なままそろっていた。

「参謀は・・・」

「私はここの見張り番でもしてるさ。」

参謀である彼女の反応に軍師ゼンメルは目を細める。

「参謀、あなたはこの事態を正確に把握できてるのですか？中東を落とされるわけには・・・」

「正確に把握できてないのはお前だ、ゼンメル。ここを仮に突き止められたら守るべき戦力は番人^{セバート}だけじゃ苦しいだろう？」

「・・・」

その反応にゼンメルは目を細めつつも、いい返す言葉が見つからない。

「時雨の馬鹿もまたどっかにいつちまったし、センライもセンライでどっかにいつてるし・・・総力戦はお前らに任せることにしよう。」

参謀である彼女には彼女なりの考え方がある。

それに本部を守るべき戦力も必要なのはたしかなことである。

「で？大体いつに連中の作戦が指導するのはわかってるのか？」

「2週間後だ。」

「なんだ、ぜんぜん余裕じゃねえか。それだけあれば戦力を整えることだってできる。」

「それはあっちもただけだ。」

カタリナの厳しい発言に、將軍は苦笑する。

(2週間もあれば・・・Mk-?が間に合うか・・・)

会議の終了後、將軍は本部の地下へと向かう。

そこには、無人空中戦艦。

人間たちは「キャンベラー」と呼んでいる兵器が何十隻も並んでいる。

「・・・素晴らしい艦隊ですね。」

「雪風か。」

將軍がそれを眺めながらに歩いていると、後ろから声をかけられる。後ろには、白銀に光るドレスのような服をきた美女がたっている。

「なんか大変なことになってるみたいですね。お話は聞きました。」

「お前は参加するの？」

「はい。」

「お前、大丈夫なのか？」

「覚悟はできました、大和が目の前で死んだときに。」

大和とは「エンゲージ・リンク龍王の盾」の1人だった男だ。

彼は正面からの対決が得意な男だった。

だが、その男はつい先週に中東にて散った。

大和の部隊の任務は、中東の旋律の剣本部を攻撃するといった、「特攻」だった。

それを雪風の部隊が守る、というのが雪風の任務。

だが、その「特攻」は旋律の剣本部に着く前、迎撃にあい失敗した結果、大和が旋律の剣の一流戦闘チーム「フレイバー」と他多数のチームにより討ち取られたのだ。

生き残ったのは、雪風自身とごく少数だけとなってしまった。

「本来は私が死ぬべきだったんです。大和さんは戦闘にいただけで味方の士気が上昇しました。それに・・・彼が仮に相手の本部まで着いていたら・・・」

彼女は手の拳に力を入れて言う。

おそらく手に力が入っているのは本人は気づいていない。思い出すだけで苦しい、苦い記憶となっていた。

「やめときな。所詮IFなんてのはIFでしかない。」

「ですが、もし私があそこで守りきれていたら！私たちの部隊は彼らの護衛だったのに、護衛が生き残るなんて聞いたことありませんよー！」

その彼女の反応に將軍は目を丸くした。
本来彼女はここまで感情的になることはないからだ。

「……先ほどゼンメルさんからカタリナさんとは別の攻撃部隊として攻撃してくれ、と言われました。」

「……お前、一人で突っ込む気じゃねえだろうな？」

將軍はここにきて、一番真面目な眼差しで彼女にいった。

「……」

だが彼女の返事はなかった。

そのままほんの少しだけ気まずい空気が流れる。

それから將軍は苦笑して言う。

おそらくこの空気に耐え切れなかったのだろう。

「センライは？」

「センライさんなら人間との交渉にいつています。これがダメなら……」

そういつと、彼女は自らの腰にかけてあるレイピアのように細い蒼い剣を見つめる。

彼女とセンライは人間との交渉に懸けていた。

幾度となく交渉を続けてきた。

が、答えは毎回同じ。

行きは迎撃部隊に攻撃され・・・

帰り道は追撃部隊に追い回される。

雪風は今回の交渉を最後の交渉にしようと決心していた。もちろんそう決心させたのは紛れもない大和の死である。

「・・・將軍さんは何のために戦っていますか？」

「俺か？・・・俺は皆を守るために戦ってる。」

將軍は「Mk-?」、現在では「雷龍」という名のキャンベラーを見つめつつ言う。

「でしたら仮に人間の大部隊は我々ではなく、我々の家族を狙ってきたらどうします？」

「・・・」

將軍はその答えをいえなかった。

なぜならその答えを言ってしまうえば、雪風をとめることができなくなってしまうからだ。

「あなたなら1人ででもいきますよね？・・・私もそれと同じようなものです。」

彼女もまた、「雷籠」を見つめて言う。

「……この世に自らが望んで戦っている者なんていませんよ、きつと。ですから……仮に私の「幸運」が尽きたら、私の想いのぶんも背負って一刻も早くこの戦争を終わらせてください。」

そういつて、彼女は会議室の方向へと歩き出す。

自らの意思を伝え終わった、かのように。

「……まるで遺書だな。」

将軍がそういつと、彼女は歩くのをピタリと止めた。

「みたいですね……」

雪風は将軍のほうを見ず、ただ背中を向けて言う。

「……無理はするなよ？」

「わかっていますよ、それぐらい。2週間という間にだってできることはたくさんあります。」

そういつと、2人は再び逆方向の道へとお互い進み始めた。

射撃訓練場では今しばし、光がもれていた。

「そうそう、そんな感じですよ。」
「なるほど……」

さすがは不死鳥だ。
誰かと違い、教え方が上手くて助かる。

「それで完成です。」
「……」

目の前が輝いた。
再び机の上を見ると、流星が消えている。

「これが……保存。」

あまり何かがかわった、という感じはしない。
体のなかに「武器が入っている」なんて感じもしない。

ごく普通でいつも通りだ。

「今の逆パターンで銃を出します。」

そういわれ、俺は先ほどの逆パターンをやってみる。

すると、またもや視界がまぶしくなった。

そして気づかぬうちに流星を手に持っていた。

「完成ですね、お疲れ様でした。」

これが初歩の初歩・・・か。

意外と時間がかかってしまっていた。

「もう一度だけ練習しておくか。」

復習というやつである。

何事も重ねて練習しておけば忘れない。

すると突然でていた光が赤色になる。

「なんだ・・・これ？」

「まずい！！力をストップさせてください！！」

不死鳥が珍しく大声を上げた。

しかし、そういったときには遅かった。

赤色の光は、いつしかまぶしすぎるぐらいにだていた。先ほどの通常の保存のときの光の2倍はでている。

あたり全体が真っ赤になった。

そしてその3秒後に、射撃訓練場のなかで轟音が響いた……

「ゴホツゴホツ……」

俺が目をあけたとき、射撃訓練場のなかはぐちゃぐちゃな状態になっていた。

射撃したときに破片が撃つた人にあたらないようにあるガラスはバラバラに割れていた。

ここに入るためのドアは廊下まで吹き飛んでいた。近くにあった棚や机はもはや原型をとどめていない。

「やってくれましたね……」

「まさかこんなに早く力を暴走させるなんてね……」

2人は平然とたっていたが……
その様子には呆れともう1つの感情……
驚きの感情があった。

「あゝあ・・・直すのが大変そうですね・・・」

不死鳥は苦笑しつつ言う。

「ごめん。」

「いや、大丈夫ですよ、多分。初心者にてよくあることですし。」

その「多分」というのが地味に怖くてならない。

俺はとりあえず立ち上がる。

それから壊れた机の近くの床に吹っ飛んでいる流星を拾う。

流星は無事のようにだ。

完全に立ち上がるとあることに気づく。

瓦礫の下から蒼色の光がもれている。

「・・・これは？」

俺は素手で瓦礫をどけていく。

「この光は……」

不死鳥や五十嵐ですら首をかしげている。

「とりあえず瓦礫をどけてみるしかないみたいね。」

そう彼女は言うのと、瓦礫をどかし始めた。

こんな華奢みやびな体つきなのに、テキパキと重い瓦礫をどかしている。

……もしかして俺より力があるんじゃないのだろうか？

なんて彼女の姿に驚きながらも、俺も続いて瓦礫をどかす作業を行う。

「はぁ……」

だが、その光のもとはいくら瓦礫をどかしてもでてこない。

光そのものはだんだんと強くはなっているので近づいているのはたしかなのだが……

「これだけどかしてもでてこないということとは……相当光をだしていますね。」

「源力石かしら……」

と彼女は言う。

「源力石」ってなんだよ……

「源力石とは自らの力を格上げすることが出来る石だ。」

流星が説明してくれた。

何気に流星は良く知っている。

「そうそう、でも1回しか使えないっていうのは不便よね。」

「ああ、1回使うと石にある力がなくなるから、源力石もただの石になってしまっからな。」

なるほど……

ってあれ？

「……って、今の誰!？」

五十嵐は瓦礫をどかす作業をやめ、こちらを見る。

「……俺はしゃべってないからな。」

「私も同じく。ですが、私の耳にも聞こえました。」

え？

流星って「コミュニティ」とかいう力がなくてもしやべれるのか？

「そんなことはないはずなのだが・・・我の音が響いているのはたしかなようだな。」

「ま・まさか、その銃!？」

彼女は銃をにらむ。

「あんた、何したの?」

「何もしてねえよ。」

なぜいつも俺が怒られなければならないのだろうか・・・俺はつくづく疑問である。

「流星は普段しゃべれないはずなんだけど・・・」

「ということは、あなたには「コミュニティ」の素質があったという事ですね。」

不死鳥はやはり頭がいい。

すぐに気づいてしまう。

「こんなにも早くスキルを習得するとは・・・」

不死鳥は珍しく真顔で、手を顎にあてる。

確かにそういわれてみればそうだ。
俺はもうすでに「コミュニティ」と「保存」が使えるようになって
いる。

「それに「探知」も騎士には素質があると思う。」

「探知？」

「普段から人に化けているゲルレレを見つけることができるスキル
よ。」

すでに3つか・・・

「ですが探知は前にもいった通り、非常に珍しい力です。やはり彼
の力は・・・」

不死鳥がそう言おうとした瞬間である。

「いつまで余をこの瓦礫に閉じ込めるつもりだ？早く瓦礫をどかせ。」

女性のような高い声が聞こえた。

その声は蒼い光がでている方向から聞こえている。

俺たち3人は顔を見合わせる。

とりあえず瓦礫をさらにどけてみると、そこにはまるで「軍刀」の
ような美しい細剣があった。

その剣は刃が蒼色の光をだして、その光は鞘さえも貫通して外にでて、非常に強い光だ。

「・・・この剣は・・・」

先ほどの力の暴走、とやらの前にはなかった。

「おお、お主が余のご主人様か。」

非常にどうでもいいことなのだが・・・

今、「ご主人様」といわれ、ついついメイドを思い出してしまった・・・

「騎士よ、そんなどうでもいいことを思うでない。」

「だから人の心を読むな！！」

というか・・・

なぜ俺がこの剣の主人なのだろうか。

俺はこんな剣は始めてみた。

「余は主の力によって生み出されたのだ。」

おお、なんかまたとんでも発言が・・・

ホント、世界って広い！！

「冗談ではない。」

「ということは、騎士の力の暴走で生まれた……ということか。」

俺の力ってホントなんなんだ？

力を暴走させると、剣まで作り上げてしまうのか……？

なんか自分で自分が怖えよ……

「そういうことじゃ、愚民ども！！ちなみに余の主人にはこれから

「様」をつけることじゃ！！」

「何、この剣？生意気ね。」

五十嵐は剣相手ににらみつける。

「愚民ども、お主どもが誰のおかげで我ら武器と話せていると思っ
ておる？」

え？

ということは、この剣のおかげなのだろうか？

「その通りじゃ。さすがはご主人様。」

「……」

五十嵐は「なんか納得できない」という目で見ています。

「もしそれがホントならすごいことですよ、五十嵐さん。」

そんな五十嵐を見て、不死鳥が言う。

「そうじゃそうじゃ！愚民ども、もっと余を称えよ！！」
「……やっぱ生意気ね。」

頼むから喧嘩とかはしないでくれよ……
と心から願う俺がいた。

喧嘩とかになったら非常に面倒そうだ。

その後、俺はとりあえず俺の部屋へと戻った。
剣と銃、2つの武器を「保存」して。

しかし、ますます意味わからない方向へといっている。
俺から生み出された剣……

「はぁ……」

俺は倒れるかのようにベッドに寝っ転がった。

やっと今日一日という日が終わろうとしている。

昨日の夜に彼女たちと合い、そのままここまできて……
今日一日いろいろとありすぎだ。
頭が痛くなりそうだ。

よくこんな状況でまともにいられるものだ。
こんな状況で発狂しない俺がすごいとすら思えてしまう。

あの蒼剣の名前を何にするべきか……
考えておかねばならない。

「……」

考えてみれば、俺の武器は2つとなった。
が、俺はこの2つを使いこなせるのだろうか？

戦いの最中にも保存を繰り返して、接近戦は蒼剣。
遠距離戦は流星とするか……

いや、もっと手っ取り早いのは、片手に剣、片手に銃というスタイルをとることだが……

現在、流星は両手で撃つだけで肩が死ぬそうになる。

「……無理だ……」

そう思うとますます萎える……

たしかに、こういう「SF」的な戦士系なヒーロー的存在になることを憧れていた歳もあった。

だが歳を重ねるごとに「そんなものはいない」という現実を知った。

そんな状況下で、こんな状況になって戦う、と俺が決めたとき……俺は地味に「騎士」らしく格好良く戦うイメージがあった。

が、この状況はなんなんなのだろうか……
「銃」という地点で騎士でもなんでもない。

しかも今では「片手に銃、片手に剣」といった、オールマイティー？
というか、なんというか、我流なスタイルになりかけている。

もはや俺の理想からかけ離れすぎた。
それはもはや「騎士」ではなく、「海賊」である……

「……寝る。」

とりあえず寝ればすっきりするだろう。
うん、してもらわないと逆に困る。

俺は明かりを暗くした。

今日という日は、珍しくなかなか寝付けなかった……

中東では現在も戦いが行われていた。

銃撃戦、轟音、爆音が辺りに絶えず響き渡る。

「行け行け行け！！」

軍用トラックから兵士たちが降りて、奥のほうに見える市街地へと進んでいく。

市街地には、すでに対多国籍軍勢力の人間が至る所で待ち伏せている。

そんな市街地を戦闘ヘリコプターが空から掃射して蹴散らしていく。

1機のヘリがミサイルを放ち、それは比較的高めの建物に当たった。ちょうどその瞬間だった。

……風がやんだ。

「・・・きたか。」

通常の攻撃ヘリや戦車、人ですらその場にとまっている。ただ一部の兵や車両のみが動いている。

空を見え上げると、太陽の方向から羽根のはえた高機動ゲルレレヒュートが大群でやってきていた。

動くことのできる者たちは銃を撃ち続けるが、相手の数が多すぎる。距離をつめられ、やがてピュート特有の長く鋭い爪に兵が引き裂かれていく。

「中佐！！数で明らかに劣勢です、ここは撤退命令を！！」
「くっ・・・」

この隊の隊長と思われる男は辺りを見渡すが、どう見ても劣勢。勝ち目なんてあるわけがない。至る所で兵士たちが倒れていく。

「ここは一旦撤退する！！」

そう彼が無線を使った瞬間である。

「待てよ。」

「ん？」

中佐が振り返るとそこには黒いマントをした男が1人立っている。

その男はゆっくりと赤色に光る剣を抜いていく。

「せつかく男爵インドラがピユートの1個戦隊を貸してくれたんだ。あいつらが雑魚の気をひいているうちに、楽しい勝負をしようじゃないか。」

彼がそういう終わった瞬間に、剣もすべて抜き終わった。

「撃て!!」

その剣を抜き終えたと同時に戦車砲が火を噴いた。彼のいた場は一瞬で黒煙が立ち、見えなくなってしまった。

だがやがて黒煙が消えてくると、ゆっくりと歩いてくる影が見えた。黒煙にまぎれながらも、剣の赤い光が鮮やかに輝いている。

「なっ!?!」

その光景に誰もが驚く。

誰もが確実にあたった、と思える弾だった。

「この俺を誰だと思っているんだ？伊達に一匹狼は気取ってねえぜ？」

そついに終わると彼は消えた。

後ろを向いてみれば戦車が見事に戦車砲だけ吹き飛ばされて、車体だけが無残に残っている状況があった。

「!？」

その光景を見たときには中佐のまわりの兵士たちは赤色の液体を首から大量にふきだして倒れていた。

そして中佐がようやく戦車が破壊されたということを脳で理解したとき……

首から上は宙へと舞っていた。

「……」

彼はあたりを一掃し終わると、ゆっくりと歩き出す。

司令を失った兵たちは降参をした。

すると、彼は降伏した兵に捨てた銃を戻した。

「降伏は許さん、抵抗しろ。」

「なっ!?!」

兵たちは皆、驚く。

そして最初の1人が銃をとった瞬間に彼はまた剣を抜き、殺戮を繰り返した。

・・・彼女の名前は時雨。

「エンゲージ・リングの1人。
龍王の盾」

彼は夢にも思わないだろう。

自らの腕の上達のため、もっとも戦いの激しい中東にて特訓していた。

その中東で2週間後に、ゲルレレ中東方面軍と人間たちの中東方面部隊の総力戦が行われるということに。

・・・中東総力戦まであと2週間。

「剣と銃と騎士

?」
完

平和な時間、明るい場所

現在俺、西野騎士はというと、お久しぶりに学校へとやってきていた。

ま、久しぶりの学校ということもあり、友達たちとも顔をあわせるのはそれなりに久しぶり。

教室に入ると、「無断で」欠席していた俺に皆の視線が注目する。

「よっ、お前なんでこんなに休んでたんだ？」

・・・なんて言うべきかわかる人はいる？

ま、ありのままを話してもどくせ「・・・頭大丈夫か？」といわれるのがオチだ。

「フツ、無断欠席ほど心が爽やかになるものはないぜ。」

「・・・」

・・・今落ち着いて思えばなんでこんなこといったんだろう・・・

「つまりお前は無断で欠席して、楽しい毎日を過ごしていた、ということだな。」

友達のうちの1人である「片倉」が言う。

・・・冗談じゃない。

これが楽しかったら、俺はなぐんの文句もない。

「そういうことじゃない！俺は俺で忙しかったんだ！！」

「人生ENJOY！！・・・ってか。ヤダヤダ・・・」

「ま、落ち着けて。こいつにはこいつの事情があるんだろうぜ？」

すると後ろから俺がクラスで一番信用できる男子生徒「樋田」がやってきた。

・・・ちなみに・・・だが・・・

「樋田」という男は野球部で、ケンカなら誰にも負けない。

だがそんな強さをもっている、皆のことを考えて動ける。そんないい奴だ。

「樋田、お前はいつも皆の肩を持ちすぎだぜ？もう少しババンと攻めてもいいんじゃないかねえか？」

「本人が言いたくないならそれでいいんじゃないか？」

どうやら今日も樋田に救われてしまったようだ・・・

そんな会話をしていると担任の先生がくる。

「出席とるぞー！」

いつの間にやらチャイムもなっていたらしい。

・・・時間って経つのが早いね！

「おっ、西野。久しぶりだな。」

・・・先生ですらこの反応。

ま、「無断欠席」ですからね。

担任はこのクラス、37名の出席をとると、出席簿を閉じて教卓に手をバンと叩きつける。

「・・・痛ててて・・・」

この教師はバカなのだろうか・・・？

「きよ・・・今日は転校生がいる。」

「おお!？」

転校生か。

・・・この時期では珍しいものだ。
しかも高校で。

皆もテンションが上がっている。

ただでさえ珍しい転校生がうちのクラスなんて、まさに神様に感謝だ。

・・・可愛い子かな？

なぐんで期待が俺のなかでも若干あつたりしたりして。

・・・が!!

俺の期待は見事にぶち壊されることとなる。

「五十嵐 漣、よろしく。」

「島風だ、諸君よろしくたのも〜!!」

「不死鳥 翼です、よろしくお願いします。」

・・・わ〜い、てんこーせーだ〜(棒

「一気に3人とか、マジ仕組まれてるみたいだぜ!」

いや、実際仕組まれてるだろ。

「あゝ、席が足りないな・・・少し待っていてくれ。」

そんなことをいうと、担任は廊下へとでていった。

・・・転校生がくることぐらいわかっていただろうに、机ぐらい用意しとけよ。

とか思ったりする今日この頃。

「待っていたまえ、秘境の机たちよ!!今、この奇跡の天才教師が
迎えに行く!!ひゃほ〜!!!!」

・・・なぜ廊下で騒ぐ・・・?
・・・ダメだ、あの教師・・・

「さて、保健室にでもいくか。」

すると早くも「飽きた」と顔に思いつきり表情がでている島風は教室を出て行くこととする。

「ってちよつと待った!!！」

「ああ？なんだよ、西野。」

「何勝手に抜け出そうとしてるんだよ!!！」

みんなもいつてやれ！

転校生がいきなり授業放棄とかさすがだぜ。

プロはやることが違う！

「っていうか、お前と転校生って知り合いなのか？」

「・・・あ・・・」

我ながら完全なる自爆。

「ハッハッハ、こいつとはとっつてもいいか・ん・け・いなんだぜ。」

その誤解を招くようないい方はやめていただきたい。

「ふ・不潔よお〜!!！」

「BL!？薔薇だと!？西野、お前・・・やっぱりそうだったのか・

・・・」

「やっぱりってなんだよ!!！」

・・・ほら、バカどもが食いついた・・・
もうやだ、この高校・・・

「俺も一目見たときから薄々感じてはいたが・・・」

それはすごく失礼だな、おい。

「これは薄い本量産だな、うん。」

「・・・薄い本？」

「この際、ヨスガうちまえ!!」

・・・片倉のいう言葉は専門用語すぎて何がなんだかわからん。

「そうすれば俺が薄い本を書いて・・・コミケで売る!!」

コミケ？

コミュニケーション？

「そりゃずいぶんと儲かり話じゃねえの。ここは1つ、俺と山分け、
でびびりよっ。」

その話に島風はのっているように見える。
・・・世の中はわからないことが多いな。

「へえ、転校生、そういう知識があるのか。」
「ふ、不潔よ、!!」

・・・これつてもしかして・・・
今の女子、「相山」の言葉でなんとなく想像がついたことにはついた。
・・・ここは否定したほうがよさそうだ、良いに決まってる。

「今度ともにアニメイトへ行かないか？」
「いや、個人的には虎の穴かな・・・」

・・・意気投合、とはまさにこのことか。

「あ、あの！不死鳥さんって好きな食べ物とかってあるんですか？」
「僕？・・・僕は基本野菜が好きかな。」
「わ、私も大好きです！」

・・・イケメン氏ね・・・

「じゃあ今度、一緒にレストランなんてどうかな？」

「は・はい！わ・私でよければ！！！」

「あゝ、ずるい〜！」

・・・なんとというハーレム。

・・・羨ましくなんてないぞ、決して羨ましくなんて！！

「五十嵐さんって得意教科ってあるの？」

「数学と理科。」

・・・定型的な理系だな・・・

「今度一緒に勉強しない？」

あっちはあっちで女子生徒と仲良くやれているみたいだ。

・・・てか、なじむの早いな。

「嫌よ、あんた頭悪そうだし。」

さっそく友達ができてよかったな・・・
っておい！！！！

お前、そりゃないだろ！

「ええ！？」

「じゃあこの問題とける？」

「・・・え・えくと・・・」

あの女、サイテーだ・・・

俺、絶対あの女には学校では近づかないぞ！！

とりあえずホームルームは担任が机を探しにいつてから帰ってこないの、勝手に終わらせてしまった。

休み時間になっても皆は転校生3人に夢中。

そんな中、1人だけ目もくれずに外を向いている男子がいる。

・・・樋田だ。

「よっ、お前はあの3人と話さないのか？」

「そのうち慣れるだろ。」

そんなことを言って、再び窓の外を見る。

「ちょっと樋田という言っの、来なさいよ。」

するといきなり横から首を突っ込んでくる女性が1人。
・・・言うまでもない、五十嵐だ。

「なんだ？」

「この高校、初めてだから案内してほしいんだけど。」

「おう、任せとけ。」

・・・珍しいな、こいつが自分から進んで人に話しかけるなんて・・・

さて、その後は非常に大変だった。

島風はこの高校の教師にケンカを売りまくるし・・・

五十嵐はこの高校の生徒にケンカを売りまくるし・・・

不死鳥はこの高校の女子生徒をナンパしまくってるし・・・（し

かも全部成功中

マジこの高校生活終わっとる・・・

「はあ・・・なんなんだよ、この疲れ・・・」

そんな愚痴を吐きつつも、時間は刻々と過ぎていき、気づけば帰り道となっていた。

帰り道は片倉、相山、樋田、それと3人組み。

あと俺、なので結構大人数で帰っていることになる。

「すなわち!!ここ最近のアニメは「こいよI氏!」レベルが高い
気がするんだよねえ・・・」

・・・I氏?

・・・ま、一応言っておくが東京都の現都知事とかじゃないんだか
らな!!!

「てか1クールを量産しすぎなんだよ。俺はあれほど2クールのほ
うがいいと・・・」

・・・意味わからん。

こっちの話はとりあえずわからないので、右を向く。

左がダメなら右!

これ基本中の基本なり!!!

「今日は助かったわ。また今後も学校についていろいろ教えてもら
えると助かる。」

「いってことよ。」

こいつ(五十嵐)が人に感謝をするなんて・・・
気に入られてるな、樋田。

「気に入られてますね、樋田くん。羨ましい限りです。」

お前はハーレムのくせにその言葉を言うか・・・
その言葉、俺からしたら嫌がらせにしか聴こえん。

「ね・ねえ、西野くん。」
「ん？」

後ろを見てみれば相山がにっこりと笑っている。

「3人もこのクラスにくるなんてすごいよね！まるで仕組まれてるみたい！！」

ですから先ほども仕組まれていると（ry

「だな、ホント奇跡としかいい様がないな。」

我ながら声に張りがない。

・・・俺、もう疲れたんだ・・・

「疲れてる？」

「疲れてる。」

「大変ね。」
「大変だよ。」

「って俺はリピーターか!？」

「・・・そういえば素朴な疑問だが、物事に「er」をつけると人になるが・・・」

「なんでも通用するのだろうか。」

「なあ、そういえばなんでも語尾に「er」をつければ人になるのかな？」

「は？バカじゃないの？」

五十嵐はこちらをギロリとにらむ。

「ホントだぜ、「ist」もあるだろ。」

「そうそう、ペロリストとかミルキストとか。」

「・・・なんだよ、その「テロリスト」に似た感じの言葉は・・・片倉と島風に関しては、もうこいつらに意見はきかん。話がゴチャゴチャになるだけだ・・・」

「あ、私こつちだから!またね!！」
「おう!」

最初に相山が道を曲がって、歩いていく。

「俺も今日はここで。」

「……また病院か？」

「ああ。」

樋田は彼の彼女が病院で入院しているため、よくそちらに行く。
今日もそうみたいだ。

「じゃ、俺もここでだな。」

「今日は早いじゃないか、片倉。」

「家に帰ってまたアニメを見るんだよ！まだ今期のアニメは間に合
つてないのがあるんだから！！」

……さっきまでのアニメの話だったのか……
ようやく理解した。

「じゃなー！！」

そんなこんなで結局最終的にこの3人となったわけだ。

「……で？樋田は彼女がいるぞ？」

とりあえず気に入っているようだが、五十嵐には言っておかないといけないことがある。

「あつそ。別に好みじゃないし、あんなの。」

・・・ひどいいい様だな・・・

「じゃあなんで・・・」

「気づかなかつたんですか？」

今度は不死鳥が俺に向かって言う。

「気づかなかつたって？」

「“探知”があるくせに気づかないなんて・・・」

五十嵐はすごくくダルそうな顔でこちらを見る。

「彼、素質あるわよ。」

「・・・は？」

「たまたまお前を見張るために来た高校で、素質のある男と会うなんてな。」

・・・まさか彼・・・

樋田にも俺と同じような能力がある、ということなのだろうか。

「セクレットも反応したという報告はない。・・・ということはまだ目覚めまでは少しかかるわね。」

セクレットとは、力に目覚めた者を探し当てるレーダーのようなものらしい・・・
ということを前に聞いた気がする。

「今後目をつけておくわ。」

その人を監視する、みたいな言い回しはよくないと思つのは俺だけだろうか？

そして気づけば基地のなか。

「・・・なんで俺、ここにいらんだっけ？」

「あゝ、それは俺がお前を後ろから殴ってだな・・・」

「もう少しまでもに人を扱えないのか!!」

いきなり後ろから殴られる、って今後警戒しなければ!!
特に島風には!!

だがよくよく考えると五十嵐も殴ってきそうだし、その気になれば不死鳥だって自慢のノートPCを使って角を使ってガツンと・・・
・・・信用できねえ・・・

するとドアが開いた。

「どうだった？久しぶりの学校は。」

「これはこれは、基地司令。」

基地司令官である竜胆がやってきた。

「・・・疲れました・・・」

「だが学校にいた時間では少しは暗い記憶を忘れられたらどう？」

「!?!」

そっぴわれてみれば!

・・・今、また思い出したけどな・・・

「今後も学校へ行く事は許可する。せめて学校ぐらいは楽しんでお
け。」

そう言うと竜胆は部屋からでていった。

ま、彼の言うことは正論だ。

俺はもう戦うことを決意した身だ。

いつ実戦に送り出され、そしていつ死ぬかもわからない。

そんな中で唯一疲れるけどこんな非日常を忘れられる学校は最大の
救いの場なのかもしれない。

だからせめてそれぐらいは全力で楽しんでおこう！

俺はこの暗い現実のなかで、やっと明るい場所を見つけたのだった。

「平和な時

間、明るい場所」 完

中東遠征命令？

ここは関東司令部の射撃訓練場。

関東の「司令部」だというのに、練習している人はほとんどいない。

いや、1人だけ練習をしている人がいる・・・ことにはいる。

その人はただ一人でせつせと弾を込め、ひたすらに的を狙い、そして撃つ。

・・・ただし当たらない。

「・・・」

彼は少し息を切らせて、再び回転式拳銃リボルバーに弾を1発ずつ込めていく。

「ご主人様、本日はもうやめておいたほうがよろしいでは？」

「あともう少し・・・」

「そう言っつて、もう7回目の装填になるぞ？主おんじであるお前が壊れてはどうにもならん。」

俺の名前は、西野騎士。

「騎士」って名前なのに、目の前にはレイピアのように細い剣と・・・

「拳銃」がある。

「そうじゃそうじゃ、それより余にも名前をそろそろ考えてくれな
いかのう？」

・・・人が特訓中だというのに、このうるさい連中が・・・
俺の相棒たち、となるわけだ。

俺のとある特殊能力？

そんな感じらしきもののおかげで武器としゃべれてしまっている現
状がここにある。

こんなの日常茶飯事だ。

最初は驚いたり否定する考えを持っていたけど、今じゃそんな感情
なくなった。

何をみても、「あ、そうなんだ」と理解するぐらいだ。

何しろ、今のこの世界は「なんでもあり」の世界なのだから・・・

だから武器がしゃべる、なんてのはちよろ口のことなのだ。

この世界には「時間をとめる」というチート技を実際世界で使った
り・・・

風よりも早く走れる、とか「陸上選手になればいいんじゃない？」と
思えるぐらい足の速い奴もいれば・・・

はたまた怪我をしてもすぐに治っちゃう奴だっている。

それどころか、ここ最近この司令部を観察していると、ホントにこ
れが現実世界なのか？

と疑いたくなることばかりが起こっている。

極端な話、びっくりすることに疲れたのだ。

・・・だから普通に受け流すしかない。

どうせ受け入れるしか選択肢はないわけだし。

・・・きっと俺は今後何をみても驚かないだろう。

ここですでに最高潮なものを見ているのだから。

「ふう・・・」

ようやく弾を込め終わり、銃を持つ。

この回転式拳銃の正式名称は「S & W M 2 9 製造番号20 5

37」らしい。

長つたらしいので、「流星」という名で俺は呼んでいる。

実際この拳銃の使いこなしはかなり難しいと思われる。

ここにきて、すでに1週間とちよつと。

初日から、俺の力が暴走した、とかで剣が出来た。

なんて出来事もあった。

そつから1週間とちよつとだ。

家族を失った悲しみの傷はまだ完全には癒えてはいない。

だが何もしないよりは何かをしたい。

俺はとりあえずこの銃をいち早く使いこなせるようにするため、日々特訓している。

・・・のだが・・・

「うおおおおおおお・・・肩が・・・」

撃った衝撃・・・すなわち反動がでかい！
とにかくでかい！

ここ1週間、とにかく慣れるために銃を撃ちまくってはきているが・・・
なかなか反動に慣れられない。

しかも・・・

「・・・下手くそ。」

後ろで腕を組んで、俺の特訓を「キリッ」とにらみつける女性が一
人。

五十嵐、俺の所属するチームのリーダーだ。

さらに彼女の後ろに、男性が2人。

島風と不死鳥だ。

彼女は俺の撃った、的外れの位置に弾が着弾していると思われる穴があいているところあたりを指差して言う。

「あんだ、この1週間ぜんぜん進歩してないじゃない!!やる気あるの!？」

彼女の逆鱗にふれて、怒られることも珍しいことではない。ここ1週間ずっと怒鳴られっぱなしだ。

後ろでは、呆れ顔をする不死鳥と、俺が怒られているのをみてニヤニヤと静かに笑う島風。

「島風!あんたも笑ってないでなんか言いなさいよ!!」

そしてその怒りは島風を巻き込む。

・・・ご愁傷様です。

しかしその彼女の怒りとは裏腹に、いまだに笑みをうかべている島風。

苦笑しながら彼は言う。

「ま、しょうがないんじゃないの?拳銃なんて実際撃ったことなかったんだろっし・・・」

そして今度は不死鳥がノートパソコンを開いて、画面を見つめつつ言う。

「今の弾の着弾点、昨日より0.03mm縮まっています。これも慣れかもしれませんがね。」

・・・なんか逆に悲しくなってきた・・・
0.03つてどんだけちよっとなんだよ・・・

そんな地味な萎えに心を蝕まれそうになりつつも、再び銃に弾を入れていく。

そんなこんなをしていると、放送が入った。
ノイズも入る。

・・・だいぶ古いものなのだろうか・・・
おいおい、関東司令部、マジで頼むぜ・・・

「総員至急集会場にて集合。」

いきなりそんな命令が入る。

・・・俺としてはフツーだったが、後ろ3人は驚いていた。

「・・・総員？ついに人手不足も山を越え、関東司令部も終了のお知らせがやってきたか？」

島風が肩をまわしつつ言う。

ま、そもそも連中が^{ゲルレレ}1体や2体なら総員なんて集められるわけない。人手不足といっても、そこまで人がいないわけでもない。

「それも“至急”よ？なんか重要なことかしらね・・・」
「ふむ・・・とりあえず行って見ましようか。そこでわかることでしょうし。」

そんなこんなで基地の中心にあるといわれている集会場へとやってきた。

・・・俺は方向音痴なので、基地の中心にあるといわれてもわからんが・・・
とりあえず中心にあるらしい。

そこはたしかに広く、この基地にいる全員が集まっても余裕ができる、安心の広さだ。

・・・1000人集まっても大丈夫

一番前には、拡声器を使ってしゃべろうとしている竜胆基地司令と、その隣には大蔵副基地司令が大量のプリントをもってたっている。

皆は綺麗に列をそろえて「気をつけ！」の姿勢をしてたっているあたりをみると、小学校の運動会と大してかわらない光景がここにある。

「皆集まったようだな。・・・それではこれより緊急集会を始める。」

・・・誰かがやらかしたのだろうか・・・？
なんだか妙な空気だ。

「長つたらしいのが嫌いなので、一言でまとめる。」

その言葉に皆が首を傾げる。

何なのだろうか・・・？

「皆には今日の午後には中東司令部へと遠征にいつてもらう。」
「なっ!?!?」

「遠征というよりは“増援”といったほうが正しいのかもしれないな。」

中東……

中東って、あの世界地図とかにある中東か！？

しかしそれをきいても、驚きの表情はみせるが口には出さないまわりをみていると……

さすがに慣れているのかな、とか思う。

「諸君らも知つての通り、中東では我が同志たちが勇敢に敵ゲルレレに対して攻撃を行っているが依然として敵の守備陣は強固で落ちない。さらに現在大規模なゲルレレの戦力集中もここ、中東で起こっている。」

つまり連中が集まっている分、ちよびちよび叩くよりは一気に畳み掛けるほうが良い、という考えか。

しかしそれはこちらにも大きな被害がでる可能性が高い。

……負ければなおさらだ。

それを承知で、関東司令部からほとんどの戦力を中東に送る、というのか……？

その頃、アメリカに本社を構える・・・

表向きは傭兵会社の肩書きを持つ、ゲルレレ討伐のもう1つの組織「螺旋の剣」本社でも多くの将兵が集められていた。

傭兵会社といっても、この会社の情報範囲は広く、正規軍を動かせる者も何人が混じっている。

一番目の前の席には堂々と足を組んで座っている男性、この組織の最高責任者である「アーネスト・P・ワクレー」がいる。

その後ろにはこの傭兵会社の「エース」といえる部隊の隊長や1個師団の師団長など傭兵会社の規模をこえたレベルの人物たちが非常に多く集まっていた。

「皆さんを集めたのは他でもありません。」

会議はちょうど今、始まったばかりのようだ。

「現在中東全域で、ゲルレレと我が部隊が交戦をしていますが押され気味という報告が入っています。連中は石油関連施設さえも手におさめている今、我が方の中東部にての車両の燃料や弾薬もわずか。このままでは中東師団は壊滅します。」

とりあえず今の現状確認を行っている。
説明している男性の言葉に、将兵たちは若干小馬鹿にするような笑みを浮かべる。

「さらについてこの間には太平洋警備艦隊が船型ゲルレレキャンペラーによって一瞬で沈められました。正直な話、このままではわが社の面目は丸つぶれです。」

男性がパツと合図をすると、目の前の壁に地図がでた。

「そこで我々はこの失態を取り返すため、中東を攻略してしまう作戦を考えました。」

「おいおい、そんな簡単に攻略できてたら中東師団は苦労しないだろう？」

「それとも中東師団が軟弱なだけか？」

なんて言葉が飛び交い、笑いが生まれている。

「中東を攻略すれば石油は手に入ると同時に、一気に相手の多くの戦力を消費させることができる。連中にとっても中東は重要なポイントのようだからな。」

社長であるワクレーがトーンの低い声で言うと、先ほどまでしゃべっていた皆が静まり返る。

「諸君らにはこの中東へと向かってもらう。」
「!?!」

その言葉に皆が同様する。

「しゃ・社長、正気ですか!?ここにいるのは我が社の戦力の60%を動かせるほどの人材ですよ!?それをすべて投入なんて・・・」
「それに太平洋などの警備はどうするつもりです!?!」

「中東では補給もままなりません!大部隊で行っても餓死者が増える可能性も・・・」

一度に多くの反対意見がでた。
この場にいる将兵のほとんどが反対をしていた。

「黙れ!!!」

その反対派の意見を一度で社長は静めた。

「補給に関してはこちらから輸送機を大量に出す。警備は最低限の戦力で行う。・・・こちらが大移動を行えば連中も対応するはず。連中とて戦力的には厳しいものだろう。」

「しかし負ければこちらの被害が・・・」
「戦う依然に負けを考えているのは致命的だな。」

社長の言葉に反対派の将兵たちは俯く。

「それにゲルレレ、そして我々が動きときいたら・・・フヌケどもも動くに決まっている。いざとなれば連中のほうに敵を集中させ、その間に拠点を奪えばいい。」

ちなみにフヌケとか「旋律の剣」のことらしい。

社長の考えに若干戸惑い気味でもあるが、一応将兵たちは落ち着いてようだった。

「・・・話を続ける。」

「はい。・・・ですね、中東を攻略する際には多くの部隊を分割して・・・」

螺旋の剣でも一部はこのことはすでに知らされ、そして現在に至るまで中東へ応援をよこしていた。そして最終段階として、大移動をさせることでゲルレレたち、そして旋律の剣をも中東におびき出す。

これが螺旋の剣の考えだった。

・・・しかしその情報はすでに漏れていて、ゲルレレたちはすでに螺旋の剣を迎え撃つ準備が整っている、とは誰が思っただろうか・

・？
そして旋律の剣は逆にこの「螺旋の剣」を盾にしよう、と考えていたら……？

再び旋律の剣関東司令部。

「我々関東司令部はあくまで中東に増援をだす、ということだけであり作戦そのものは立てていない。作戦は中東司令部のほうできてくれ。」

そういつて竜胆は下がった。

「基地司令。」
「なんだ、不死鳥。」

すると不死鳥が手を上げて質問をした。

「……ここにいる者は全員中東遠征ですか？」
「ああ。」
「……初心でも？」
「ああ、そつだ。」

初心というのは紛れもなく俺のことなんだろう。

正直俺は銃の使いこなしもできていない。

明らかに足手まといになるだろう。

「拒否権はない。この中東戦で螺旋の剣よりも早く石油施設を攻略すれば連中の面目は最低限にまで落下する。」

俺はその言葉に疑問を感じた。

旋律の剣と螺旋の剣、対ゲルレレ用組織として2つあるというのは前にきいていたが・・・なぜ同じ人間同士なのに対立するのであるのか・・・？俺にはそこが理解できない。

「他に質問は？・・・なければ解散。」

すると皆は各自歩き出し、自らの部屋へと向かう。

・・・おそらく荷物の整理などをするのだろう。

「なおこの増援は我々関東司令部だけではない。多くの部署から増援が中東に集まるだろう。・・・これまでにない大きな戦いになる

が、1人でも無事にここに帰ってきてくれることを願っているよ。」

最後に竜胆はそういって、ゆっくりと基地司令室に戻っていった。

その頃、中東では時間が動いているときでは人と人が、時間がとまっているときでは人とゲルレレが激戦を続けていた。

その中東で一際大きな石油関連施設がある。

人々は単に攻略ポイントAと呼んでいる。

ここはゲルレレたちの本部となっていた。

そこにゲルレレの増援先遣隊としてやってきたインドラ男爵が到着していた。

「で？現状はどうなの？」

「現在は味方も敵も消耗戦となっています。すでに32区間は陥落、その地区の部隊はバラバラとなっています。しかしこちらは新たに13・54地区を攻略しました。ただ空襲がひどく、この施設にも毎日敵機が空襲にきています。」

その答えにインドラは目を細める。

「ただ空襲にくる敵はほとんど撃ち落していますので、連中にもそれなりのダメージが・・・」

「空襲にくる航空機はいくら撃ち落しても意味がない。・・・叩くべきはそれを飛ばしている母体だ。」

外の様子を見るため、廊下を静かに歩きながらしゃべる。

廊下には、すでに負傷しているゲルレレが多くいて応急手当てが行われているようだが、間に合っていない様子でもある。

それから窓をあけて、基地全体をインドラが確認する。

「・・・ここは無人機が多いな。」

「はい、将軍が大量にもってきてくれるので。」

外には無人で動く対空砲が大量に設置してあった。

その姿はもはや「石油関連施設」などではなく、「防空要塞」と化していた。

ただ通常の人間にはその対空火器が見えない。

しかし螺旋の剣や旋律の剣のような対ゲルレレ組織の者からすれば丸見えもいいところだった。

「・・・とりあえず今は負傷者の手当てを最優先しろ。あと1週間

後には連中が本気でせめて来るぞ。」
「はい!!」

インドラがこの防空要塞に見惚れるかのように眺めていると、彼の部下である羽根つきの高機動ゲルレレヒューターのうちの1体がやってきた。

「どうだった？」

「連中の防衛陣地も強固です。さらに新たに滑走路を追加している様子もありました。また黒海には艦隊がウヨウヨしています。」

「すでに結構な量じゃん、これでまだ増えるとか冗談もほどほどにしてよねって感じだよな。」

彼は呆れ顔をしてから羽根を広げた。

「どちらへ？」

「第3機動師団にも出撃命令を出してくる。第1・第2じゃ足りそうもないからな。」

インドラは人の中東の戦力を軽く見すぎていた、と後悔した。

・・・中東総力戦まであと1週間。

「中東遠征命令？」
完

中東への移動

アメリカの五大湖周辺。

そこには世界有数の工業地帯が多数存在している。

ここはその五大湖周辺の工業地帯のうちの一部。

・・・実際ここは正確な場所はほんの一部の人間しか知らない。

そのほんの一部の人間のうちの1人である男・・・

「螺旋の剣」の最高責任者であるアーネスト、そして彼の秘書は細い廊下を静かに歩いている。

前には白い服をきた、まるで博士か研究員か。そんな服装をした男性が歩いている。

やがてまっすぐに細い廊下を歩いていると1つの扉が現れる。

どう見ても「金庫」かなにかに使われるような非常に分厚く重そう
で頑丈な扉だ。

そこで白衣をきた男は網膜検査・指紋検査・肉声検査・生年月日入
力・暗証番号入力を行う。

暗証番号だけでも桁数は18桁。
非常に厳しい検査だ。

「暴君に対する反乱は神への服従である。教育とは本性を新しい人
間に接木することであり、人間の本性の中にあるねじまがった悪い
ものを美德や社会的に価値ある資質に改善することである。」

最後に肉声検査とは別に合言葉をいって、ようやく重たい扉は開いた。

ちなみにこの合言葉、第3代アメリカ合衆国大統領である「トマス・ジェファソン」の言葉である。

そこを超えると、今度は廊下の両端には気をつけの姿勢をした警備員が何にも立っている。

手にはアサルトライフルやショットガン、腰には何丁もの拳銃と手榴弾。

警備にしては過剰とも思えるレベルだった。

「……ここはいつきても息がつまりそうになるな。」

ここまで無言で歩いてきたアーネストがやっと口を開いた。

「ま、ここは実際地下ですからね。地上に比べると空気が薄いかもしれません。」

「……」
「でもご安心を、社長！地上とはパイプをつたって……」
「……もついい。」

彼は本当に空気が薄いから「息がつまりそう」といったのではない。

アーネストはただただ呆れ、秘書はめがねをかけなおした。

「さっ、つきましたよ、社長。」

おそらく最後の扉と思われる扉を開くと、そこは非常に大きな倉庫のような場所となっていた。
その中心には巨大な鉄の塊がおいてあった。

「……これが卯月社に特注したTNK-Vか？予想より大きいな。」

アーネストは目の前の巨大な鉄の塊を見上げながら言う。

卯月社……

卯月財閥グループとも呼ばれているこの会社は現在急激な成長を見せている会社である。

「卯月社は“我が社のテクノロジーを最大限に駆使した”といつてきています。」

「……」

しかしアーネストの顔は浮かない。
というのも特注したものの条件のうちの1つには「通常の戦車の2倍程度の大きさ」というのもあった。

しかしながら目の前の巨大な鉄の塊は注文よりはるかに大きいものと仕上がっていた。

「大きさは少しアレですが、防御面は完璧。AGM-65マーベリック（空対地対戦車ミサイル）ですらひび1つつきません。」

白衣の男性は自分が作ったわけではないが、まるで勝ち誇ったかのように言う。

「主砲は戦艦大和型の主砲と同型の45口径46cm3連装砲を搭載。副砲はMk45 Mod4 5インチ60口径単装速射砲を前部に2基、後部に2基、さらに後部にはミサイル発射口もあります。」

その見た目は若干ソ連軍の多重砲塔戦車である「T-35」に似ていないこともない。

また速射砲が前部・後部にあるため死角もほとんどない。

そのあまりの兵装ぶりと大きさはまさに“陸上戦艦”というに相応しい武装だった。

「ま、強いて欠点をいえば動きが遅いことと、このでかさですから倉庫に入りませんね。」

白衣の男は皮肉をこめて苦笑する。

「・・・それで？卯月社は今、何台完成させてる？」

「現在14台です。あと1台が完成間近らしいです。」

「あと1週間で完成させる、と伝えておけ。」

そうアーネストがいうと、白衣の男はメモをとって頷いた。

それから再び歩き出し、今度は妙な形をした兵器のところへと連れて行く。

「これが紅蓮社に特注しておいたSFRシリーズです。」

紅蓮社というのも現在成長中の会社のうちの1つである。

卯月社と紅蓮社が今、伸びている大企業のツートップとなっている。

「これは1台1人乗りの人型戦闘兵器です。」

正直さきほどの戦車からしてみれば豆粒のようなレベルの大きさである。

高さ的には装甲車の2倍、といったところか。

「この兵器の最大の特徴はミサイルが腕内収納型で、発射は腕内部トリンライ・ウエボンでの回転式装填装置機能が搭載されているということです。」

トリニティ・ウェポン機能は紅蓮社が独自に開発した装填装置だ。リボルバーのような回転式のものだが、形は三角で角部にミサイルがついている。

そのため、ミサイル攻撃をするときは三角部の一部は必ず露出する必要がある。

1発発射するところの三角が回転して次の角の部分へと行く。ミサイルが発射され、弾がなくなった部分はリボルバー形式で回転して腕内部へと行き、そこで自動で装填されるという仕組みだ。

「これによってミサイルをより高速に撃ち出すことが可能になっています。」

ミサイルは全部で4箇所についている。

両腕に2箇所ずつだ。

ただ2つはMGM-140 ATACMS（地对地ミサイル）、残り2つがMIM-23ホーク（地对空ミサイル）弾を積んでいる。

ただミサイルそのものに関しては、他社に頼っている。

ただし対空ミサイルであるホークは紅蓮社が、ホークを作り上げたレイセオン社から購入し、独自に改良（小型化・SFRシリーズに搭載）をしたものである。

「副装として、ゼネラル・エレクトリック社製のM-61バルカン（機関砲）を4基搭載しています。」

それらのうち2基は腕を超え、手の部分に存在している。人間でいうならば手のひらの部分である。

手のひらの中央部は開口することができ、その内部に機関砲がある。

もう2基は胴体そのものになり、手のひら部分とは違い、常に攻撃できるようになっている。

「このしが地上戦用で、防御力・攻撃力に特化したため動きが遅いです。」

「足元に車輪をつける、とかなんか動きを早くする工夫はこなせなかったのか？」

「防御力がある分、重たくて・・・Lの重さに耐えられる車輪がなかったんです。」

アーネストは目の前のロボットを見つめつつ、軽いため息をついた。

「こつちは？」

「これらはS、空中戦と陸戦を同時にこなせるタイプです。」

「形もだいぶ違うな。」

「基本的武装はかわりませんが、背部と脚部にロケットブースターを装着してあります。」

たしかに背部には巨大なロケットと航空機のような巨大な羽がついているし、人間でいう足首の部分にも小さなロケットが大量につい

ている。

「ロケットブースターは方向転換できるようにしたので、空中格闘ドッグファイトにも強い仕様となっています。」

「ふむ・・・」

その解説にアーネストは今日始めて納得したような顔をした。

「また羽には追尾システムホーミングをより強化した、卯月社が開発した「34式誘導弾」が搭載されていますし、胴体内部には空中から爆撃できるよう空対地爆弾（500LB爆弾）も搭載されています。」

その説明をきき、秘書は秘書で必死にメモをとっている。

今後、どの点を強化して発展型兵器を作るかを発注した会社に知らせるためだ。

「地上戦では羽は背部に収納できるようになっています。ただ飛行できるようにしたために重さを軽減する必要があり、その点防御力が劣っています。」

白衣の男は細かく説明していく。

アーネストも秘書も聞くのに必死の様子でもある。

「それで今、このSFRは何機作られているんだ？」

「SFR-L、SFR-S両方で300機とちよいです。」

「それだけあれば十分だ。」

(これだけの新兵器があれば必ず中東戦は勝てる！)

アーネストは目の前の新兵器たちをみて、そう確信するのだった。

一方旋律の剣閣東司令部では皆が皆、慌しく中東へ向かうための準備をしていた。

そう、皆が皆……

……のはずなのだが……

「もってくもの？そんなの自分の命と武器だけで十分よ。」

「あ、食料もな。」

「私はパソコンがないとダメですね。」

……なんて平和な奴らだ……
悪いが信じられん……

「お前らさ、これから中東に行くんだぞ？いろいろもってくものがあるだろ？」

「ないだろ、別に。」

「てか遊びに行くわけじゃないし。」

たしかに遊びに行くわけではないが・・・

だからといって、そんなにテキストに選ばなくてもいいじゃないか。

何しろ中東だ。

国外だぞ、国外。

いったらなかなか戻れない。

忘れ物、なんていつても戻ってこれないのだ。

「さて、そんなわけだからあとは休んでようかしら。」

そういうと五十嵐は床に座り込んだ。

「俺も俺も。もう疲れた。」

まだ何もやってないだろうが！！

「じゃあ、俺も少し行って来る。」

とりあえず自由行動となつたらしい。

俺は一旦自分の部屋に戻り、荷物をさらに詰め始める。

それから30分ぐらいして、どうにか荷物整理は終わったもの。

・
まだお呼び出しもない。

時間的にまだ余裕がある、ということだ。

・・・俺はもう1箇所行っておきたいところがある。

「ご主人様、疲れているのでは？」

「騎士よ、やめておいたほうがいいんじゃないか？」

・・・あゝ、きこえないきこえない。

なぐんにもきこえないぞ。

とりあえずしゃべりまくる拳銃に弾を込める。

「・・・よし！」

弾を込め終わり、銃を構える。

・・・そう、俺が来たかった場所・・・

それは「射撃訓練場」だ。

「おい、騎士。これ以上やったら総力戦の前に倒れてしまうぞ？」
「今回は総力戦なの。．．．今のままじゃ何の役にもたたない。」

それからひたすらに目の前の的に向けて撃ちまくる。
時間がないこともあり、いつもより弾の消費が早く感じる。
リロードの時間が長く感じる。

「ま、騎士がそのつもりなら文句は言えんが。」
「そうこなくちゃ！」

弾は山ほどある。

今の俺にできることはひたすらに弾を込めて、ひたすら的に向けて弾を撃って、少しでも命中率を上げることぐらいだ。

その頃、関東司令部基地司令室では．．．

「毎回情報をくれることに感謝する。」

基地司令である竜胆、副司令である大蔵、そして・・・
この総力戦が行われる、という情報を旋律の剣に伝えた情報屋「市
村」がいる。

「いや、情報屋の俺としては旋律の剣さんが一番のお客さんだから
ね。俺たち情報グループ「シエルター」がやっていけるのも全部
旋律の剣さんの支援金があるからなんだよ？これは当然のことだよ。

市村は頭を下げ、感謝の意を示す。

シエルターは開設以来、今までずっと旋律の剣に情報を渡してきた
情報グループだ。

旋律の剣からすれば、いまやシエルターの情報なしではほとんど動
けない状況に陥る、といっても過言ではないほど大きい役割を果た
していた。

「・・・悲しいことに同じ情報屋には「螺旋の剣」や時には「ゲル
レレ」にもいるんだけどね。皆、旋律の剣に情報を渡せば、一方的
勝利ですべてが終わるつつうのに。」

「そついうもんだ、情報屋というものは。」

竜胆は苦笑して言う。

「じゃあ俺はそろそろ新たな情報を探すために出るよ。」
「ああ、了解した。」

そういつて彼は出て行くとする。
しかし、扉の前でいきなり立ち止まった。

「あ、悪い。久々にここにきたし、少し見学していつてもいいかな？」

「ここは最重要機密の塊です。・・・が、大蔵。」

「はい。・・・この私もお供します。どうかお気を悪くなさらずに。」

「いや、見学させてもらえるだけで十分だ。」

そういつて2人は部屋を出て行った。

それから2人は話しながら、廊下を歩いていく。

「では、今から皆は中東は？」

「はい、ほとんどの戦力は向かうことになります。」

「なるほど・・・だから人がいないんですね。」

市村は納得したかのように深く何度も頷いた。

「皆荷物の準備等を行い終わった後で疲れていると思われまますので休憩しているのではないかと？」

「ゲルレレと戦う勇ましい戦士さんがそんなことでバテちゃ困りますな。」

「まったくで、ハハハ。」

そんなこんなで2人が歩いていると、銃声が聞こえた。

「ん？」

耳をすませてみると、今は誰もいるはずのない射撃訓練場から音がきこえていた。

「ここからですな。」

ドアを開けてみると、そこには1人の青年がせつせと弾を込め、せつせと銃を撃っていた。

「ふう……」

やれやれ、さつきより距離が縮まったと思って気を抜けば、また広まった……

これだから拳銃は嫌いなんだ。

そんなことを思っていると不意に肩に手をかけられる。

「うわっ!？」

「よっ、青年。」

「西野くん!？」

目の前には大蔵副司令と・・・

どちら様だかよくわからないお方がたっている。

「どうも、大蔵副司令。」

「出発前なのに頑張ってるな。」

「ええ、少しでも足手まといにならないように練習をこなしておかないと、と思ひまして。」

そんなことを言いつつも流星に弾を入れてると・・・

途中から手のひらに弾をのせられた。

「きみとは初めて会うよね?」

そのよく知らない方が乗せてくれたのだ。

「はい。えっと・・・失礼ですが、どちら様ですか?」

「俺は市村っていうもんだ。ここに情報を渡す情報屋のうちの1人
だ。」

情報屋？

ああ、なるほど、だから中東のこととかも急にわかったわけか。彼が伝えてくれた、ということだな。

「きみも中東に行くの？」

「はい。ただまだ新米ですので銃とかも上手く扱えなくて・・・」

「大変だねえ、戦士さんは。」

軽い人だが、悪い人ではなさそうだ。

「皆は疲れて休憩中なのに、君は休まなくていいの？」

「いえ、大丈夫です。休むほど疲れてもいませんしね。」

「いいねえ、やる気がある子っていうのは。努力は必ず報われるよ？」

「・・・だといいんですけどね・・・」

なんて俺は下手な笑みをうかべる。

何しろここ最近は特に頑張って努力してきたがまったくのびないのだから。

正直なところ、ホントに努力が報われるのか不安でもある。

「・・・」

それから銃を再び的に向けた。

よく狙って・・・撃つ！

ちょうど引き金をひいた瞬間だった。

「また」別の人がきたようだ。

ドアが開いた。

「あ、こんなところにいた!!」

「・・・!!」

この声からして五十嵐であろう。
だがそんなことはどうでもいい！

それより衝撃的なことが目の前でおこっている。

「・・・あたった・・・」

俺の撃った弾が綺麗に的のど真ん中を貫いている。

「あんだねえ、何こんなところで遊んでるのよ!」

が、俺はそんな初命中に喜ぶ間もなく手首を強く握られて、引っ張られていく。

「ちよつ、痛いって!」

「時間がとまったのよ、この大マヌケ!」

「時間?」

「移動する時期は時間がとまっている今しかないんだから早く走
りなさいよ!」

・・・そういえばついこの間に聞いた気がするな。

なんでも皆の力は時間がとまっている間にしか使わないって・・・
時間がとまっている間じゃないと、変に時空に重みがかかってより
大きなゆがみをつくっちゃう・・・
だとかなんとかいってたな。

・・・そのときちょうど眠くて、ほとんどきいていなかったが・・・
とりあえず大きな力を使えるのは今しかないということだ。
つまり中東への移動もその大きな力を使う、ということになるらし
い。

・・・あれ、ということとは・・・?

「お・おい!中東には飛行機とか船で行く、とかそういうのはない
のか?」

「は?あるわけないでしょ。早く走りなさいよ!...」

なんだよ、チクショー・・・
無駄に期待した俺が馬鹿だったということか。

集合場所である集会場へといくと、もう皆は集まっていた。
というか、俺が最後だった。

「よっ、遅かったな。」

島風があくびをしながら言う。

「こいつのせいで私たちだけ置いていかれるところだったわよ。」
「・・・ごめん。」
「てか時間が止まったことに気づかなかったのかよ・・・」

島風は大あくびをしながら言う。

「気づかなかった・・・」
「やれやれ・・・」

そんなことを思っていると、あることに気づく。

「あれ、不死鳥は？」

こ・これはもしかして遅刻か!?
俺以外にも遅刻者がいたりするのか!?

「不死鳥ならあそこだぞ?」

島風が指差す方向を見ると、熱心にパソコンのキーボードを打っていた。

「よし、プログラムは完了です。30秒後にとびますよ?」

そついうと彼はこちらに走って戻ってきた。

「・・・なあ、飛行機や船じゃなかったらどうするんだ?」

「空間移動よ。」

「・・・は?」

・・・やべえ、久しぶりにびっくりしちまった・・・
ついつい聞き返してしまった。

「空間移動よ、空間移動。」

「・・・」

戦力集中(表) (前書き)

これは不死鳥視点の物語です

戦力集中（表）

目の前の光が消えた。

ようやく目が開けられるようになったとき、日本の関東司令部にいた我々は中東の地にいた。

「……マジかよ……」

皆が「当たり前」といった顔をしている中、1人だけ周りをキョロキョロと見渡している者がいる。

西野 騎士だ。

皆が当たり前と思うように普通のそぶりなのも、もうありふれた光景だ。

故に彼のような反応を久々に見るわけで……

全くをもって自分の技術の素晴らしさに惚れ惚れとする。

「今回もご苦労だったな、不死鳥。」

「いえ。」

隣に今回の関東司令部からの援軍部隊のリーダーである「若本」は言う。

「・・・皆、ここからは車で移動だ。」

私自身が独自に開発した移動法・・・

自分たちの力を最大限に生かし、計算に計算を重ねて編み出したこの移動技は極めて高度な技だ。

したがって私のような、前衛というより後衛からの支援タイプの力をもった人間にもかなりの上級者しか扱えない仕様となってしまうていた。

・・・今後の課題はこれを以下に簡潔にし、皆の身近な技へと変換できるか。

それが成功すれば、今まで以上に増援の移動が楽になる。

・・・すべては旋律の剣の繁栄と勝利のために。

「・・・車？」

「ああ、ここが合流ポイントとなっている。」

ただ現在は時間が通常に流れている。

大きな力は使えない上に・・・

これは一種の「電話」と考えてもらえるとありがたい。

簡単にいえば「逆探知」される可能性がある。

^{ゲルレレ}敵たちだつて馬鹿じゃない。

本拠地への足跡を残せば、そこを陥しにくるだろう。

本拠地さえ落とせば、前衛への命令は途絶し混乱に陥るのだ、これ

ぐらいの考慮は当たり前だ。

「・・・来たか。」

すると、ようやく車がやってきた。

砂漠のど真ん中で立ち往生させられるこちらの身にもなって欲しいものだ。

「中東司令部の連中め、こっちが援軍にきてやってるっつう感謝の気持ち足りてねえんじゃねえのか？」

若本は顔をしかめて言う。

・・・集合時間、そしてここに集合ということを決めたのは中東司令部の連中だ。

拳句に、こちらは時間通りにやってきたというのに、あっちは3分ほど遅刻している。

「今は各地から部隊が集まってるんです。・・・中東司令部も忙しいんですよ。」

私にも不満はある。

だが、ここで文句をいっても何も変わらない。

私は心の奥底でため息をつきながら、横で顔をしかめる若本を宥める。
る。

やがて我々を中東司令部に案内するためにやってきた車列は目の前に、まるでタクシーのように停車する。

「へい、中東タクシーです。お客さん、目的地はどこでしょうか？」

先頭の車両から1人の男がやってきて言う。

・・・相変わらずだ、彼も。

「ふざけんな。てめ、遅刻だよ。」

若本が怒りをあらわに目の前の男に向かって言う。

「おいおい、こっちにも事情があんのよ。何しろこんなところだぜ？車で移動とか上層部は馬鹿だろ。」

・・・これでも一応軍事組織に近い組織なのだ、旋律の剣というの
は。

・・・本物の軍隊なら上層部への悪口は厳禁である。

「だから基地司令にいつてやったのよ、ヘリを使わせるってな。ところが愛しのヘリコプターちゃん全部出計らつてるとよ。やってられっかつつゝの。」

「言い訳はいい。とつとこのくそ熱い場所から移動させる、リレイブ。」

リレイブ・R・シュレー。

中東司令部の切り札である、「グレーデウス」のリーダーだ。

・・・ま、こんなどうしようもないアホだが、腕だけはたしかだ。

これほどの男にまで、迎え人の役目を役目を押し付けてるんだ。

・・・そうとう増援を迎えに行く人手が足りていないように見える。

・・・本来なら常に前衛でドンパチやっているような男なのだが。

若本はため息を文句をたれつつも、車に乱暴に乗る。

「おいおいおいおい！！車は中東でも貴重な移動手段なんだぜ、もつと優しく扱ってくれよ。」

・・・実際旋律の剣のメンツには移動手段は各自いろいろあって・・・

島風のように、場合によっては車より早く移動できることだってある。

したがってそんなものに頼る必要は基本ないのだ。

・・・戦闘に関しては、我々は螺旋の剣と違い、時間が流れているところでは戦わない。

時間が止まったときのみ戦うので、力を使わないときのほうが珍しいのだ。

「皆も各自車に乗ってください。」

「不死鳥、てめえはもちろん俺の車だよな？」

「・・・リレイブ中尉、私には松代本拠地からの命令を継続中・・・」

「るっせえ！命令なんて知ったことか。どうせ上にいるのは馬鹿しかいねえんだ。乗らねえなら力づくで乗せるぞ！」

・・・彼はもちろん前衛タイプの人間だ。

私のような支援タイプの人間がまともに戦っても勝てるはずがない。

ちなみに本拠地は日本の長野の「松代」にある。

松代のどこにあるか、まではさすがに知らない。

というか、我々前線の兵士にとって本拠地の場所なんて知る必要がないのだ。

故に本拠地の連中は本拠地の場所を秘密にしているが、だいぶ前に

「松代」にある、という噂が流れ・・・

それから前線の兵士が本拠地を呼ぶときは「松代」となった。

「・・・わかりました。」

そうして、皆は私が先頭の車に乗ったことを確認すると、後車に乗り始めた。

やがて全員が乗ることを確認すると車列は動き出した。

「……あとどれくらいでつきますか？」

「ああ？……どうなんだ？」

リレイブは運転手に聞く。

「……リーダーならそれくらい把握しておいてもよいだろうに。」

「あと20分です、中尉。」

「悪いね、レイル。」

運転手であるレイル軍曹はチームでも特にリレイブを信頼している部下だ。

「あと20分だとよ。」

「さつききた。貴様は昔から無駄口ばかり多いな。」

「若本もかわってねえじゃねえか。」

2人が再開したのは何年ぶりだろうか……

実際中東にここまでの戦力を送る、なんてことは前代未聞だ。

・・・というのも、我々旋律の剣は先ほども言ったとおり、基本的に乗り物を使わない。
乗り物を使わなければ、動力源となるものも必要ない。
中東には石油があるから、螺旋の剣は必死こいて攻めているわけだが・・・

我々には正直メリットがないのだ。

「しかし妙ですね。なぜまた松代のお偉いさん方は中東に戦力に戦力集結を？・・・中東はメリットがない、とかで撤退案まででていたじゃないですか。」

それをきき、リレイブはため息をついてたばこを加えながら、こちらを見る。

「吸うか？」

「・・・私はまだ未成年です。」

「硬いこというな。」

「日本では未成年の喫煙・飲酒は厳禁です。」

「戦場にはルールなんてねえんだよ。・・・郷に入っては郷に従え、日本の言葉だろう？」

どうせ最初からそういうつもりだったのだ、彼は、
どうせ断っても強制で吸わされることになる、いつものことだ。

「1本もらいます。」

「俺ももらおう。」

それから若本もたばこをとった。

「ほら、ライターだ。」

リリースはこちらにライターを投げた。

・・・なかなか高価なものだ。

ま、実際たばこに火はつけるものの、吸ってはいない。

・・・ふかしている、くわえている、というのが現状だろう、私の場合。

実際ここにきても、日本のルールを破るつもりはないし、今後もたばこに関しては吸うつもりはない。

「それで？撤退案がでていたでしょう？」

「それが螺旋の剣とゲルレレの連中がでかい花火をあげるってきいた瞬間、中東司令部の上層部の馬鹿は“ここで我々も参加しなければメンツが潰れる”とかいって松代に増援要請をしたんだよ。」

・・・しかし撤退案をだしたものの松代だ。

松代はそう簡単に一度いったことはかえないはずだ。

「そんなの、通るわけが・・・」

「そう、却下されたんだよ。」

彼は煙をフワツとつかべて、徐々に上へと上げりつつも消えていく煙を見上げて言う。

「ならなんで・・・」

「それでこつちの上層部はブチ切れて、松代に猛抗議。最終的に“増援をくれないなら全滅覚悟で中東部隊は前進する”とかいって、松代も諦めたらしいぜ。」

・・・信じられない。

一部署が、本拠地の命令に逆らうなんて・・・

「ぶつちやけ中東が一番螺旋の剣の連中との仲が悪いって話だからな。」

若本はため息をついていう。

ま、全体的に仲は悪いけど・・・

「中東司令部の上層部にとって螺旋の剣が動くのに自分たちは見ていられるだけ、というのが耐えられなかったのだろう。」

若本はそう推測するが、おそらくそれはほぼ確実に正しい答えであ

るう。

「アホか。」

リレイブは上層部への不満に皮肉をこめて言った。

「……俺たち前衛の兵士たちは皆、こんなメリツトのない戦いやめて自分たちの祖国の戦線で戦いたいって思ってるのにそれらはぜくんぶ無視だ。……ホント、信じられねえほど上層部は馬鹿だぜ。」

彼はため息をついていう。

そのため息はタバコの煙で白くなっている。

288

「……中尉、上層部への陰口は軍法会議ものですよ?」

「ああ?バレなきゃいいんだよ、バレなきゃ。」

リレイブの言葉にレイル軍曹は呆れた様子をしている。

「てなわけで、螺旋の連中がやらかしてくれたおかげで撤退案はパアだ。素晴らしいね。」

「……中尉……」

「バレなきゃいいんだって。どうせ間違っではないんだ。……フレイバーの連中も大してかわんねえんだぜ?」

フレイバーといえば、もと島風がいたチームだ。

フレイバーも中東専門の部隊だったな。

・・・ただ先日の「エンゲージ・リング龍王の盾」の奇襲で大活躍した・・・とか。

「フレイバーの被害はどうなんです?」

「ありゃひどいな。・・・あの時はちょうど俺らはエリア63を落とすところであつた。喜びをした。」

「!?!」

彼のひどい、という言葉に意外さを覚えた。

あの件に関しては報告書で読んだな。

エリア63の敵部隊は異常に少なかった・・・と。

最初、グラードウス隊は「ラッキー」と捕らえたいが・・・後に緊急命令が入る。

“司令部に向け、敵の大部隊が接近中、至急帰投せよ”と。

「俺たちが緊急司令レット・アウトを受けて、もどつたときにはあのザマだ。・・・迎撃部隊のほとんどは壊滅。寸前のところで司令部は守られた。」

その迎撃部隊の中心部隊だったのがフレイバー・・・ということだつたらしい。

だがそんなことは報告書には載っていないかった。

「おい、そりゃ報告書と違うぞ。報告書にはフレイバーが大活躍して「エンゲージ・リング龍王の盾」の1人を討ち取った、としか……」
「だろっな。」

この件に関しては若本も知らなかったらしい。

だが私たちの反応は彼は“当然”といった反応で応えた。

「……なぜ味方の被害を載せなかったんです？」

「あのなあ……フレイバーはうちの部署のエース部隊だ。んな連中が壊滅寸前なんて書けば、一気に部隊の士気は落下する。」

だからといって、都合の良いことしか報告書に書かずに松代にまで報告する……
なんてどうかしている。

「……おそらく松代は先日の事実を“完全勝利”と高たかを括くくっていたのだろっ。

だからこそ、今回の作戦を許可したのだ。

「だからといって松代にまでそんな報告をするのは……」
「それが中東司令の上層部のやり方なんだよ。……な、馬鹿だろ？」

彼は皮肉を込めて苦笑した。

ちなみに中東司令部はその後、移動した。
相手に場所がバレたのにそのままなんて無防備すぎるからなのは言うまでもない。

そしてそれが現在向かっているところでもある。

やがて、外をみると前方に町らしきものが見えてくる。
ところがその町を迂回するかのような起動を車列は取り始める。

「レイル、突っ切れ。」

「え！？ですが・・・」

「後ろのお客さんたちも司令部に何よりも早くつきたがってる。客の機嫌をそれ以上損ねちゃまずいだろ？」

彼はそういうと、レイルのもっているハンドルを横からつかんで、まわした。

そして、さらにはレイルの足の上からアクセルを思いっきり踏み込んでスピードを上げる。

後ろの車両たちは“待ってました”とばかりに機動をかえ、ついてくる。

それから車列は猛スピードで街中を突っ切っていく。

外を見渡すと・・・

「ん？」

今、人影が見えた気が・・・

そんなことを思った瞬間に、いたるところからまるで豪雨のような激しい銃撃をうける。

「なっ!？」

「大丈夫、この車はそういうのを想定して作られてる特注よ!」

実際この車はジープだしな・・・

・・・後ろの車両たちは大丈夫だろうか。

「ま、念には念を・・・だ。お客さん、頭を下げててくださいな、撃たれても当社は責任は一切とりませんよ?」

「ざっけんな、てめえ!」

若本は再びリレイブにブチ切れる。

・・・これは切れてもいい。

おそらく連中は中東のゲリラたちだ。

私たちが乗っている車はジープだから、おそらくは多国籍軍の部隊と勘違いをした、といったところだろう。

すると、後ろから2台目の車がさらにスピードをあげて先頭車両であるこの車の横に並んだ。

「スファアーニ少尉・・・やる気か？」

「スファアーニ少尉・・・」

リレイブは笑みをうかべ、レイルは“最悪だ”と言わんばかりに深いため息をつく。

「さあ・・・デスレース開催だぜ！」

その頃、紅蓮社本社。

1人の男が社長室にノックを入れて、社長室に入った。

「ああ、きみか。」

社長は副社長である“彼”を快く迎え入れた。

「どうしたんだね、フリーユージェル。」

その“彼”というのは信じがたいことに「エンゲージ・リンク龍王の盾」であるフリーユージェルだった。

「石油の件に関して報告があります。」

「ほう？増えたかね？」

「いえ、むしろ減少しています。．．．やはりテロリストたちによる行動規制が大きいと思われれます。」

現在中東部を占拠しているのは、フリーユージェルの部隊が大多数だ。フリーユージェルはその石油を大企業である紅蓮社へと受け渡すことで、副社長の座を得ていた。

表向きには中東諸国の石油富豪たちと仲が良い、ということになっている。

それは社長自身もそう思っている。

そのため他企業からは紅蓮社はまず潰れることはない、とまで言われている。

だが実体は人間にとって危険な存在が実力支配しているものを受け取っている、というものだった。

それを知っているのはフリーユージェルと彼の部下のみだった。

「それに関して中東に展開している多国籍軍から頼まれたよ、新兵器を開発してくれ、と。試作で2種類の兵器を10台作った。それが公式化されればテロリストなど一瞬で消し去ってくれる。」

社長はそう認識している。

だがそれは本当は正規軍などからの依頼ではなく、正規軍に成りすました螺旋の剣からの依頼だった。

そして10台しか作っていないと報告されている兵器は実はすでに300台も量産されている。

それは「財閥」だからこそその欠点でもある。

おおまかにいえば「紅蓮社」の配下の会社でも、所詮は配下で一体化しているわけではないのだ。

報告をごまかし、「紅蓮社」の配下の工業組織のうちの一部が量産していた。

その工業組織はおそらく螺旋の剣の存在を知っている組織。事情を知っているからこそ、量産している。

「その兵器については、すでに試作を作り上げた社から報告を受けています。……ただ……」

「ん？」

フリーゲルはもはやこの社にいない存在だった。

というのも、社長ですら大体しか把握できない組織の全体部を、彼は細かにまで把握し、いたるところにまで飛び回ってアドバイスをプロジェクトを進めている。

社内では“天才”なんて呼ばれていたりもする。

そんな天才を社長も最大限に信用していた。

「どうした？」

「設計図をみたのですが、一部不安な部分があります。」
「なに？」

「それに改善点も多くあります、まず副装で突いているバルカンはより強力なアヴェンジャー（機関砲）に切り替えるべき、などです。」

バルカンは20mm機関砲だ。

それに対し、アヴェンジャーは30mm機関砲となっていて、その威力は戦車の装甲さえ軽くぶち抜く。

「ま、改善点に関してはパツと浮かんだだけなのですが。」
「報告では規模的にアヴェンジャーは無理、ときているぞ。」
「正式な設計図があれば、私が搭載可能なように考えましょう。」

フリーユゲルは社長に絶対的自信をもって言う。

「……きみはいつも言うことを言うだけでなく現実に果たしてくれる。……今回も信頼しているよ、今回も任せよう。」

社長はフリユージェルに微笑んで、引き出しの奥から何枚もあるプリントを一枚ずつめくって中身を確認しつつ、探していく。

それからホッチキスでとまった2種類のプリントの束をフリユージェルに渡した。

「これはコピーだが……大丈夫か？」

「ええ。ありがとうございます。」

それから彼は軽くお辞儀をして、社長室を後にした。

(よし……新兵器の弱点がこれでわかる。)

こうして新兵器の情報はあっさりとゲルレレの手にまわってしまっていたのだ……

その頃、再び中東では……

「おら、どけどけどけ！ぶつかっても当社は保険はおりませんか
らねえ〜！」

猛スピードで多くの車両が町を駆け抜けていく。

すると目の前に1人の男が出る。

彼が肩に背負っていたものは・・・

「お？RPGか？」

RPG-7。

簡単に言ってしまうえば、ロケットランチャーのようなものだった。

武器にしては比較的安価で手に入る・・・

しかも旧式兵器にしては威力も強いため、ゲリラたちでは愛用されている武器だった。

「レイル、ハンドルは任せたぞ。いいか、スピードは落とすなよ？
スファリーニに抜かれたらタダじゃおかねえからな。」
「はっ。」

そういつて彼は自らの席の窓をほんの少しあける。

依然銃撃は激しい。
下手をしたら撃たれる可能性もある。

彼はホントにちょこつとあけた窓から拳銃だけをだして、撃ちこんだ。

その弾は見事に目の前の男性の肩に当たり、RPGの脅威は排除できた。

「よし、ハンドルかわれ。」

それから窓を閉めて、再び横からハンドルをつかむ。

肩を撃たれた兵士は轢かれるギリギリのところまでどうにかかわした。それから再び激しい銃撃のなか、この車両らは道を進んでいく。

「もうすぐゴールか。」

ようやくゴールか・・・

なんてことを思ったのもつかの間、いきなり車両がカクツと傾いた。

「連中もアホじゃねえな。」

「タイヤをやられたか。」

若本は呆れ呆れにいつて、目の前のどうしようもない男を見る。

「どうするんだ？」

「そんなの腕でカバーよ！かあ、このスリルがたまらねえな。」

タイヤをやられたことで揺れは一層激しくなる。

後ろを見れば、先ほどよりもさらにこの車が巻き上げる砂埃すなほこりは大きくなっており・・・

スファアーニとかいう者が運転していると思われる車とこの車が走りぬけたあとは砂埃しか見えない。

後ろに続いている車はライトをつけて全速力で走行しているが・・・正直後続車が可哀想だ。

いつしか銃撃もなくなっていた。

・・・おそらく超したのだろう。

「よっしゃあ！勝った！！」

そして揺れる車のなか、頭をあげて外を見てみれば・・・

前々まで町の中にいたはずが、いつしか中東にきたときとかわらな
いまわりが砂漠しかないという景色にかわっていた。

「勝ったじゃねえよ！！てめえは俺たちを殺すつもりか！？」

ようやく冷静さを取り戻した若本はリレイブに怒鳴る。

「そういうな、ショートカットを使ったこともあって、あと少しで基地につくんだぜ？」

それから意外と平和的だった。

後続車も落ち着き、皆が前とかわらない落ち着いた車列を取り戻したのだ。

それからどれほどたっただろうか。

目の前に巨大な軍事施設が見えてきた。

巨大な砲台や無数の対空砲。

よくこの短期間にこれだけの要塞を作れたものだ。

時間がとまっていて、力を使ってもこれだけのものはなかなか時間がかかりそうである。

・・・こんなものを中東に作られたんじゃ、さぞかしゲリラたちも無念であろう。

・・・ま、当然ながらゲリラたちに手に負えるものでもなく、それは目に見えている。

なので基本的には攻撃されないのだ。

上空をみれば、多くのヘリが飛んでいる。
ヘリポートに着陸しては、また飛び立つ。
普段あまり見ない光景に自分自身でもわかるぐらい驚いている。

基地内に入れば、基地内に入るための通路は渋滞していた。

「珍しい光景だぜ。しっかし……これなら歩いたほうが絶対早
ぜ。整備班は昼寝中か？」

彼はあくびをしつつ、ダルそうな顔で目の前の状況をみていった。
……その様子に「珍しい」とか「すごい」とかいうものはまった
くない。

結局彼にとっての「珍しい」は口先でしかないのだ。

「せっかく日本からのお姫様を大事に大事につれてきたつてのに。」

あの行為が“大事に大事に”といえるのであれば、世界から乱暴と
いう言葉はなくなるであろう。

何はともあれ、どうにかやっと目的地に着いたのだった……

「
完

「戦力集中（表）」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9529k/>

俺の人生は雨のち雨！？

2011年5月18日23時14分発行